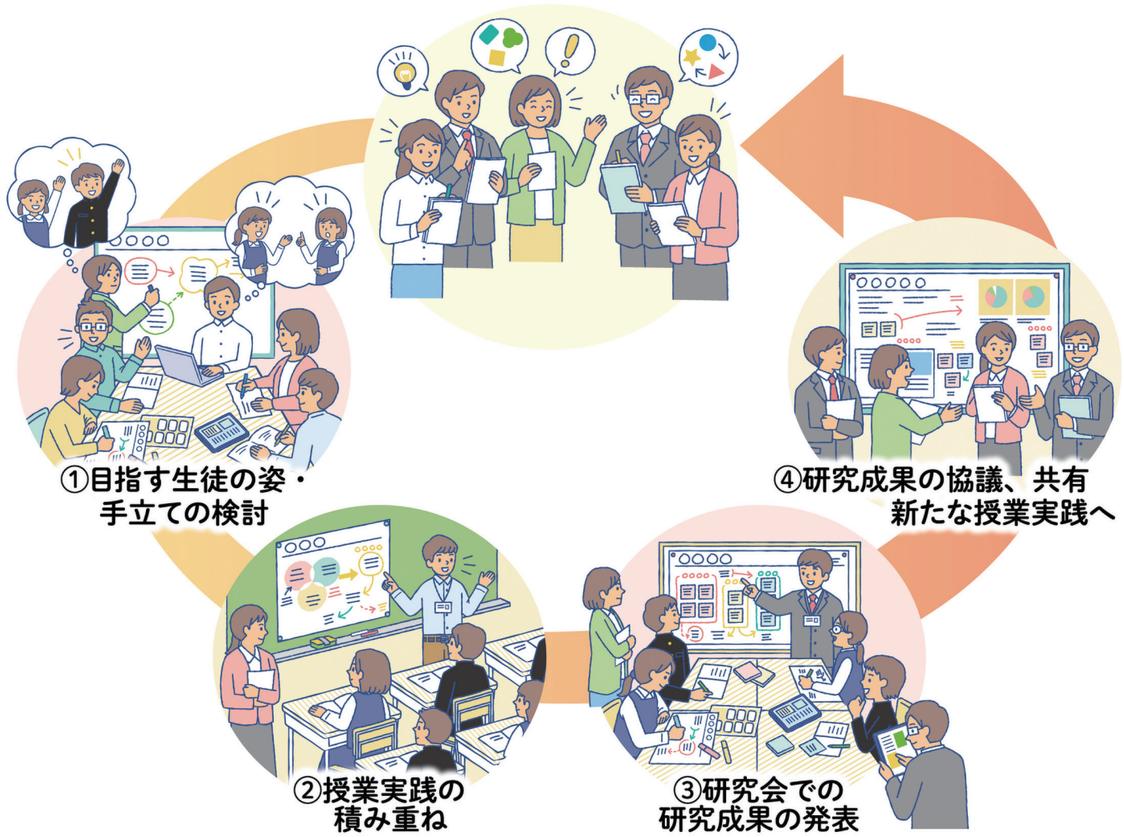
## 先生方の「深い学び合い」から、「深い学びにいたる授業」の実現へ




新潟県中学校教育研究会
Class
深い学びにいたる授業
「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して
第11号 2026年(令和8年) 10月
ISSN 2189-8111

授業情報誌 Class・深い学びにいたる授業 第11号 2026
新潟県中学校教育研究会

新潟県中学校教育研究会
指定研究の授業情報誌
第11号
2026年(令和8年) 10月

# Class

## 深い学びにいたる授業

～「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して～

- 前田　康裕 様(熊本大学大学院)による特別寄稿・「授業観と教師の学びをアップデートする」を掲載
- 教科・領域の指定研究による「深い学びにいたる授業」の提案を紹介
- 県中教研の重点「教師の学び」「生徒の学び」の取組の紹介




ISSN 2189-8111

新潟県中学校教育研究会　「教師の学び」に関する重点

# 先生方の「深い学び合い」から、

## ①「深い学びにいたる授業」を通して、育成したい生徒の姿の検討

**資質・能力との関連から生徒の姿を具体的に検討する**



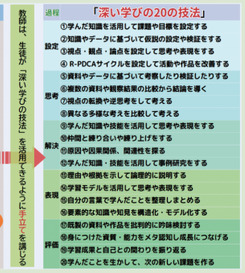
- ☑ この授業で何を深く理解させたいか
- ☑ どの知識・技能を関連付けさせたいか
- ☑ どんな場面で資質・能力を発揮させたいか
- ☑ 他の授業や生活でも活用できる姿を描けているか




先行事例の指導案、学習指導要領、生成AIなどの活用

**「深い学びの技法」を基に構成する学習過程に着目した手立てを検討する**




生徒が「深い学びの技法」を活用できるような手立てを構想
※詳細は次ページの「深い学びにいたる授業」を参照



①目指す生徒の姿・手立ての検討

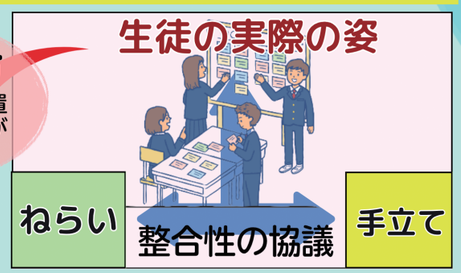


深い学

## ②生徒の実際の姿を基に、ねらいや手立ての整合性の協議

**生徒の実際の姿を基に、ねらいや手立ての整合性を協議する**

**授業の見方**
授業参観の立ち位置で、生徒の見取りが大きく変わる






②授業実践の積み重ね


後方から参観

○授業全体の様子を見取りやすい
▲生徒の反応や変容が見取りにくい


横から参観

○教師の働きかけに対する生徒の反応や変容を見取りやすい
▲立つ位置によって、一部の生徒の様子が見取りにくい


同じ生徒・グループの参観

○生徒の思考などの一連の過程を見取りやすい
▲観察する生徒の様子だけの見取りになり、他の生徒の様子との比較がしにくい

**生徒の実際の姿を見取る視点（例）**

| 生徒の実際の姿を見取る視点 | 具体的な観察内容 |
|---|---|
| 指導案で予想された反応 | 予想された反応が見られるか |
| つまずきの理由 | どこで、なぜつまずいているか |
| ねらいに迫る様相 | ねらいに迫る姿が見られるか |
| 思考の一連の過程 | どのように思考が変化しているか |
| 関わり合い | 関わりによって考えなどがどのように変化したか |

新潟県中学校教育研究会

**ホームページをぜひご活用ください**




- ☑ スマホ、タブレット画面にも対応しています。
- ☑ 「授業づくり」のコーナーでは、新学習指導要領に関する情報も掲載しています。

【URL&QRコード】
https://niigata-chukyoken.jp/

# 新潟県中学校教育研究会

【令和8年度】

会　長　長谷川　裕高（新発田市立第一中学校 校長）
副会長　保坂　修（上越市立城西中学校 校長）
副会長　玉木　暢（長岡市立東中学校 校長）
理事長　鈴木　善士（新潟市立木戸中学校 校長）

新潟県中学校教員を会員とする教育研究団体です。昭和38年に発足し、令和5年に創設60周年を迎えました。

県下に19の郡市中教研を置き、15の教科・領域部会によって研究を推進する組織です。毎年のべ18～20の郡市に、教科・領域を指定し、2年間の「指定研究」を行っています。


授業情報誌　第11号

**Class・深い学びにいたる授業**

発 行 日　令和8年10月1日

発 行 者　新潟県中学校教育研究会 事務局
〒950-0088 新潟市中央区万代1-3-30
万代シテイホテルビル
（万代シルバーホテル）3階

TEL・FAX 025-290-2251
E-mail ken-ckk@niigata-inet.or.jp

印　刷　有限会社東京プリント社
表紙・デザイン・イラスト　上村　慎吾（県中教研事務局長）

ISSN 2189-8111

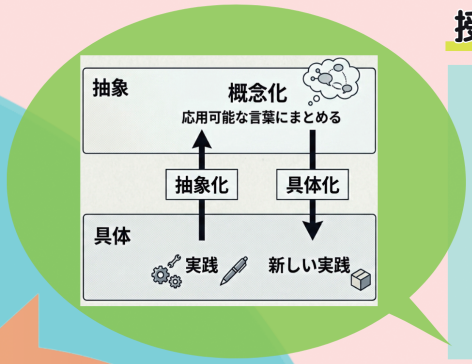
# 「深い学びにいたる授業」の実現へ

## ④授業改善に向けた新たな気付きの促進

### 授業の改善に向けた新たな気付きを得る

協議会の後半に、授業で得た気付きを、自分の授業に生かせる言葉にまとめることが有効です。具体と抽象の両方の視点から、自分の授業でも応用できる他の手立てを思考することにつながります。

[参考・引用文献]
○前田　康裕（2024）.「まんがで知るデジタルの学び❸ 授業改善プロジェクト」（さくら社）











び合い

④研究成果の協議、共有
新たな授業実践へ

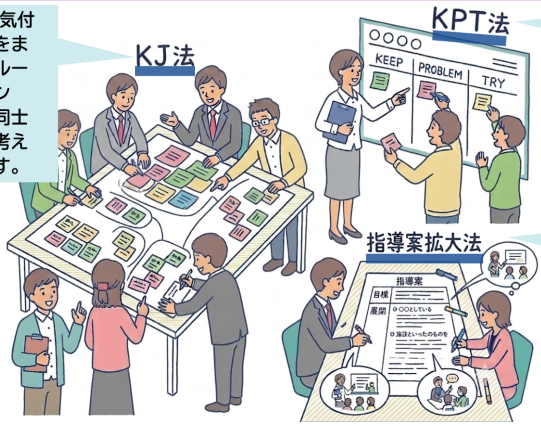


③研究会での
研究成果の発表

## ③ファシリテーションを活用した参加者の理解の促進

### ファシリテーションを取り入れ、研究の理解を深める

参観者が授業で気付いた共通のものをまとめること（グルーピング、ラベリング）で、参観者同士で新たな視点や考え方を共有できます。




協議題に応じて、観点別のフレーム（Keep[有効]、Problem[改善]、Try[代案]）を設定し、参観者の気付きを共有します。さらに、授業の改善方法も共有できます。

授業展開に沿って、教師の働きかけが、生徒の思考や行動にどのように影響したかを分析できます。また、授業者の教授行動など細かい点も分析できます。

検討会や協議会の目的に応じて、ファシリテーション（話合いを促進する技法）を取り入れることで、参加者のインプットとアウトプットの量や質が高まり、研究の理解が促進されます。参加者が自分事として、研究を捉えることができます。

### ファシリテーションの視点や司会が話し合いを深めるための問い（例）

| ファシリテーションの視点 | ファシリテーションを深める問い |
|---|---|
| 生徒の実際の姿 | 生徒は何を考えていたのか。 |
| 生徒の思考・理解の変容 | その考えはどの場面で変化したのか。 |
| 教師の手立て | その変化を生んだ教師の手立ては何か。 |
| 「深い学びの技法」と学習過程 | 「深い学びの技法」によって、生徒の知識・技能はどのようにつながり、活用されていたのか。 |
| 授業改善 | この実践から、自分の授業に生かせることは何か。 |

# 深い学びにいたる授業

## ～「深い学びの技法」を基に構成する学習過程に着目して～

## 「深い学びの技法」を基に学習過程の充実を図る

### ①「深い学び」とは？

「深い学び」とは、生徒が学習内容を獲得する中で、既有の知識や技能を課題などに関連付け、精緻化するなど、思考や認識が高度化している様相をいいます。

### ②「深い学び」に向かうためには？

県中教研では、生徒が「深い学び」に向かうために、「深い学びの技法」を基に学習過程の充実を図ることに着目しています。生徒は学習内容を獲得しながら、「深い学びの技法」を活用し、思考や認識を高度化していきます。そのために、教師はそれが可能となる学習過程を構想するのです。

### ③単元・題材や授業をどのように組み立てますか？

下の図のような学習過程で、生徒は学習内容を獲得しながら、資質・能力を存分に活用・発揮していきます。

そのために、教師は、生徒が「深い学びの技法」を活用できるように手立てを講じるのです。

学習過程を通して、生徒は学習内容を精緻化、概念化、身体化することで理解を深め、その結果、資質・能力を異なる状況でも活用・発揮できるようになります。

次の３つの学習過程に応じて、手立てとなる「技法」が下表のように整理できます。

①学習対象に対する目的や課題、見通しをもつ「設定」の過程
②課題解決を図る「思考・解決・表現」の過程
③学んだことを俯瞰したり、振り返ったりする「評価」の過程




教師は、生徒が「深い学びの技法」を活用できるように手立てを講じる

| 過程 | 「深い学びの20の技法」 |
|---|---|
| 設定 | ①学んだ知識を活用して課題や目標を設定する |
| | ②知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする |
| | ③視点・観点・論点を設定して思考や表現をする |
| | ④ R-PDCAサイクルを設定して活動や作品を改善する |
| 思考 | ⑤資料やデータに基づいて考察したり検証したりする |
| | ⑥複数の資料や観察結果の比較から結論を導く |
| | ⑦視点の転換や逆思考をして考える |
| | ⑧異なる多様な考えを比較して考える |
| 解決 | ⑨学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする |
| | ⑩仲間と練り合いや練り上げをする |
| | ⑪原因や因果関係、関連性を探る |
| | ⑫学んだ知識・技能を活用して事例研究をする |
| 表現 | ⑬理由や根拠を示して論理的に説明する |
| | ⑭学習モデルを活用して思考や表現をする |
| | ⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる |
| | ⑯要素的な知識や知見を構造化・モデル化する |
| 評価 | ⑰既製の資料や作品を批判的に吟味検討する |
| | ⑱身につけた資質・能力をメタ認知し成長につなげる |
| | ⑲学習成果と自己との関わりを振り返る |
| | ⑳学んだことを生かして、次の新しい課題を作る |

[参考・引用文献]
○田中　博之（2023）.「中学校における深い学びの在り方と これからの授業改善の方向」『新潟県中学校教育研究会　授業情報誌Class』8号, pp.6-12.
○田村　　学（2024）.「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた『個別最適な学びと協働的な学び』の充実」『新潟県中学校教育研究会　授業情報誌Class』9号, pp.6-13.
○石井　英真（2025）.「『中核的な概念』を軸にした深い学びの実現」『新潟県中学校教育研究会　授業情報誌Class』10号, pp.6-13.

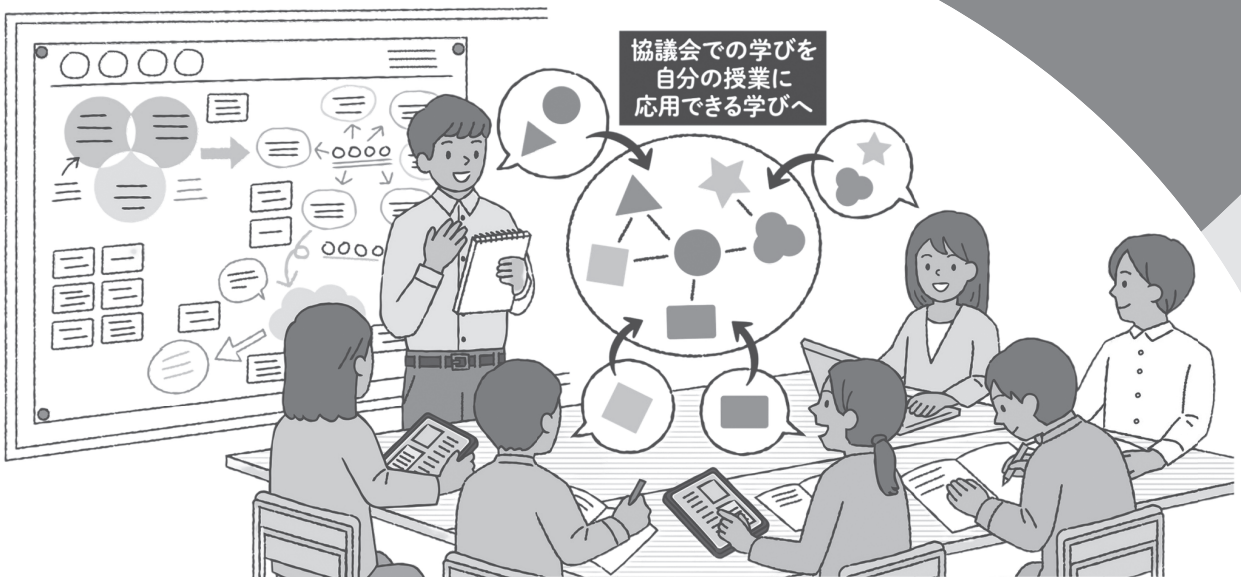
新潟県中学校教育研究会
指定研究の授業情報誌
第11号
2026年（令和8年）10月

# Class

## 深い学びにいたる授業

～「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して～

- 前田　康裕 様（熊本大学大学院）による特別寄稿・「授業観と教師の学びをアップデートする」を掲載
- 教科・領域の指定研究による「深い学びにいたる授業」の提案を紹介
- 県中教研の重点「教師の学び」「生徒の学び」の取組の紹介



授業情報誌Class第11号発刊に当たって

# これからも着実に歩み続ける　県中教研

今年度も「指定研究の授業情報誌Class」を、会員の皆様にお届けする時期となりました。これから県内各地で、２年次研究会が開催されることとなります。この情報誌Classを持って、多くの会員の皆様から研究会に参加していただき、深い学びにいたる授業づくりについて、生徒の姿を基に、参加者の皆さんで大いに語り合えることを期待するばかりです。

今回は特別寄稿として、熊本大学大学院教育学研究科・特任教授 前田 康裕 様より玉稿を賜りました。現在、文部科学省では、次期学習指導要領の改訂に向けて準備が進められています。次期学習指導要領の基本的な考え方は、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」の三本柱に基づいており、現行の「主体的･対話的で深い学び」の理念をさらに具体化し、教育現場で確実に実現することを目指しています。前田様からいただいた論文には、私たち教員の授業観や教師の学び（研修の在り方）をアップデートし、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための具体策が、図やまんが等をまじえながら分かりやすく述べられ、明日からでもすぐに実践できる内容となっております。公私にわたってご多用の中、示唆に富んだ論文をお寄せいただいた前田様に心より感謝を申し上げます。

新潟県中学校教育研究会（以下、県中教研）は、今年度63年目を迎え、永きにわたって、本県の中学校教育における研究活動の推進と、その振興・発展に取り組んできた組織です。しかも、その活動の中心が、授業改善や授業づくりに焦点が当たり、それをこの広域な本県において、全県規模で展開できているということは、よく考えてみれば、奇跡的なことであり、県中教研の取組は誇るべきものと、捉えております。

しかしながら一方で、少子化に伴う、学校規模の縮小や統廃合、これに連動する教員定数



新潟県中学校教育研究会
会長　長谷川　裕高
（新発田市立第一中学校 校長）

の変化、そして、特に音楽・美術・技術・家庭の教科における教員の減少など、今日的な課題から、これまでの取組の継続が困難となる状況が生じています。

そこで、令和５年度の60周年を一つの節目として、令和６年度に持続可能な今後の指定研究の在り方について検討委員会を組織し、具体的な改善案について、令和６年度末の拡大本部会及び評議員会で了承を得た上で、令和７年度から新しい指定研究の取組がスタートしています。県中教研は、今後も持続可能な研究活動等の在り方を探りながら、着実な歩みを進めてまいりますことを、皆様にご理解いただきますようお願いいたします。

昨年10月、村上市立山北中学校で開催された、指定研究２年次「理科」の公開授業及び協議会に参加させていただきました。授業内容は、塩化銅水溶液の電気分解（３年）の仕組みを、イオンモデルを使って説明するというものでした。生徒はこれまでの既習事項を活用し、実験結果を矛盾なく説明できる妥当性のあるモデル図を友達と対話しながら考えていました。ある生徒に自分たちが考えたモデル図の解説をお願いしたところ、その生徒は笑顔で実に堂々と説明をしてくれました。また、授業後の協議会でも参加した方々が笑顔で実に楽しそうに活発な論議をされていたことがとても印象に残りました。県中教研の事業運営で重点にしている「教師の『深い学び合い』から『深い学びにいたる授業』の実現」の具体的な姿を見ることができ、県中教研の取組が着実に進められていることに感慨深いものがありました。

最後になりますが、今年度の「指定研究の授業情報誌Class」の発行に向けて、公務ご多用の中、執筆等にご尽力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

新潟県中学校教育研究会
授業情報誌
第11号 2026

Class 深い学びにいたる授業

# 目　次

巻頭言　第11号発刊に当たって
これからも着実に歩み続ける　県中教研 …… 2
新潟県中学校教育研究会　会長　長谷川　裕高

特別寄稿
授業観と教師の学びをアップデートする …… 6
熊本大学大学院教育学研究科　特任教授　前田　康裕

《 指定研究推進郡市及び2年次研究会　会場校 》 …… 14

## 1 指定研究（２年次）の研究推進委員会が提案する「深い学びにいたる授業」

### 国語

「言葉による見方・考え方」で深い学びにいたる授業づくり …… 16
県中教研　国語部　全県部長　田中　綾子

「３年：状況の中で」～故郷～ …… 18
上越地区／妙高市中教研

「２年：作品の魅力を読み解き、自分だけの「偏愛ファンブック」を書いて
クラスメイトをアッと言わせよう」～走れメロス～ …… 20
中越地区／燕市・西蒲原郡中教研

「１年：いにしえの心にふれる」蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から
「２年：いにしえの心を訪ねる」扇の的―「平家物語」から …… 22
新潟地区／新潟市中教研

「１年：視点を変える」～少年の日の思い出～ …… 24
下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研

### 数学

交流・統合・深化された「見方・考え方」を生かした深い学びにいたる授業づくり … 26
県中教研　数学部　全県部長　古川　真哉

「３年：図形と相似」～中点連結定理～ …… 28
上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研

「３年：標本調査」～池の中の数の推定～ …… 30
中越地区／十日町市・中魚沼郡中教研

「１年：変化と対応」・「２年：図形の性質と証明」・「３年：図形と相似」 …… 32
新潟地区／新潟市中教研

「２年：１次関数」～１次関数の利用～ …… 34
下越地区／村上市・岩船郡中教研

### 道徳

対話を通して、課題について多面的・多角的に理解し、生き方について深く考える授業づくり … 36
県中教研　道徳部　全県部長　和泉　哲章

「１年：ちがいについて考えよう」C（11）公正、公平、社会正義
「２年：違反摘発」C（10）遵法精神、公徳心
「３年：カーテンの向こう」D（22）よりよく生きる喜び …… 38
上越地区／上越市中教研

「2年：松葉づえ」B（8）友情、信頼 …… 40
中越地区／長岡市・三島郡中教研

「2年：なんだろう　なんだろう～『ゆるす』ってなんだろう～」B（9）相互理解、寛容
「3年：ぼくの物語　あなたの物語」「あってはならない違い」C（11）公正、公平、社会主義
「3年：なんだろう　なんだろう～『自律』ってなんだろう～」A（1）自主、自律、自由と責任 … 42
新潟地区／新潟市中教研

「3年：臓器提供」D（19）生命の尊さ …… 44
下越地区／佐渡市中教研

## 美術

「想像」と「創造」の往還を通して、見方や考え方、感じ方を深める授業 …… 46
県中教研　美術部　全県部長　稲生　一徳

「7年：三条かってに応援団～文様バッグを作ろう～」 …… 48
中越地区／三条市中教研

「2年：地域の職人から学ぼう～和菓子から学ぶ造形美～」～デザイン・塑造・鑑賞～ … 50
下越地区／新発田市中教研

## 技術・家庭

よりよい生活や社会を創造しようとする生徒の育成
～実体験や関わりを通した、深い学びにいたる授業～ …… 52
県中教研　技術・家庭部　全県部長　藤原　　明

「2年：エネルギー変換の技術」～電気機器の安全な利用～ …… 54
上越地区／上越市中教研（技術分野）

「1年：衣生活・消費生活」～持続的な衣生活を考える～ …… 56
上越地区／上越市中教研（家庭分野）

「1年：材料と加工」～生活に役立つ製品の設計・製作～ …… 58
新潟地区／新潟市中教研（技術分野）

「2年：食生活」煮魚のおいしさを追究しよう～調理の比較を通して～ …… 60
新潟地区／新潟市中教研（家庭分野）

## 特別活動

望ましい人間関係づくりとよりよい集団活動のススメ …… 62
県中教研　特別活動部　全県部長　藤原　靖也

「いじめ見逃しゼロスクール集会」 …… 64
上越地区／上越市中教研

「学級力向上プロジェクト」 …… 66
新潟地区／新潟市中教研

## 総合的な学習の時間

身近な地域の中から自ら課題を見いだし、仲間と協働し、その解決のための方策を探る。 … 68
県中教研　総合的な学習の時間部　全県部長　小塚　忠昭

「寺泊の魅力アップ大作戦」 …… 70
中越地区／長岡市・三島郡中教研

「3年：築地地区活性化プロジェクト」 …… 72
下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研

# 2 指定研究（1年次）の研究推進委員会の進捗状況

社会 …… 74
理科 …… 75
英語 …… 76
音楽 …… 77
保健体育 …… 77
学校保健 …… 78

《自主研修紹介》…… 79

**編集後記**　新潟県中学校教育研究会　理事長　鈴木　善士 …… 80

〈特別寄稿〉

# 授業観と教師の学びを アップデートする



熊本大学大学院教育学研究科
特任教授　前田　康裕

## 1　授業観のアップデート

### ⑴　授業改善はできていますか

仕事柄、様々な学校の授業を見学することが多くあります。しかし、教師の説明によって分からせようとする授業や、一部の子どもの発言だけで展開する授業も、まだ多く行われているのではないでしょうか。（図１）




図１：教師による説明型の授業

現行学習指導要領（2017）では､「何を学ぶか」だけではなく､「どのように学ぶか」も重視しています。いわゆる「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」といわれるものです。GIGAスクール構想によって全国的に配備されたタブレット型端末も、こうした授業改善を推進するために必要な「学習の道具」として活用されるべきものなのですが、現実的には従来型の授業にタブレット型端末の使用を加えただけに留まっている授業も多く見られます。

長い間、行われてきた従来型の授業を改善することは容易なことではありません。また、高校受験のことを考えると「教科書の内容をしっかりと伝えなくては」という教師側の意識が強く働くのも理解できます。

しかし、考えなくてはならないことは、「教師が伝えれば、子どもは理解できる」というわけではないということです。

教育心理学者の秋田喜代美氏は学習科学のポイントを次のように指摘しています。※１

**指導法だけではなく学習に焦点をあてる。うまく教えれば、深い概念的理解を得るわけではない。生徒は自分の学習に積極的に参加することで初めて深く学ぶ。**

「教師がいかに指導すべきか」という授業者側の視点だけではなく、「子どもはどのように学ぶのか」といった学習者側に立った授業観にアップデートすることが求められているのです。教師は、多様な個性や特性をもった子どもたちが自ら学びに向かうための環境や仕掛けを設計し、学習方略を身に付けられる授業づくりを意識する必要があるのではないでしょうか。

### ⑵ 知識構築活動を重視する授業へ

教師がもっている知識を子どもに伝達すれば子どもは理解できるわけではありません。例えば、鎌倉幕府の将軍と御家人の関係を教師ができるだけ丁寧に教えたとします。しかし、中には天皇と将軍の違いさえ分かっていない子どももいるかもしれません。また、歴史の知識が豊富で元寇のことまで知っている子どももいるでしょう。この二人の子どもの理解の仕方は異なります。あるいは、文字や言葉だけの説明ではイメージできない子どももいるはずです。理解するためには、子どもの知識や経験、認知の特性などが大きく影響するわけです。

つまり、学習者は教師から知識をそのまま受け取るのではなく、既有知識や経験と新しい情報を結び付けながら自分なりの意味を構成するわけです。このような考え方を「構成主義」とよびます。また、その「意味を構成する」という営み自体が、他者との対話や文化、言語、道具などによって支えられていると考えることを「社会的構成主義」とよびます。現在の授業において「子どもの主体性」や「対話や協働」を重視するのは、こうした考え方が基盤となっているのです。

秋田喜代美氏は「一人一人の学習者がテキストの内容と学習者の既有知識を積極的に関連付け理解していく知識構築活動が重要」と指摘し、次のように解説しています。※１

**そのためには、読んだことを使って表現する活動、各自の理解を言語化したり図示したり、あるいは行動したりしてみるなど、可視化していくことが重要になる。自分のことばで言い換えてみることや、仲間同士で相互に説明し、分かりやすく書きなおしてみることなどが知識の活用として有効になるのである。**

こうした活動を支える道具として、タブレット型端末は大きな力を発揮します。子どもたちは自分の理解を整理し、仲間と共有することで、知識を「自分のもの」にしていくことができるのです。（図２）

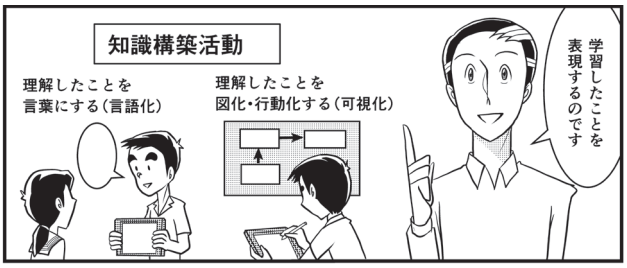


図２：知識構築活動

### ⑶ 自律的な学習を促す

ここ最近では「学習の自己調整」の重要性が指摘されるようになってきました。学習者が自分で目標を決め、計画を立て、やり方を自分で工夫･修正しながら学びを進める学習のことです。こうした学習を自己調整学習とよんでいます。

心理学者の河村茂雄氏は、自己調整学習の３要素の関係性を表しています（図３）。※２

「動機づけ」とは学習に向かって行動を起こし、それを持続させる心理的な働きです。成績向上に対する報酬や受験などを外発的動機づけと呼ぶのに対して、学習そのものが面白いし楽しいと感じることを内発的動機づけと呼ぶことがあります。

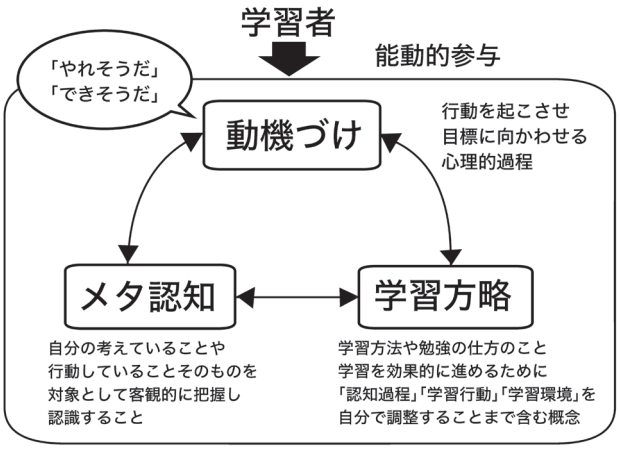


図３：自己調整学習の３つの要素

「メタ認知」とは、自分の考えていることや行動していることを客観的に把握し認識することです。メタ認知が高いと、「どうすればよりよく学べるか」と考えることができるので、自律的な学びができるようになるわけです。

「学習方略」は、学習をより効果的にするための自発的な工夫だと考えると分かりやすいでしょう。自分で単語帳を作ったり、自分なりにノートにまとめたり、気分を変えるために図書館に行ったりするようなことです。こうした工夫が学習方略なのです。

### ⑷ 学習方略の指導

心理学者の篠ヶ谷圭太氏は学習方略を、大きく「認知的方略」と「メタ認知的方略」に分けて、以下の表のように整理しています。※３

表：学習方略

| | | | |
|---|---|---|---|
| 認知的方略 | 反復方略 | 単純に繰り返す | ・覚えるまで何度も書く<br>・何回も口に出して言う<br>・繰り返し問題を解く |
| | 精緻化方略 | 既有知識を結び付ける | ・根拠（なぜ）を押さえる<br>・自分の言葉で言い換える<br>・自分の言葉でメモを取る |
| | 体制化方略 | 整理する | ・似た情報を集める<br>・対比的な情報を集める<br>・図や表で情報を整理する |
| メタ認知的方略 | モニタリング | 自分の学習をチェックする | ・自分で自分に質問する<br>・どこまで理解できているかチェックする |
| | プランニング | 計画を立てる | ・勉強の計画を立てる<br>・勉強の目標を設定する |
| | コントロール | 自分の学習を調整する | ・重要なところに注意を向ける<br>・読む速さを調節する |

認知的方略とは、正に「学習するための学習のやり方」のことをいいます。ここでもタブレット型端末は威力を発揮します。情報を自分の力で集めたり、理解したことを図や表にして整理したりできるからです。また、グループ内でそれを伝え合うことで理解が深まるからです。また、協働的な学びを行うことで、精緻化や体制化といった認知的方略の具体的なやり方を互いに学

び合うことができるようになります。

メタ認知的方略とは、「自分の学習を管理、調整するための方略」です。タブレット型端末で自分の英語の発音や体育の動きを撮影することで自分の学習をチェックすることができるでしょう。また、共有機能を使えば、それぞれの学習計画や振り返りを知ることも簡単に行えます。

教師が学習方法を教えること自体は大切ですが、それを一つの形に固定してしまうと、子どもたちは自分に合った方法を見つけるというメタ認知を働かせにくくなります。例えば、「教科書を何度も繰り返し読む」「ノートをきれいにまとめる」などの方法は有効ですが、全ての子どもに最適とは限りません。大切なことは、「どうすれば自分は興味をもって楽しく学べるか」ということを子どもたち自身が考え、試行錯誤しながら工夫ができるようにすることです。

学力向上において高い成果をあげている学校では、家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えているという調査報告もあります（図４）。※４

子どもたちが学習方略を身に付けることができれば、授業以外の時間も学習ができるようになります。つまり、家庭での自主的な学習にもつながっていくわけです。



図４：学習方略は子どもによって異なる

## ２　教師の学びのアップデート

### ⑴　一般的な校内研修の問題点

一般的な校内研修は、年度当初に研究主任が立案した研究テーマに従って数名の教師が研究授業を行い、年度終わりに研究論文などの形でまとめるということが多いでしょう。しかし、こうしたやり方が一人一人の教員の授業改善に有効に機能しているかといえば、必ずしもそうではありません。なぜならば、以下の問題点があると考えられるからです。

**○　学校の研究テーマが、一人一人の教師にとっての「自分事」として捉えられにくい。**
**○　研究授業及び授業研究会が、他の教師の授業改善につながりにくい。**
**○　単元をベースとした自律的な学習に関する知見が共有されにくい。**
**○　一人一人の教師が日常的な授業改善から得た知見が共有されにくい。**

「学習者側の視点に立った授業観」にアップデートするためには、こうした従来型の校内研修のやり方を見直し、教師の学び方そのものもアップデートする必要があるのではないでしょうか。

### ⑵　教師による探究的な学びの必要性

中央教育審議会（2022）は「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」において、以下のように教師による探究的な学びの必要性を提言してい

ます。※５

**『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子どもたちの学びの相似形であるといえる。（中略・・・前田）**

**これからの時代には、日本社会に根差したウェルビーイングについて考察しつつ、教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる。**

確かに、教師による探究的な学びを取り入れた校内研修が実現できれば、そのこと自体が「主体的・対話的で深い学び」となり、体感的にそのよさや方法が理解できると考えられます。

教員研修においては、一人一人の教員の課題を個別に解決していくのではなく、協働的に解決していくような組織的な取組が必要になると言えるでしょう。そのことによって、仲間である同僚と一緒に学ぶことの楽しさを味わえることも期待できるわけです。

### ⑶　授業改善プロジェクト

授業改善プロジェクトとは、学校の研究テーマに合わせて、一人一人の教師が個別最適な課題を立てて、１年間をかけて協働で解決していくプロジェクト型の校内研修です。「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を、ICTも活用しながら、対話と振り返り（リフレクション）を通して実現することを目的とします。

以下、その手順を具体的に説明していきます。

#### ①　理想の状態を明らかにする

授業改善プロジェクトにおける個人課題は、個人研究とは異なります。学校の研究テーマに沿って理想と現実の隔たりを自覚し、自分の授業の問題を発見することがスタートとなります。



図５：理想の状態を明らかにする

そのためには、理想の状態を共有しておく必要があります。例えば学校の研究テーマが「主体的に学ぶ子どもの育成」といった場合、その理想の姿を教師同士の対話によって明らかにします。「振り返りに『次はこうしたい』と書ける子ども」「インターネットから学習に役立つ情報を集めることができる子ども」「宿題がなくても自分で家庭学習ができる子ども」といった具体的な言葉にしていくわけです（図５）。

#### ②　自分の授業の問題を発見する

そして、その「ありたい姿」と自分の授業の隔たりを自覚することが必要になります。できれば自分の授業を撮影した動画を見せ合いながら対話することが理想的です。「タブレットが学

習の道具になっていない」「一部の子どもの発言だけで進められている」といった「自分の授業の問題」を発見することで改善すべき点を明らかにしていくわけです。特に「ICTを活用した授業」に関しては、イメージできない教師もいるので、理想とする授業動画などを視聴することも必要になるでしょう（図６）。




図６：自分の授業の問題を発見する

### ③　一人一人が課題を立てる

自分の授業の問題点を発見したら個々の課題を立てます。例えば、「タブレットの活用をどう充実させるか」「対話的な学びをどう取り入れるか」といったものです。

授業の改善ポイントは本当は複数あるはずなのですが、１人が１つの課題に絞ることが望ましいのです。なぜならば、手を広げすぎると成果が見えにくくなるからです。「今年度の自分自身の授業改善の課題は○○だ」というふうに焦点化することで、時間とエネルギーを集中させることができるわけです（図７）。




図７：一人一人が課題を立てる

### ④　見通しを共有する

教員１人が１つの課題を設定したら、その課題解決のための具体的な取組（見通し）をチームで考えてプレゼンテーションを行い、教員全体で共有します。

チームの分け方は、校種や学校の規模によって異なります。教科ごとに編成したり、課題ごとに編成したりします。ある中学校では、「ICT活用を課題とするチーム」「振り返りを課題とするチーム」などの課題ごとのチームに分かれて取り組んでいます。教科を超えて対話を行えることが大きなメリットと言えましょう（図８）。




図８：見通しを共有する

### ⑤　日常的に課題解決を行う

一人一人が立てた課題については、年間を通して取り組んでいきます。例えば、「対話的な学びの充実」を課題にした教師は、それを解決するために日常の授業改善に取り組んでいくわけです。まずその教師は、同僚の先生から教えてもらった「３人グループで話し合う活動を取り

入れる」という「見通し」を立てます。これが「Anticipation」と呼ばれるものです。そしてすぐに「行動」に移します。これが「Action」です。しかし、やってみると、「タブレットが効果的だった」といった良かった点も発見できる一方で、「学習課題が易しすぎた」といった新たな問題にも気付くはずです。これが「Reflection」とよばれる「振り返り」です。そして、その新たな問題に対しては、「対話を活性化させるための学習課題とはどのようなものか」といった、新たな課題と見通しを立てて行動していくわけです（図９）。

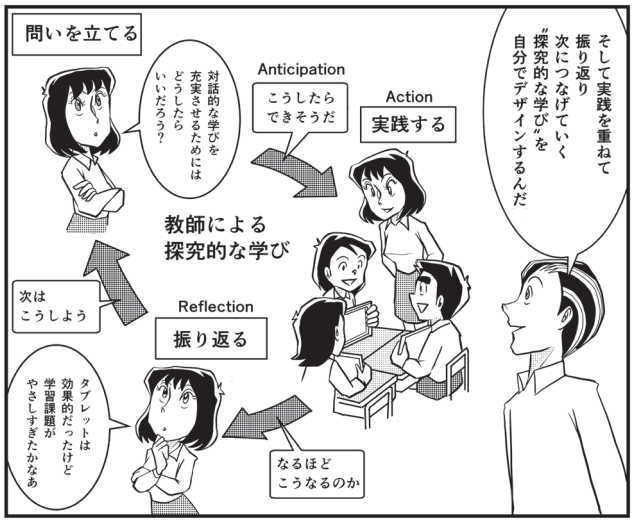


図９：教師による探究的な学び（AARモデル）

このサイクルをAARモデルとよび、主体的に行動して変化を起こす力を身に付けることができるようになるわけです。優れた教師は無意識にこのサイクルを回しているはずです。※６

### ⑥　対話と振り返りを促す授業研究会

授業研究会では、公開された授業を評価するだけではなく、そこから得られた知見を対話によって〝概念化〟して、自分の授業改善に生かすようにしていきます。授業改善プロジェクトでは「対話と振り返りを促す授業研究会」と呼んでいます（図10）。

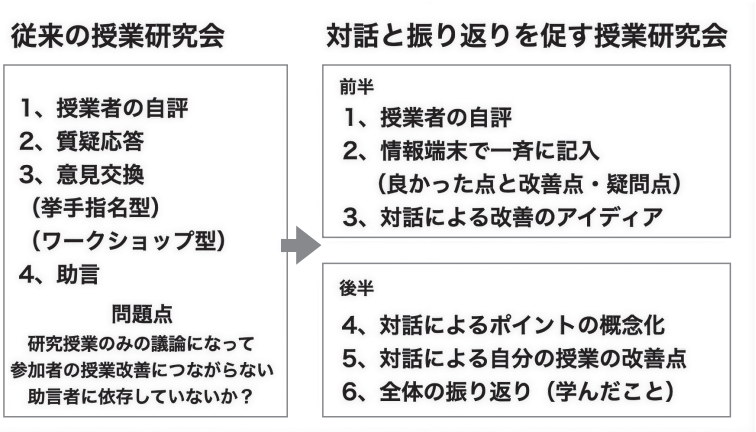


図10：対話と振り返りを促す授業研究会

授業研究会の前半では情報端末を使って、良かった点や改善点・疑問点を一気に集約します。良かった点は読めば分かりますので、内容的な議論は割愛します。そして、改善点や疑問点を中心にして対話を行い、代案を練り上げていきます。考えられた代案は口頭で発表したり、情報端末で共有したりします。

後半は、対話をしながら授業のポイントを抽象化して言葉にしていきます。例えば、「相互評価が重要だ」「アイディアの可視化が効果的だ」といった具合です。このことを「概念化」と呼んでいます。そして、概念化された言葉を基にして、参加者は「自分の授業は、それができているだろうか」と振り返るわけです。つまり、他者の授業から自分の授業改善の知見が得られるようにするわけです（図11）。

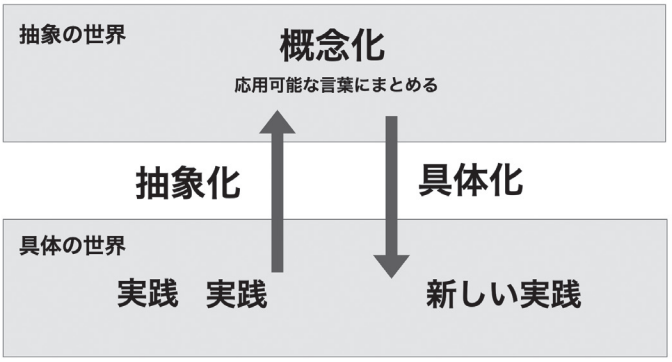


図11：概念化

### ⑦　実践報告会と振り返り

３学期には、実践報告会を開催して、それぞれの取組を共有します。自分の授業改善について一人一人が発表するところにポイントがあります。報告会の方法は様々ですが、１人が３分程度で、スライドを使って発表することが多いようです。ただし、発表に対するフィードバックが重要です。グループ内では、１人の報告の後に意見を交換する時間を設けます。人数が多いところは、グループ内で発表を行い、グループ代表が全体で発表するという方法もよいでしょう（図12）。



図12：実践報告会

重要なことは、成功事例の発表会ではないということです。失敗や試行錯誤なども共有することで、課題への取り組み方を学ぶことができるわけです。実践報告会の後は、対話によって「自分の成長」を明らかにして一年を通した振り返りを行います。振り返りの目的は、経験から学ぶことであり、それを未来に生かすことだからです。

### ⑷　良質な相互作用が活発な学習集団を作る

教師による協働的で探究的な学びを成立させるために重要なことは、仲間への敬意と感謝です。一緒に学んだ仲間への感謝を言葉にすることで、お互いの自己効力感を高め、教師一人一人がもつ可能性を伸ばしていくことにつながっていきます。「自分は集団の役に立っている」「仲間がいるから学び合える」という感覚が結果的に自律的な学習に向かっていくからです。つまり、良質な相互作用が活発な学習集団を作っていくことになるのです。

【引用・参考文献】
※１：秋田喜代美著『学びの心理学　授業をデザインする』（左右社）
※２：河村茂雄著『アクティブラーナーを育てる自律教育カウンセリング』（図書文化社）
※３：篠ヶ谷圭太著『予習の科学 「深い理解」につなげる家庭学習』（図書文化社）
※４：耳塚寛明・浜野隆・冨士原紀絵編著『学力格差への処方箋』（勁草書房）
※５：中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）』（2022）
※６：OECD『THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS Education 2030』

【本文中の漫画の引用元】
図１、図２、図４：前田康裕著『まんがで知る学習方略』（さくら社）
図３：前田康裕著『まんがで知るデジタルの学び２』（さくら社）
図５、図６、図７、図８、図９、図10、図11、図12：前田康裕著『まんがで知るデジタルの学び３』（さくら社）

# 指定研究推進郡市及び２年次研究会　会場校

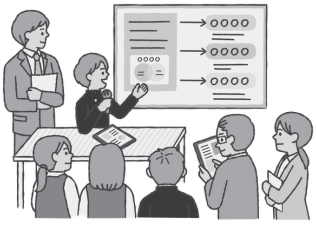
## ◇ 令和７・８年度指定 （上段：指定研究推進郡市、下段：令和８年度研究会　会場校）

| | 上　越 | 中　越 | 新　潟 | 下　越 |
|---|---|---|---|---|
| 国　語 | 妙高<br>（妙高市立妙高高原中学校）<br>11月27日（金） | 燕・西蒲<br>（燕市立燕中学校）<br>10月29日（木） | 新潟<br>（新潟市立内野中学校）<br>11月５日（木） | 五泉・東蒲<br>（五泉市立川東中学校）<br>11月20日（金） |
| 数　学 | 柏崎・刈羽<br>（刈羽村立刈羽中学校）<br>11月18日（水） | 十日町・中魚<br>（十日町市立中条中学校）<br>11月19日（木） | 新潟<br>（新潟市立木戸中学校）<br>11月５日（木） | 村上・岩船<br>（村上市立岩船中学校）<br>10月28日（水） |
| 道　徳 | 上越<br>（上越市立名立中学校）<br>11月10日（火） | 長岡・三島<br>（長岡市立北辰中学校）<br>10月30日（金） | 新潟<br>（新潟市立小須戸中学校）<br>11月12（木） | 佐渡<br>（佐渡市立南佐渡中学校）<br>11月13日（金） |
| 美　術 | — | 三条<br>（三条市立大崎学園）<br>11月13日（金） | — | 新発田<br>（新発田市立猿橋中学校）<br>11月19日（木） |
| 技術・家庭 | 上越<br>（上越市立城西中学校）<br>11月10日（火） | — | 新潟<br>（技術:新潟市立早通中学校）<br>11月26日（木）<br>（家庭:新潟市立光晴中学校）<br>11月５日（木） | — |
| 特別活動 | 上越<br>（上越市立潮陵中学校）<br>11月25日（水） | — | 新潟<br>（新潟市立葛塚中学校）<br>10月22日（木） | — |
| 総　合 | — | 長岡・三島<br>（長岡市立寺泊中学校）<br>11月24日（火） | — | 阿賀野・胎内・北蒲<br>（胎内市立築地中学校）<br>10月27日（火） |

## ◇ 令和８・９年度指定 （上段：指定研究推進郡市、下段：令和９年度研究会　会場校）

| | 上　越 | 中　越 | 新　潟 | 下　越 |
|---|---|---|---|---|
| 社　会 | 上越<br>（上越市立雄志中学校） | 魚沼<br>（魚沼市立堀之内中学校） | 新潟<br>（新潟市立上山中学校） | 村上・岩船<br>（村上市立村上第一中学校） |
| 理　科 | 柏崎・刈羽<br>（柏崎市立南中学校） | 見附<br>（見附市立南中学校） | 新潟<br>（新潟市立白根北中学校） | 佐渡<br>（佐渡市立金井中学校） |
| 英　語 | 上越<br>（上越市立東頸中学校） | 長岡・三島<br>（長岡市立西中学校） | 新潟<br>（新潟市立白南中学校） | 阿賀野・胎内・北蒲<br>（阿賀野市立笹神中学校） |
| 音　楽 | — | 長岡・三島<br>（長岡市立東北中学校） | — | 五泉・東蒲<br>（1年次:五泉市立五泉中学校） |
| 保健体育 | 糸魚川<br>（糸魚川市立糸魚川中学校） | — | 新潟<br>（新潟市立亀田中学校） | — |
| 学校保健 | — | 小千谷<br>（小千谷市立小千谷中学校） | — | 新発田<br>（新発田市立川東中学校） |

# 1 指定研究（２年次）研究推進委員会が提案する「深い学びにいたる授業」



今年度、研究会を実施する教科・領域の全県部長による解説と、各地区の研究推進委員会が提案する「深い学びにいたる授業」を紹介します。


国語 pp.16-25　数学 pp.26-35　道徳 pp.36-45
美術 pp.46-51　技術・家庭 pp.52-61　特別活動 pp.62-67
総合的な学習の時間 pp.68-73


・全県部長による解説
　各研究推進員会の取組を踏まえて、「深い学びにいたる授業」に必要な視点を解説しています。

・各研究推進委員会の実践の紹介
□「目指す深い学びの姿」の紹介
□「主な手立て」である「学習過程」と「深い学びの技法」の紹介
□「単元（題材）の様子」の紹介

# 2 指定研究（１年次）研究推進委員会の進捗状況



今年度、指定研究がスタートした研究推進委員会について、進捗状況をお知らせします。


社会 p.74　理科 p.75　英語 p.76
音楽 p.77　保健体育 p.77　学校保健 p.78


・全県部長による重点の紹介

・各研究推進委員会の活動の様子の紹介

# 国語

# 「言葉による見方・考え方」で深い学びにいたる授業づくり

国語科における「深い学び」は、答えが一つに定まらない本質的な課題から始まります。複数テキストの比較や本文の記述を根拠とした対話を通して、学習者を自身の読みの再構成へと導きます。さらに、社会的な文脈をもつ表現活動や思考プロセスの振り返りと連動させることで、「言葉による見方・考え方」を確固たる実践的な力へと高めていきます。



県中教研　国語部　全県部長
長岡市立秋葉中学校　田中　綾子

## 「言葉による見方・考え方」を深める授業構成のプロセス

国語科において生徒を「深い学び」へ導くためには、単にテキストの意味を正しく読み取らせるだけでなく、生徒自身が「言葉による見方・考え方」を働かせ、探究を通じて思考を再構成するプロセスを構築することが不可欠です。

まず基盤となるのは、授業の軸となる「問い」の刷新と「多角的な視点」の導入です。事実確認にとどまる一義的な問いを排し、個人の価値観や論理構造そのものを揺さぶる「答えが一つに定まらない本質的な課題」を設定することで、生徒の能動的な思考が駆動します。さらに、視点の異なる複数のテキストを比較・批評する機会を設けることで、生徒は表現の意図や言葉の効果を相対的に捉え、多角的な視点を獲得します。

こうした思考の深まりを実効性のあるものにするのが、「目的のある対話」と「社会的文脈をもつ表現活動」の有機的な連動です。単なる感想の共有に終わらせず、テキストの具体的記述を根拠に自他の解釈を客観的に検証し合う対話を通じ、生徒は思考の変容を実感します。その学びを「明確な読み手と目的をもつアウトプット」へ接続することで、文脈に応じた語彙やレトリックの選択を主体的かつ実践的に習得できます。他者や社会に向けて実際に言葉で表現してこそ、知識は本当の価値を発揮し、確固たるスキルへと高まります。

探究の終着点には、自身の思考プロセスや読みの変化を客観的に捉え直す「メタ認知的な振り返り」を位置付けます。「何を学んだか」という知識の獲得にとどまらず、「どう考え、言葉の捉え方がどう深まったか」という思考の軌跡を丁寧に言語化させることで、学びは他単元や日常の文脈でも活用できる汎用的な力として定着します。

## 「深い学び」を促す授業づくりの工夫

以下に工夫例を４つ紹介します。

**1「問い」の工夫**

生徒の見方や考え方を揺さぶり、更新する問いの設定が重要です。単元を貫くオープンな問いに向き合うことで、生徒は「受け身の読者」から「能動的な探究者」へ変容します。

**2「思考ツール」の工夫**

思考の可視化により、情報の整理や関連付けをスムーズにします。また、対話の際にも互いの考えを明確にし、質の高い意見交流を支えます。

**3「対話」の工夫**

問いを軸に「自己・他者・テキスト」との対話を重ね、自分の考えの再構築を促します。異なる解釈や根拠に触れることで、生徒の中に知的な葛藤が生まれます。

**4「振り返り」の工夫**

「なぜその解釈が可能なのか」「自分の読みのどこを見直すべきか」を吟味し、対話前後の考えの変化を自覚（メタ認知）させます。この変容を実感する瞬間こそが、正に深い学びの核心です。




言葉の扱い方やものの見方が自分自身の思考や生き方に返ってくる手応えをいかにつくれるかが、授業づくりのポイント

## 各地区の「深い学び」にいたる学習過程

各地区の実践では、以下のような授業づくりを通して、生徒の「深い学び」を促します。

○ 意図的な発問と既習事項を生かして自らの読みを立ち上げ、対話を通して思考を多角的に更新しながら、自分なりの「解釈」へと再構築・深化させていく授業
○ 言葉を多角的に捉えて既習の知識や経験と結び付けた考えを構築し、他者の視点を通して教材を捉え直し、主体的に課題を解決・共有しながら学びを深化させる授業
○ 課題に基づく解釈の交流や朗読の練り合いを通して、登場人物の心情や場面描写を深く追究し、協働して古典作品の魅力に主体的に迫る授業
○ 既習の「読み方・学び方」を活用して自力で解釈し、「自己・他者・教材」との対話を通して描写に基づく読みを深め、自身の考えの広がりと深まりとともに学びの成長を実感する授業

## 国語　重点方針

言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質･能力を育てるために、話す、聞く、書く、読む力を育み、学ぶ意欲をもつことができる国語の学習指導に努める。
○ 学び合う言語活動を通して、考えを広げたり深めたりし、思考力や想像力を育てる。
○ 考えを明確にし、構成を考えて文章を書く力を育てる。
○ 話の内容や意図に応じた表現力を育てる。
○ 目的に応じて主体的に文章を読み、内容を的確に読み取る力を育てる。

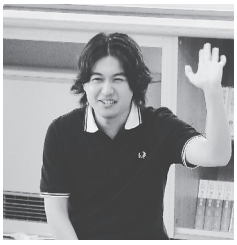
# 国語 ＜上越地区／妙高市中教研＞

## 11月27日（金） 研究会開催

研究主題：子どもが主体的・自律的に学び、深い学びを実現する国語科授業
単 元 名：「３年：状況の中で」～故郷～
会 場 校：妙高市立妙高高原中学校
公　　開：１学級
授 業 者：上山　晃平
指 導 者：上越教育大学　特任准教授　小出　信也 様
　　上越教育事務所　指導主事　草間　　啓 様



研究推進責任者
妙高市立新井中学校
後藤　弘彦



教科・領域担当者
妙高市立妙高高原中学校
上山　晃平

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒の読みを深める教師の発問を工夫することによって、生徒は与えられた課題に対して既習の事項を参考にしながら自らの読みを確立していく姿を目指します。また、仲間との対話やテキストとの対話を繰り返すことによって、生徒は自らの読みを広げたり、深めたりしながら、自分なりのテキストの「解釈」ができるようになります。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）
教師の発問から自らどの課題に興味関心を抱くか考え、既習の事項を参考に、課題解決の道筋を設定する。

これにより、生徒は自分がどの課題に興味関心を抱くのかに気付き、課題解決の道筋や方法を考えるようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8）
仲間の読みと自らの読みを比較し、自らの読みとテキストとの対話を繰り返し、読みを広げたり深めたりする。

これにより、生徒は多角的な視点で読み進めようとするので、自らの読みの浅さや狭さに気付くようになる。

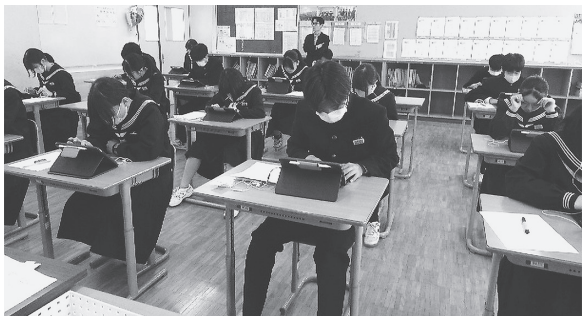
**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）
課題に対して客観的な理由や根拠を探し求め、それらを相手が納得できるように論理的に表現する。

これにより、生徒は既習の技術を活用しながら、自らの考えを言語化し、仲間と対話できるようになる。

## 単元（題材）の様子

テキストを読み、語句の意味を理解して、比喩的表現の読み替えを行うなど、基本的な読みを教師と共に行います。その活動を通して、過大解釈や誤読を防ぐとともに、生徒全員が同じ理解の下で課題に向かえる土台を作ります。

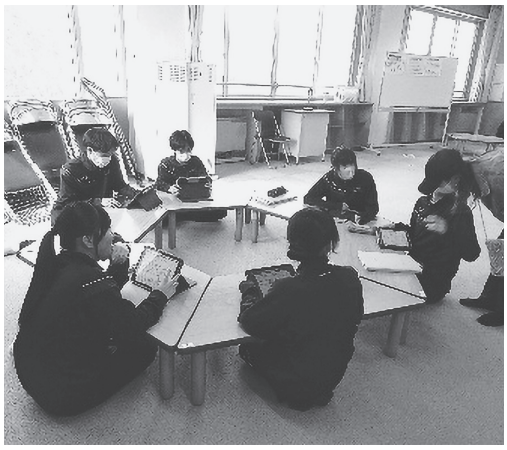
ポイント１

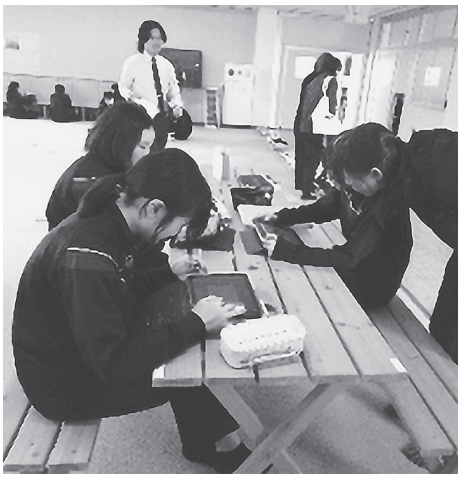


教師から生徒にいくつかの課題を提案します。この課題と発問の方法を工夫して行うことにより、生徒は自分が「どんな課題に対して興味関心を示すか」をメタ認知し、モチベーションを上げるとともに「目的意識」を高めると考えます。

さらに、生徒は課題解決のためには、どの資料やテキストを読むか、それのどこを読めばよいか、どんな方法を使えばよいかを考えるようになります。

ポイント２





仲間との対話です。与えられた課題に対する自分の考えと仲間の考えを比較する活動を通して、自らの読みを振り返るようになります。

これにより、もう一度テキストの読みに戻り、多角的な視点からテキストを読み直す活動につながります。その際、自らの読みの浅さや狭さに気付いたり、仲間の読みとの違いに気付いたりもします。

最後に生徒は課題に対する自らの考えを言語化して仲間と対話することができます。

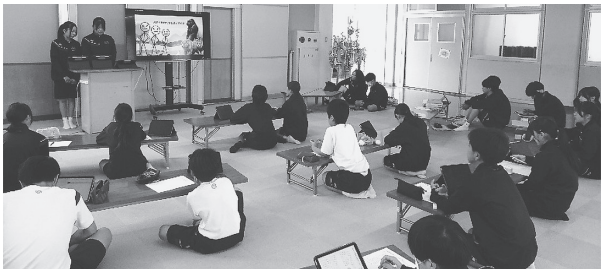
ポイント３

研究会

“故郷”の第２時では、工夫された発問により、生徒がモチベーションをアップし、読む目的意識を高めて授業に臨む予定です。



仲間と対話する場面では多角的な読みをお互いに議論する授業を予定しています。



ポイント２・３

# 国語 ＜中越地区／燕市・西蒲原郡中教研＞

## 10月29日（木） 研究会開催

研究主題：自ら課題を見つけ、学びに向かう生徒の育成
～「深い学び」の実現に向けた、
魅力的なゴール設定の工夫～
単 元 名：「２年：作品の魅力を読み解き、自分だけの「偏愛ファンブック」を書いてクラスメイトをアッと言わせよう」
～走れメロス～
会 場 校：燕市立燕中学校
公　　開：１学級
授 業 者：齋藤　洋子
指 導 者：新潟大学　教育学部　教授　足立　幸子 様



研究推進責任者
燕市立吉田中学校
西脇　悠太



教科・領域担当者
燕市立燕中学校
齋藤　洋子

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

多角的な「言葉によるものの見方・考え方」を用いて文章を解釈し、自分の経験や知識と結び付けて考えをまとめます。そうしてできた多様な他者の考えや視点を知ることで教材を捉え直し、考えを広めたり深めたりしていく姿を目指します。

生徒は自分が解決したいと思う課題・テーマについて考え、まとめ、伝え合うことによって、自分の考えの価値を実感し、自ら学びに向かうことができるようになります。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

これまでに学んだ視点を生かして自ら見つけた課題を探究し、級友を驚かせるという魅力あるゴールを設定する。

これにより、生徒は、課題を自分事とし、到達した際の満足感を想起し、自ら課題探究するようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

既習事項を生かした課題解決の武器を提示する。

これにより、生徒は読み深める着眼点と考え方を組み合わせて、自分に合った方法で文章の内容の解釈、考えの形成を行うことができる。

**ポイント３**（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

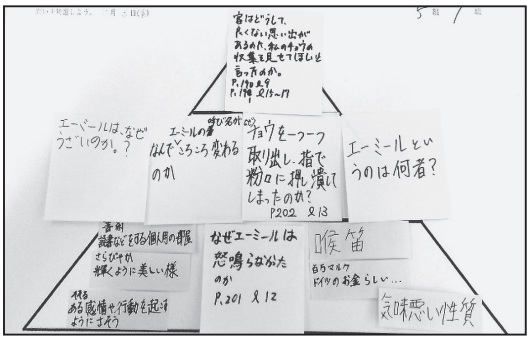
自分の学びがメタ認知できる振り返りと、目的をもった対話場面を設定し、課題解決につなげる。

これにより、生徒は学びを蓄積し、自己の学びの変容をメタ認知し、課題や気付きを更新できる。

## 単元（題材）の様子

生徒は作品をおおまかに確認したあとで、自ら見つけた課題（解決したい問い・作品の魅力）を設定します。自身の気付きやひっかかりと、これまで学んだ「ものの見方」とを結び付けて課題設定、選択するために、導入の段階で作品と深く対話することとなります。

生徒の設定した〈課題〉を起点とし、深めた解釈を成果物に表現して交流するというゴールは、単元を学習する意義、作品への興味や解決したい願いをもちながら主体的に探究する姿につながります。



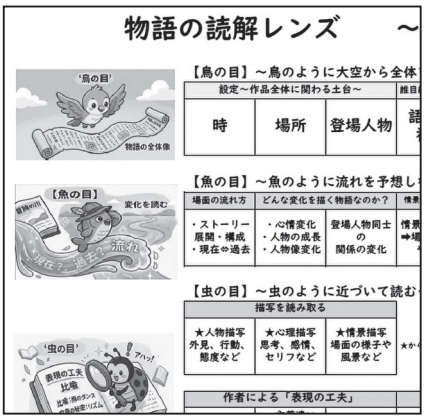

ポイント１

---

読み深めのための「ものの見方」と「ものの考え方」を提示します。ものの見方は、生徒と既習事項を確認しながら「四つの目」で整理してきたものです。これらの武器を渡し、探究する課題や方法を生徒に委ねます。そうすることで、着眼点、課題への迫り方にずれが生じ、同じ作品を読んでも多様な考えが形成されると期待します。

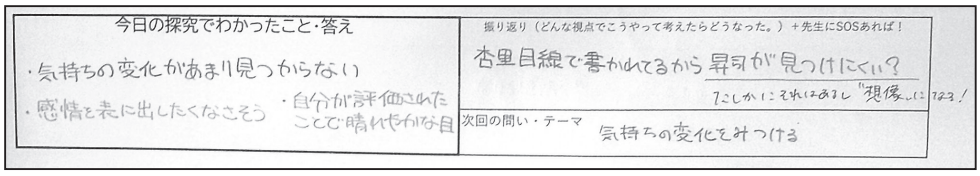
これらのことにより、多様な考えが表現された成果物が完成し、それらを基に対話することで一人一人の考えが広がったり深まったりします。

ポイント２




---

作品との対話が可視化できる分析シートを用意します。自己のつまずきや疑問点、分かったことや気付きをすぐに記録しメタ認知することで、〈問い〉や気付きの更新、次に読むべき箇所や対話すべき相手を認識できるようになります。




ポイント３

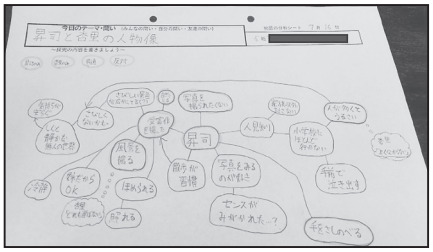
振り返りの内容に応じて必要な対話を設定します。

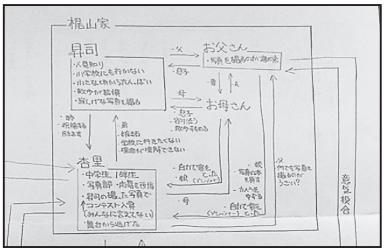
これにより、生徒自身が目的をもって対話し、他者の考えやその根拠を知り、新たな視点をもったり、自分の考えを広げたり深めたりすることができます。

---

**研究会**

研究授業当日は“走れメロス”における個人での課題探究を仕上げ、成果物の作成に取り組む様子をご覧いただく予定です。






～２年生最初の物語単元「足跡」での分析シート～

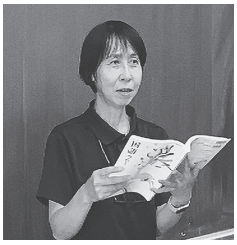
# 国語 ＜新潟地区／新潟市中教研＞

## 11月5日（木） 研究会開催

研究主題：学び合いを通して、生徒が言葉による見方・考え方を使って考えを深め、自らの成長を実感する国語科指導
単 元 名：「1年：いにしえの心にふれる」蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から
「2年：いにしえの心を訪ねる」扇の的―「平家物語」から
会 場 校：新潟市立内野中学校
公　　開：２学級
授 業 者：伊原　和歌子・小林　大晟
指 導 者：新潟市教育委員会　指導主事　小林　圭一 様
新潟市教育委員会　指導主事　荒澤　寛美 様



研究推進責任者
新潟市立関屋中学校
伊藤　篤志



教科・領域担当者
新潟市立内野中学校
川瀬　智子

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒が、お互いの解釈を交流したり、アドバイスし合ったりすることで意欲的に古典作品の魅力に迫っていく姿を目指します。「蓬萊の玉の枝」では、人物の行動の理由や心情を考えることで、かぐや姫という人物への理解を深めていきます。多様な考えの出るような課題を工夫して提示します。「扇の的」では、具体的な場面の中から個人・グループで考えた「聴かせどころ」をどのように朗読すればよいかを考え、表現していきます。聞き合いアドバイスし合いながら、朗読を練り合い練り上げ、「扇の的」の魅力に迫っていきます。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）「扇の的」の実践

### 生徒の学習過程




**ポイント1**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）
・「聴かせどころ」や「見せ方・聴かせ方」を検討するための観点を提示する。

これにより、生徒は実際の様子が目に浮かんだり、臨場感が生まれたりする表現に気付きやすくなり、またその魅力が伝わる朗読の仕方を工夫する手がかりを得ることができる。そして、目的意識をもって主体的に古文を朗読することができるようになる。

**ポイント2**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8・10）
・「聴かせどころ」を共有し、その聴かせ方を練り合い、練り上げる活動を設定する。

これにより、生徒は「扇の的」の多様なよさに気付き、それを朗読で表現する方法を考えて、アドバイスし合いながら表現方法を練り合い、朗読を創り上げていくようになる。

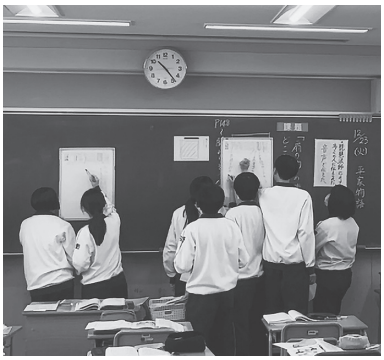
**ポイント3**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.9）
・朗読を創り上げる活動を振り返り、作品の魅力に迫る活動を設定する。

これにより、生徒は本時の活動を振り返り、「扇の的」の魅力を表現するために大切なことをまとめ、次の朗読発表会に向けての意欲を高めていく。さらに、「扇の的」の魅力をより実感していくようになる。

## 単元（題材）の様子　「扇の的」の実践

「扇の的」の「聴かせどころ」を考え、それを朗読で表現する活動を設定します。〈情景〉〈動作〉〈心情〉という観点に沿って「聞いただけで映像が浮かぶ古文」を探して互いの考えを伝え合い、魅力が伝わる朗読の仕方を考えます。また、〈声の出し方〉〈間の取り方〉〈表情〉〈身振り〉という観点に沿って「見せ方･聴かせ方」を考え、朗読の記号で可視化します。これにより、思考・表現の手がかりを得て、「扇の的」の魅力を主体的に伝えることができます。

ポイント1

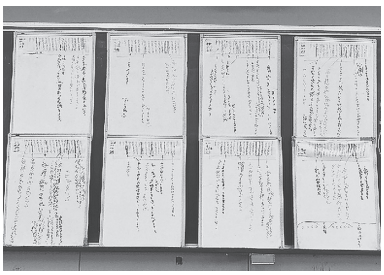


---

個人で考えた聴かせどころとその理由を互いに伝え合い、さらに共有ノートの本文上で一覧できるようにすることで、「扇の的」の異なる多様なよさに気付くことができます。

また、グループ間で朗読を交流し、アドバイスし合う活動を設定することで、仲間とともに練り上げ、互いの朗読の仕方を比較しながら、より魅力の伝わる朗読を目指すことができます。

ポイント2



---

仲間との話合いや朗読の練り合いを通して、どうしたら「扇の的」の魅力を「聴かせる」ことができるのかを個人でまとめることで、次時の朗読発表会への意欲を高めます。さらに、古文の読解や朗読発表会を通して得た気付きを踏まえて、『なぜ「扇の的」が今も残っているのか』という単元を貫く学習課題に迫っていきます。これにより、得た知識や気付きを活用して思考を深めることができ、単元のゴールに向かって見通しや問題意識をもって学習に取り組むことができるようになります。

ポイント3



## 「蓬萊の玉の枝」の実践

ポイント1　思考・解決の過程→「深い学びの技法」のNo. 2

生徒から出された様々な意見を「自己」「求婚者」「翁・媼」という観点を示し、それに沿って分類させることで、多角的に議論を深められるようになります。

ポイント2　解決の過程→「深い学びの技法」のNo. 9

これまでに多様な観点から考えてきたことを踏まえて、かぐや姫の言動から本時の課題について、自分の考えを表現し、自分なりのかぐや姫像を構築するようになります。

---

**研究会**

・１年生「蓬萊の玉の枝」では、言動に隠されたかぐや姫の心情を探り、人物像について考えを深めていきます。２年生「扇の的」では、ロイロノートや模造紙を使って、思考の可視化を図り、朗読を練り合い、練り上げていきます。

# 国語 ＜下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研＞

## 11月20日（金） 研究会開催

研究主題：身に付けてきた読みの力を活用し
自己・他者・教材とつながることで
学びを実感できる国語授業
単 元 名：「１年：視点を変える」
～少年の日の思い出～
会 場 校：五泉市立川東中学校
公　　開：１学級
授 業 者：野上　日和
指 導 者：新潟市立宮浦中学校　教頭　佐久間　奈々子 様



研究推進責任者
五泉市立五泉中学校
後藤　陽子



教科・領域担当者
五泉市立川東中学校
野上　日和

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

３年間の授業を通して体現したい生徒の姿は、自力で教材を読解し、他と対話することを通して考えを広げ深め、自己の学びを実感する姿です。そのために必要なことは、生徒がこれまで習得してきた「読み方」「学び方」を学習の中で活用し、自分の考えが伝わったり明確になったりする経験を積むことだと考えました。生徒が「自己・他者・教材」との対話を通して、描写を基に捉えた自分の読みをより確かなものにしていく「学びを実感する姿」を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

学んだ知識を活用して課題や目標を設定する。

これにより、生徒は自分の追究課題を確認し、それに適した読解方法を自分で選び活用しながら自力で課題解決できるようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8・15）

仲間や教材と対話する中で出会う多様な考えを比較・検討しながら自己の考えを広げ、深める。学んだことを整理し、自分の言葉でまとめて収束する。

これにより、生徒は自分の課題に対する考えがより明確になるとともに、新たな視点や学び方、表現方法を習得できるようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

身に付けた「読み方」「学び方」をスタディ・ログに記録し、次の学習につなげる。

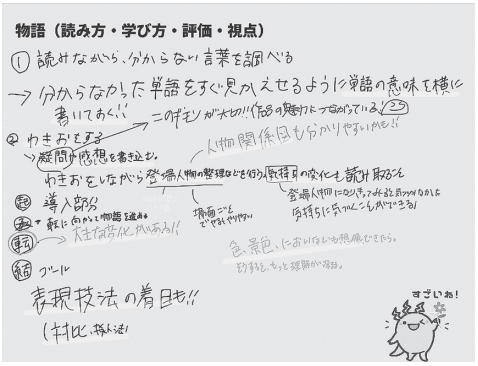
これにより、生徒は「何ができるようになったのか」「何が分かったのか」を自覚することができ、その学びを次の学習に生かすことができるようになる。

## 単元（題材）の様子

蓄積してきたスタディ・ログを活用し、自分なりの読み方で目的をもって教材を読み進めます。着目した視点（天気、色、象徴アイテムなど）から、人物の心情などの読解を深めます。

初めに最終課題（この題材では「本の帯」）を提示することにより、生徒は自分で文章から言葉を拾いながら読むようになります。

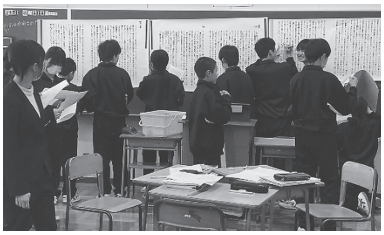
ポイント1・3




---

教科書に「分かったこと」「疑問」「思ったこと」を書き込んでいくこと（通称わきお読み）で思考が整理されたり、つながったりします。その書き込みを全文読解シート（教科書の拡大）で共有します。シートの前で自然に対話が生まれます。全体を俯瞰することができ、仲間の考えに触れることで考えが広がり、深まります。

また、これらの書き込みや対話を通して、説明文や他の教材の読解においても批評的な読みができるようになります。

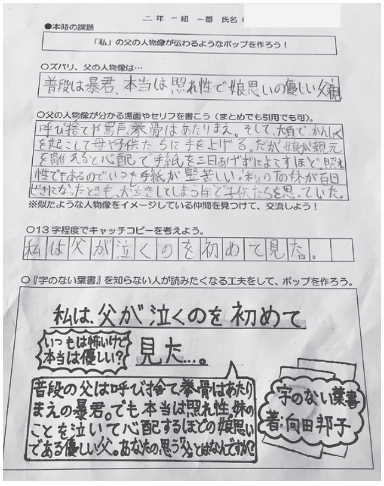


ポイント2

---

最終課題の「本の帯」に取り組みます。最終的な自分の考えを短い言葉で表現することで、思考力・判断力・表現力がより磨かれます。また、前回の物語教材では「ポップ」でまとめ、系統的に取り組んでいくことで、読解の視点が増え、表現力も鍛えられていきます。

ポイント2




単元の終わりに読み方や学び方を実感できる振り返りを行います。学習を通して有益だと感じた読み方や学習の進め方（学び方）をスタディ・ログとして記録し、蓄積します。

これにより、この後の学習で、生徒が自分の学び方を自分で見直し、いつでも活用できるようになります。

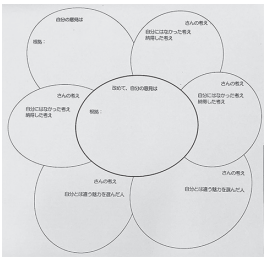
ポイント3

---

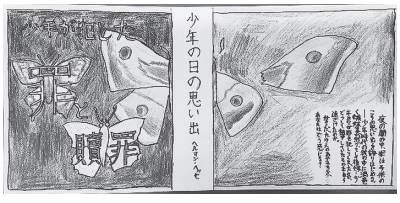
研究会

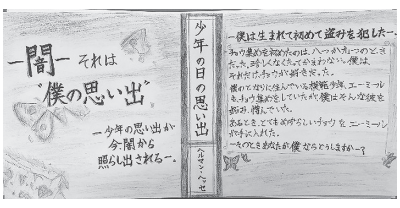
“少年の日の思い出”第６時では、最終課題の「帯」につなげるため、帯で使う場面や、その場面を選んだ理由（自分の見方や価値観）を、対話を通して明確にする授業を予定しています。

ポイント2



教科書や全文読解シートを読み返したり、友達や自己と対話をしたりして考えを深めていく姿を目指します。



# 数学

## 交流・統合・深化された「見方・考え方」を生かした深い学びにいたる授業づくり

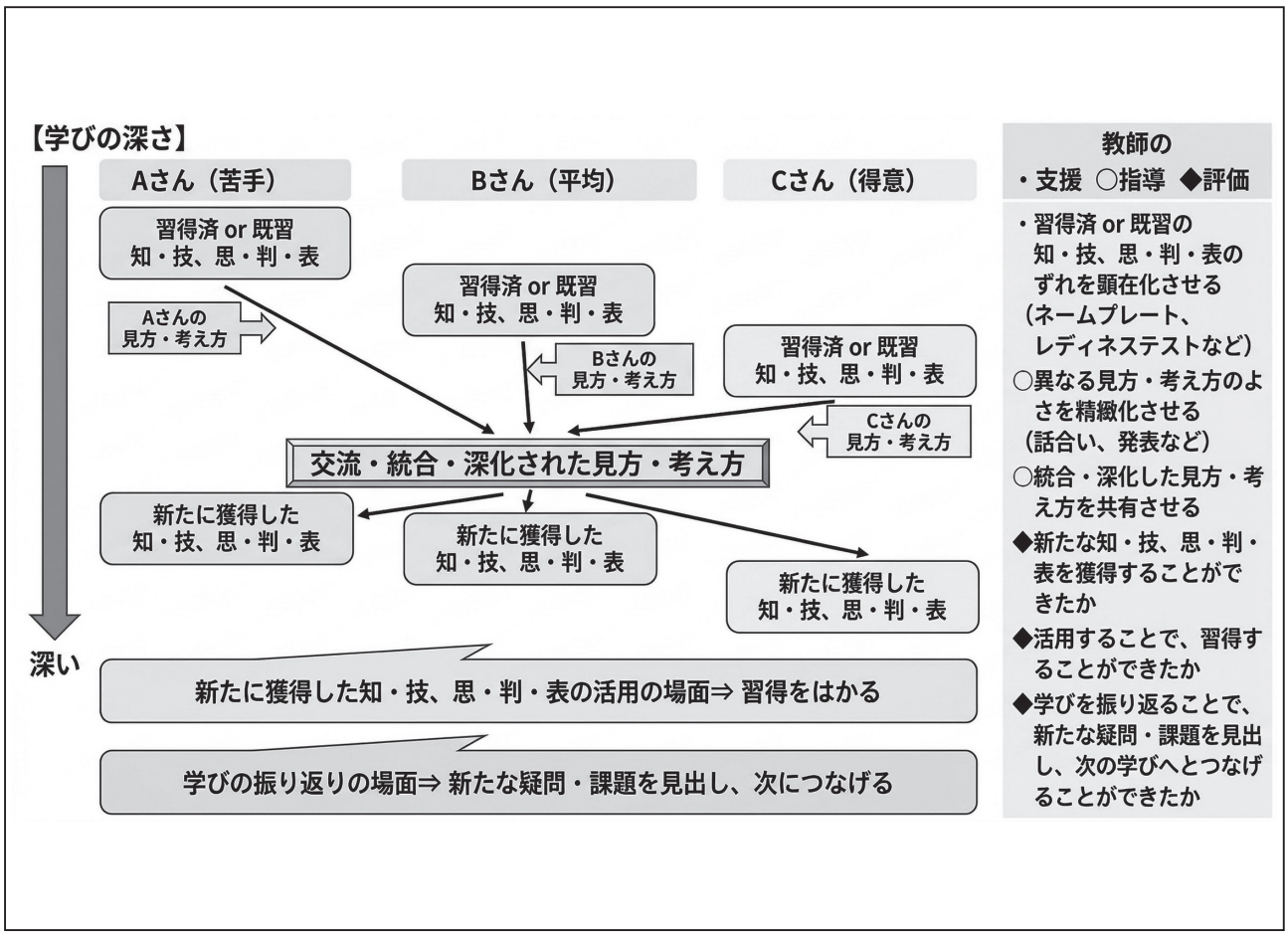
県中教研で目指す「深い学び；生徒が学習内容を追究する中で、既習の知識や技能を基に新たな知識や技能を関連付け、精緻化するなど、思考や認識が高度化している様相」を具現化するため、数学的な「見方・考え方」を働かせた深い学びを次のようにイメージ化しました。

「見方・考え方」を働かせた深い学びにいたる授業づくりについて紹介します。



県中教研　数学部　全県部長
三条市立第一中学校　古川　真哉

### 数学的な「見方・考え方」を働かせた深い学びのイメージ



## それぞれの「見方・考え方」を生かした深い学びにいたる授業の創造

学びのスタートに立つ生徒は一人一人異なった既習の知識や技能を有しています。数学が得意な生徒がいれば、苦手な生徒もいます。教師はまず、それら生徒のもつ既習の知識や技能に基づくそれぞれの「見方・考え方」を見極めることから始める必要があります。例えば、２年生「文字式」の単元『２つの奇数の和は偶数になる』ことを証明する学習を例に紹介します。

### 「２つの奇数の和は偶数になる」ことの証明

○ まず、２つの奇数について、具体数を用いて考えを始めます。

Ａさん（苦手）
・２つの奇数を、例えば、３と５とすると、
・その和は、３＋５で８、
・８÷２は４、２で割り切れるから偶数だ

Ｂさん（平均）、Ｃさん（得意）
・少し大きい奇数で考えてみると、例えば、25と33の和は、58で２×29、
・２×（整数）の形で表せるから偶数だ

○ Ａさんは「偶数は２で割り切れる数」、Ｂさん、Ｃさんは「偶数は２の倍数」という既有の知識に基づくそれぞれの「見方・考え方」を働かせて偶数であることを調べていることが分かります。

○ ここで、２つの奇数を文字式で表すとどうなるかについて考えを進めます。Ｃさんが２つの奇数を２ｍ＋１、２ｎ＋１（ｍ、ｎは整数）と表すことができ、その和は、２ｍ＋２ｎ＋２となることを全体で確認した後、それが偶数であるかどうか考えを進めます。

Ａさん（苦手）
・２ｍ＋２ｎ＋２を２で割ってみると、、、
・（２ｍ＋２ｎ＋２）÷２は、、、

Ｂさん（平均）
・（２ｍ＋２ｎ＋２）÷２は、
・ｍ＋ｎ＋１ でいいのかな
・これは割り切れたと言えるのかな？

○ Ａさんの既有の知識「偶数は２で割り切れる数」を用いた考え方は、**操作的な見方**を働かせている姿です。しかし、Ｂさんは「偶数は２の倍数」という既有の知識とのずれにより、納得できていない姿が現れますが、そこにＣさんの「偶数は２の倍数」という**構造的な見方**を働かせることによってそれぞれの考え方が統合･精緻化され、納得を生むことにつながります。

Ａさん、Ｂさん、Ｃさん
◎ そうか！２で割った結果の ｍ＋ｎ＋１ を使うと、２ｍ＋２ｎ＋２は、２（ｍ＋ｎ＋１）と表すことができるんだ
･ｍ＋ｎ＋１ は整数だから、これは２×（整数）の形で表せるので、偶数と言えるんだ！

○ このように、既有の知識に基づくそれぞれの「見方・考え方」を働かせて深い学びにいたる授業を実現させていくことが大切であると考えています。

## 数学　重点方針

「数学的な見方・考え方」「数学的活動」をより意識した授業づくりを推進し、数学的に考える資質・能力の育成を目指す。

○ 数学的活動における「数学化」の過程を大切にして、「数学的に表現された問題」の設定に生徒が主体的に関わることができるようにする。

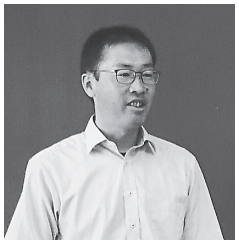
○「数学的な見方」、「数学的な考え方」それぞれの側面を踏まえ、数学的活動の適所に「数学的な見方・考え方」を働かせる機会を意図的に設定する。

○ 問題発見・解決の過程において働かせた見方・考え方を振り返る場面を設定し、「数学的な見方・考え方」をより豊かなものとして生徒への蓄積を図る。

# 数学 ＜上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研＞

## 11月18日（水） 研究会開催

研究主題：深い学びを実現する指導の工夫
～条件を変える活動を通して～
単 元 名：「３年：図形と相似」
～中点連結定理～
会 場 校：刈羽村立刈羽中学校
公　　開：１学級
授 業 者：石澤　たえこ
指 導 者：中越教育事務所　学校支援第２課
指導主事　大畑　勝義 様
柏崎市立西山中学校　校長　宮崎　隆史 様



研究推進責任者
柏崎市立南中学校
大下　昇吾



教科・領域担当者
刈羽村立刈羽中学校
石澤　たえこ

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

条件を変えることででてきた疑問を自分なりの方法で解決していく姿を目指します。予想とのずれから課題に入り、解決するために複数の道具を準備することによって、生徒は使う道具を選択し、課題解決に向かいます。考えたことを伝え合いながら、多角的に考えることで、図形のもつ美しさや不思議さを感じる機会になります。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.2）

外側の図形を四角形に変え、四角形の各辺の中点を結んで内側に四角形を作るとどんな四角形になるか予想する。

これにより、生徒は外側の図形が三角形のときと違い、相似ではない四角形がでてくることに気付くようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.6）

外側の図形が三角形のときと比較し、４つの道具を使って内側にできる四角形の性質を調べる活動を組織する。

これにより、生徒は複数の資料から情報を集め、性質や関係性がないか考えるようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

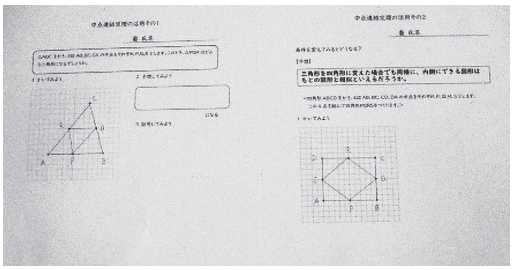
集めた情報と、特別な四角形の性質を基に、内側にできる四角形を決める条件を表現する。

これにより、生徒は４つの道具を活用しながら、考えの根拠を視覚化し、気付いたことを伝えるようになる。

## 単元（題材）の様子

外側の図形が三角形のときは、内側に相似な三角形ができることを学習した上で、外側の図形を四角形に変えたらどうなるかを考えます。条件を変えることで、どう変わるのか仮説を設定し、なぜ変わるのかを考えるきっかけとします。

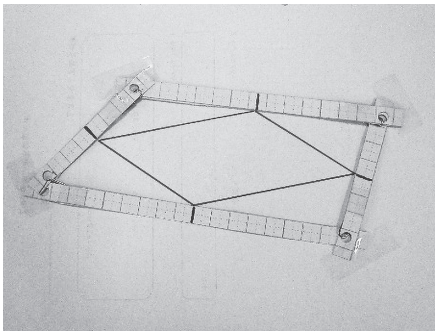
ポイント1



４つの道具（白紙・方眼紙・教具・アプリ）を準備します。生徒は、道具を使いながら仮説があっているのかを検証していきます。複数の資料から情報を集め、比較することで、設定した仮説があっているか、なぜそういえるのか、自分の考えを深めていきます。

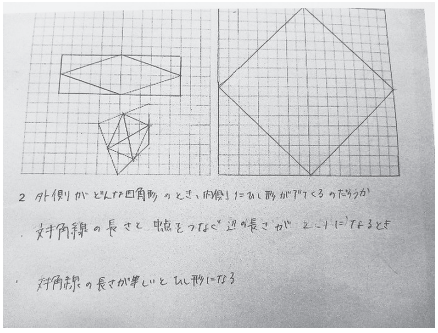
これにより、内側にできる四角形は外側の四角形と相似にはならないけれど、何か特別な四角形になりそうだと気付くことができます。

ポイント2



班に戻り、それぞれの道具を使って自分の考えや気付いたことを伝えます。道具を用いながら話すことで、他者に伝わりやすく、自分の考えに自信をもちやすくなると考えます。これにより、設定した仮説があっていたのか、根拠をはっきりとさせて説明することができるようになります。また、外側が正方形のときだけは、内側も正方形（相似）のように、特別な場合もあることを知る機会となります。

ポイント3




**研究会**

柏崎市教育委員会では、“子どもの姿で語る協議会”を推奨しており、子どもの姿で語り始め、その後、要因となる教師の手立てや代案について考えています。当日は、この方法とファシリテーションを用いて、本時の「手立て」が有効であったかを協議していく予定です。参加者にとって、有意義な協議会になればと思います。



昨年度、「先生方のこだわり（教師が行うこと・生徒に求めること）」をKJ法でまとめることから研推がスタートしました。今年度は、条件を変える活動を通して、自分なりの方法で課題解決する姿を目指した実践を他の学校、他の単元でも行いました。当日は、粘り強く考える生徒の姿をご覧いただければと思います。

ポイント1・2・3

# 数学 ＜中越地区／十日町市・中魚沼郡中教研＞

## 11月19日（木） 研究会開催

研究主題：主体的に学びに向かう生徒の育成
～全員参加型の授業を目指して～
単 元 名：「３年：標本調査」
～池の中の数の推定～
会 場 校：十日町市立中条中学校
公　　開：１学級
授 業 者：小林　成夢
指 導 者：中越教育事務所　学校支援第２課
指導主事　笠井　　繁 様



研究推進責任者
十日町市立中里中学校
小島　啓介



教科・領域担当者
十日町市立中条中学校
小林　成夢

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

自分の見方や考え方を分かりやすく伝えたり、自他の考えを比較して共通点や相違点を見つけようとしたりするなど、主体的に数学の学習に取り組む姿を目指します。また、自ら発言したり、他者の発言を聞いたりしながら生徒が意欲をもって課題を見いだし、それを解決していくような授業展開を行うことで、深い学びを実現します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.2）
学習課題において、全員が自分の考えや立場を明確にするために、既存の知識から仮説を設定する場を設ける。

これにより、生徒は自分事として課題解決を行うことができ、意欲的に学習するようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.9）
課題解決において既習事項とのずれを実感し、自他の考えを比較する活動を組織する。

これにより、生徒は学んだ知識を活用して思考や表現するために、共通点や相違点を見つけるようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）
自分の言葉で学習したことをまとめ整理することで、深い学びにつなげる。

これにより、生徒は既習事項を活用しながら、自分の新たな気付きを得ることで、次の学習への意欲をもつようになる。

## 単元（題材）の様子

実際に、様々な状況から数えきれない母集団の数を予想する活動を通して、標本調査の有用性を確認します。実際の数との誤差から、より正確な数を推定するためにはどのような方法があるのか検討するための仮説を立て、自らの考えを明確にします。

これにより、自分自身の考えを整理するとともに、他者の立場を把握できる環境を整えることで、生徒は自分事として課題解決に向かうことができます。

ポイント1



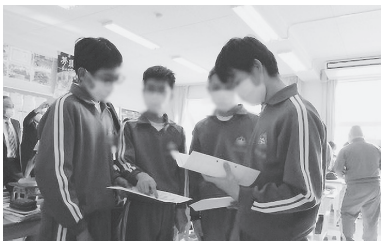
---

課題解決において既習事項とのずれを実感し、自他の考えを比較・検討します。様々な条件で標本調査を行い推定した結果に差があることから、より正確に推定を行うために必要な条件が何かを考えます。共通点や相違点を見つけ、自他の考えを比較することで、全員が意見をもち、生徒が主体的に学習に取り組みます。

これにより、課題解決に向けて比較・検討を行い、粘り強く話合いを重ねることで、数学的な見方・考え方を働かせることができるようになります。

ポイント2





---

他者と比較・検討した内容を自分の言葉としてまとめ整理することで、理解を深めます。池の中の魚の数を推定するために標本調査を活用すること、誤差を埋めるためにどのように工夫するのか言葉としてまとめることにより、次の学びへとつなげます。

これにより、生徒の中にはそれぞれの場面で働かせた見方・考え方を振り返りまとめることで、知識を蓄積するとともに、日常や社会の事象の「数学化」につなげることができるよう指導します。

ポイント3

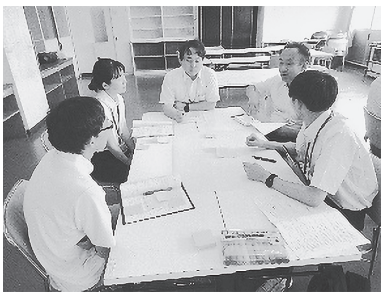


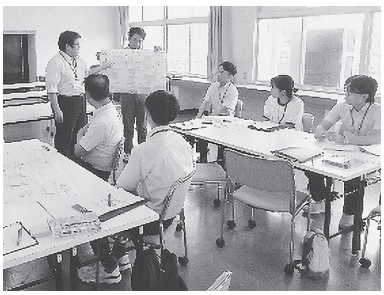


---

**研究会**

研究会当日の授業では、標本調査を実際に行い、「池の中の魚の数の推定」を行う予定です。具体的な場面を解決する活動を通して、自他の考えを比較検討しながら、課題解決に向けて主体的に活動する生徒の様子をご覧ください。





ポイント1・2・3

# 数学 ＜新潟地区／新潟市中教研＞

## 11月5日（木） 研究会開催

研究主題：数学的な見方・考え方を働かせて数学的に考える資質・能力を育成する授業
単 元 名：「１年：変化と対応」 授業者：竹内　　健
「２年：図形の性質と証明」 授業者：大橋　さゆり
「３年：図形と相似」 授業者：尾崎　帝士郎
会 場 校：新潟市立木戸中学校
公　　開：３学級
指 導 者：新潟大学　教授　阿部　好貴 様
新潟市立横越中学校　教頭　熊谷　友良 様
新潟市立総合教育センター　指導主事　村山　佳宏 様



研究推進責任者
新潟市立白根第一中学校
細川　伸子



教科・領域担当者
新潟市立木戸中学校
宮井　　誠

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

数学的に考え、資質・能力を身に付け発揮する姿を目指します。授業者は、各単元、授業の中で生徒が数学的な見方・考え方を働かせている姿を具体的にイメージしながら授業を構想します。そして、生徒の課題意識やつまずき、交流の姿などを想定し、生徒の思考を促す適切な手立てを講じます。そうすることで、既習と本時の課題を関連付けたり、これまでに有効だった方法を発展させたりしながら、学びを深めていきます。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）
既習内容と関連付けたり、これまでとの違いを問いかけたりしながら課題を設定する。

これにより、生徒は、自分たちの疑問や気付いたことを基に本時で考えるべき課題を自覚し、考え始めるようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8）
互いが考えたことを伝え合い、比較・検討する機会を保証する。

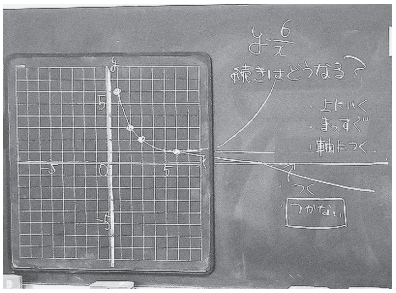
これにより、生徒は、互いの考えの共通点や新たな考えを見いだしながら思考を広げるようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）
仲間や教材との対話を通して気付いたことについて、理由や根拠を問う。

これにより、生徒は、納得いく理由や根拠を明確にするために筋道立てて思考し、学びを深めるようになる。

## 単元（題材）の様子

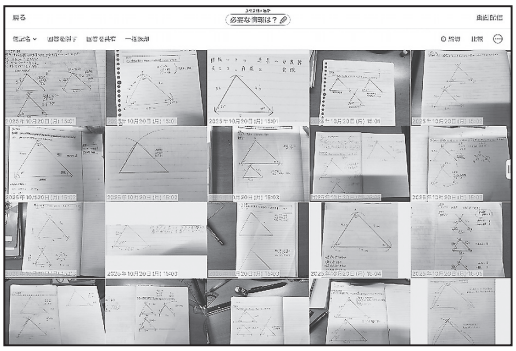
授業の導入では、既習との関連を見いだせるように課題を提示します。例えば、反比例のグラフの授業では、前時にかいたグラフについて「xが増加すると、グラフはどうなっていくだろう？」と問いかけます。様々な予想や疑問が出てくることで、生徒は探究する必要性を実感します。




ポイント1

---

生徒一人一人の考えを共有し、共通点や相違点を比較・検討することで思考を広げます。例えば、三角形の相似条件を検討するために、３辺の長さと３つの角の大きさが示された三角形と相似な図形をかく活動を組織し、互いがかいた三角形を共有・比較します。生徒は、３辺の長さ、２辺の長さとその間の角の大きさ、２つ以上の角の大きさを使ってかいた人がそれぞれいることに気付きます。この活動を基に、２つの三角形が相似であるための条件を検討します。

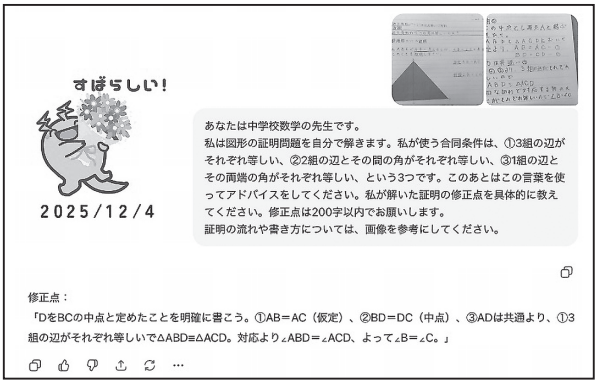


生徒の考えをロイロノートで共有

ポイント2

---

仲間や教材との対話によって比較・検討した内容について、論理的に整理していきます。例えば、反比例の授業では、グラフの特徴についてICTを用いた具体的な操作による探究の限界を実感させることで、生徒は表や式の学習に立ち戻り、そのとき見いだした反比例の性質と関連付けてグラフの特徴を論理的に説明します。また、図形の性質を証明する授業では、生成AIや仲間との対話を通して自分たちの証明を批判的に考察し、よりよい証明へと練り上げていきます。

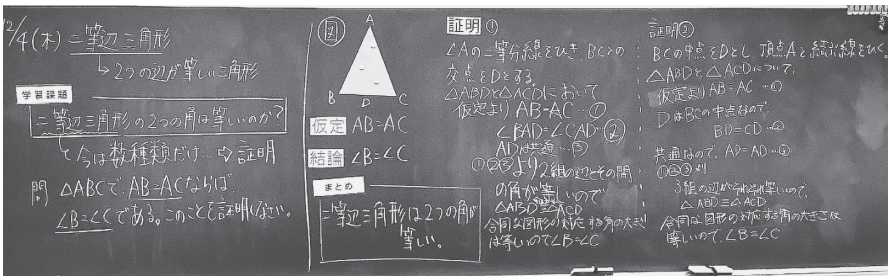



Chat GPTによる証明の助言

ポイント3

---

### 研究会




反比例のグラフ（１学年）、二等辺三角形の性質の証明（２学年）、三角形の相似条件（３学年）の３つの公開授業を予定しています。それぞれの単元、授業の中で生徒に働かせたい数学的な見方・考え方を具体的に想定し、生徒が主体的に学びを深める授業の実現を目指します。

ポイント1・2・3

# 数学 ＜下越地区／村上市・岩船郡中教研＞

## 10月28日（水） 研究会開催

研究主題：数学的活動を通して、深い学びを実現する
生徒の育成
～現実の世界での、活用・意味付けの
段階へと進むための工夫～

単 元 名：「２年：１次関数」
～１次関数の利用～

会 場 校：村上市立岩船中学校

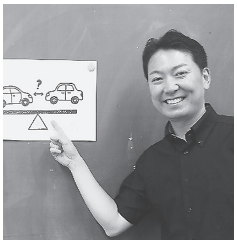
公　　開：１学級

授 業 者：佐藤　正実

指 導 者：小千谷市立千田小学校　校長　齋藤　忠之 様



研究推進責任者
村上市立村上第一中学校
小松田　泰弘



教科・領域担当者
村上市立岩船中学校
佐藤　正実

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

日常の具体的な事象を１次関数で表し比較する中で、計算上の最適解と現実のリスクや価値観を融合させ、自分なりの「納得解」を導く姿を目指します。計算上の費用が一致する課題を設定することで、生徒は他者と深く対話し、葛藤を乗り越えて合意形成を図るようになります。さらに自家庭のデータを分析することで、生活を豊かにする実用的な意思決定ツールとして数学を主体的に使いこなすようになります。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.5）

関数の変化の意味解釈に思考を特化するために、ICTを活用して描写の処理を行う。

これにより、生徒は計算や作図をICTで処理しながら生じた思考の余力を、グラフや式を読み取る解釈活動に集中するようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.2・8）

異なる前提を混ぜる異系交流と、計算上の総費用が一致する顧客課題を提示する。

これにより、生徒は数学的根拠だけでは結論が出ないことに気付き、不確定リスクや価値観を交えた深い対話をするようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.19）

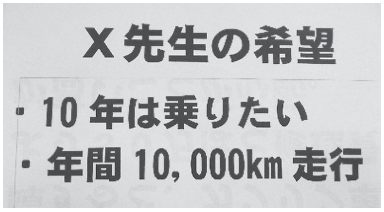
視点を明確にして振り返りを行うことで、学習過程と結果を客観的に「活用・意味付け」しながら内省する。

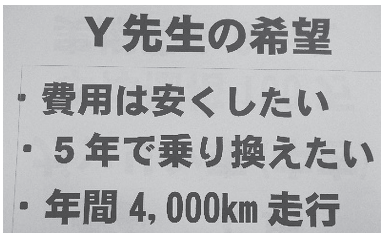
これにより、生徒は問題解決で得られた結果を日常の事象に結び付けて解釈したり、類似の事象に応用したりするようになる。

## 単元（題材）の様子

Ｘ・Ｙ先生の条件に合わせ、最適な車を選択し理由を説明する活動で、授業当初からICTのグラフソフトや電卓を使用し、傾きが細かく煩雑な計算や作図作業に思考が奪われないようにします。これにより、思考への余力を生み、「前提条件が変われば最安値となる車も変化する」という原理を１次関数のグラフから視覚的に捉え、「傾きや交点が何を表すか」「グラフを比較してどのようなことが言えるか」等のより高次な思考ができるようになります。また、解決への確信と自信をもつことにもつながり、生徒の主体的な問題解決への態度を育みます。

ポイント１




---

Ｘ先生・Ｙ先生を分析した生徒同士が交ざるグループを編成し、10年間の総費用が360万円で完全に一致するＺ先生の課題に取り組みます。これにより、数学上の損得が同額となる状況下では計算だけで結論がでないことに気付き、「10年目のバッテリー交換リスク（30万円）」や「初期費用の負担」など、条件外にある現実的な不安要素や価値判断に意識を向けるようになります。そこから相手の不安や判断基準、価値観に寄り添いながら、合意形成を図るための深い協働と必然的な対話が生まれます。

ポイント２





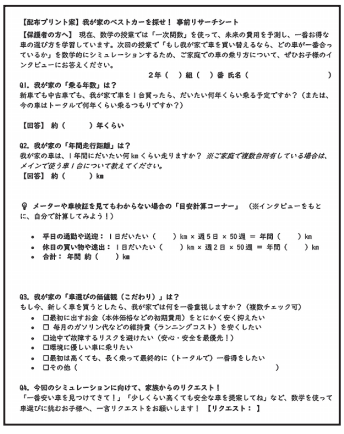





---

Ｚ先生への多様な提案を全体討論で共有・比較し、計算上の総費用が一致する中で、各自が大切にした価値観の違いを互いに認め合います。その後、事前課題として家庭で調べてきた走行距離や使用年数などの実データを基に、「我が家のベストカー」として相互にプレゼンテーションを行います。これにより、数学の問題を実生活に結び付けて考えることができるということに気付き、１次関数は日常の生活においても便利な意思決定ツールであることを自分事として深く実感するようになります。

ポイント３


【配布プリント案】我が家のベストカーを探せ！ 事前リサーチシート

【保護者の方へ】 現在、数学の授業では「一次関数」を使って、未来の費用を予測し、一番お得な車の選び方を学習しています。次回の授業で「もし我が家で車を買い替えるなら、どの車が一番合っているか」を数学的にシミュレーションするため、ご家庭での車の乗り方について、ぜひお子様のインタビューにお答えください。

2年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

Q1. 我が家の「乗る年数」は？
新車でも中古車でも、我が家で車を１台買ったら、だいたい何年くらい乗る予定ですか？（または、今の車はトータルで何年くらい乗るつもりですか？）

【回答】 約（ ）年くらい

Q2. 我が家の「年間走行距離」は？
我が家の車は、１年間にだいたい何kmくらい走りますか？ ※ご家庭で複数台所有している場合は、メインで使う車１台について教えてください。
【回答】 約（ ）km

🔍 メーターや車検証を見てもわからない場合の「目安計算コーナー」（ボインタビューをもとに、自分で計算してみよう！）

- 平日の通勤や送迎：１日だいたい（ ）km × 週５日 × 50週 ＝ 年間（ ）km
- 休日の買い物や遠出：１日だいたい（ ）km × 週２日 × 50週 ＝ 年間（ ）km
- 合計：年間 約（ ）km

Q3. 我が家の「車選びの価値観（こだわり）」は？
もし今、新しく車を買うとしたら、我が家では何を一番重視しますか？（複数チェック可）

- □最初に出すお金（本体価格などの初期費用）をとにかく安く抑えたい
- □ 毎月のガソリン代などの維持費（ランニングコスト）を安くしたい
- □途中で故障するリスクを減らしたい（安心・安全を最優先！）
- □環境に優しい車に乗りたい
- □最初は高くても、長く乗って最終的に（トータルで）一番得をしたい
- □その他（ ）

Q4. 今回のシミュレーションに向けて、家族からのリクエスト！
「一番安い車を見つけてきて！」「少しくらい高くても安全な車を提案してね」など、数学を使って車選びに挑むお子様へ、一言リクエストをお願いします！【リクエスト：】

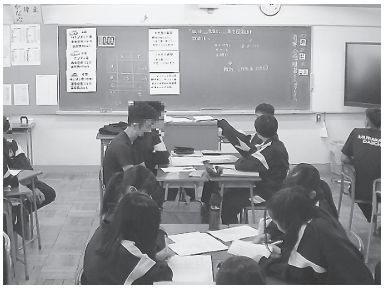
---

研究会

研究会当日の授業では、前時までに行った車選びの根拠や視点について議論を深め、それを基にして自分の家族の車選びのプレゼンを作成し、発表する活動を行います。

数学的根拠と現実的な価値観から粘り強く最適解を考察する生徒の姿をご覧ください。

ポイント１・２・３



# 道徳

## 対話を通して、課題について多面的・多角的に理解し、生き方について深く考える授業づくり

一つの価値を表面的に理解するのではなく、話合いや対話を通して、他者の考えや異なる立場に触れながら、物事を多面的・多角的に捉え、仲間との練り合いや練り上げによって、見方・考え方を深めていきます。

最後は、自己との対話を通して、自分自身の生き方に関わる問題（自分事）として捉え、深く考える道徳授業を目指します。




県中教研　道徳部　全県部長
新潟市立東新潟中学校　和泉　哲章

### 「見方・考え方」を働かせ、深い学びへいたる授業をつくる

道徳において、「見方・考え方」を働かせるということは、道徳的価値について、一面的な見方から離れ、様々な立場や状況、価値との関係から考え、つまり、多面的・多角的に理解し、自分自身との関わりで捉え直すことです。多面的･多角的に理解させるために、話合いや対話を各地区とも重視しています。話合いや対話で大切なことは、他者の意見を聞くことで自分一人では気付かなかった価値の側面に気付き、自分の考えを問い直すことです。多くの生徒が発言したからといって、多面的・多角的な話合いや対話でできたとは言えません。「見方・考え方」を働かせて深い学びにいたるためには、揺さ振りや発問などによって新たな視点を投入するなど教師に関わりは重要です。

**深い学びにいたるプロセス**

新たな問いへ

① **問題への直面**
「問いをもつ」
↓
② **自我関与**
「自分事として考える」
↓
③ **多面的・多角的な見方**
「対話し、考えを揺さぶる」
↓
④ **生き方への統合**
「自分の生き方を問い直す」



## 多面的・多角的思考を促し、深い学びにいたる発問の工夫

生徒による話合いや対話では、たくさんの意見が出ればよいというわけではなく、一人では気付かなかった価値の側面や様々な立場・視点に気付き、それらの観点から自分の考えを問い直すことが必要です。生徒自身が、「もう少し詳しく教えて」や「他の意見に対してどう思う」といった「問い返し」をしたり、異なる多様な考えを比較したりできれば、深い学びのつながる話合いや対話になります。もし、そのような状況が見られなければ、多面的・多角的思考を促すために、教師は、話合いや対話の進展を見取りながら、効果的に問い返しや揺さぶり、葛藤を生むような発問することが必要です。

そのためには、この教材における多面的・多角的な観点とはどのようなことか、どのような多様な視点から生徒に考えさせたいのか教材研究の段階で具体的に押さえておく必要があります。例えば、「友情は大切」に対して「なぜ友情は大切？」と問うことで価値の根拠を掘り下げることができます。また、同じような意見が続けば「別の見方は？」と問うことによって多様な考えを引き出すことができます。また、「本当にそれでいい？」と問うことによって、価値の揺さぶりになり、自分の考えを問い直すことにつながります。どんな視点方考えさせたいのか、それを発問として準備しておくことが大切です。

## 深い学びにいたる「深い学びの技法」の活用

### 設定　深い学びの技法　No.1、3

○ 学んだ知識を活用して課題や目標を設定する。
○ 視点・観点・論点を設定して思考や表現をする。
→ 多様な意見を創出する発問づくり
→ 課題解決のために知識や経験を活用し、思考に生かす

### 解決　深い学びの技法　No.10

○ 仲間と練り合いや練り上げをする。
→ 対話を通して自分の道徳的価値を問い直し、自分なりに納得解を得る
→ 自分の考えを見つめ直し、仲間に考えを生かして考えを深め、仲間と協働的に学んでいく

### 思考　深い学びの技法　No.7、8

○ 視点の転換や逆思考をして考える。
○ 異なる多様な考えを比較して考える。
→ 効果的な発問によって多面的・多角的思考を促進する
→ 対話や議論の場面での「問い返し」による思考の具体化、深化

### 表現　深い学びの技法　No.15

○ 自分の言葉で学んだことを整理しまとめる。
→ 振り返りにより生徒自身の学びの意味や深まりを実感する
→ 自分の言葉で表現することにより、自我関与を強める

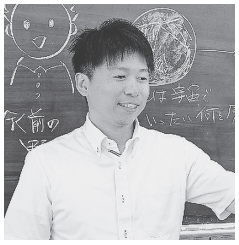
## 道徳　重点方針

1 校長の方針の下、道徳教育推進教師が中心となり、各校の実態を考慮して、重点目標を設定するなどして、道徳教育の全体計画及び年間指導計画を作成する。
2 自分事としての課題になるように、道徳的諸価値の理解を基にして、生徒の考えやこれまでの生き方を確認させるなどの働きかけを工夫する。
3 考え、議論させるために、多面的・多角的な視点からの重層的な発問や体験的な学習などを取り入れ、「自分を語る」授業を展開する。
ア 登場人物への自我関与中心の学習
イ 生きる上で出会う課題に対する問題解決的な学習
ウ 道徳的行為に関する体験的な学習

# 道徳 ＜上越地区／上越市中教研＞

## 11月10日（火） 研究会開催

研究主題：対話を通して、自分の考えを深め、
　　よりよい生き方を追求する生徒の育成
題 材 名：「１年:ちがいについて考えよう」C（11）公正、公平、社会正義
　　「２年：違反摘発」C（10）遵法精神、公徳心
　　「３年：カーテンの向こう」D（22）よりよく生きる喜び
会 場 校：上越市立名立中学校
公　　開：３学級
授 業 者：江端　洋平・夏井　日菜子・山口　達也
指 導 者：上越教育事務所　学校支援第２課
　　指導主事　草間　　啓 様



研究推進責任者
上越市立城東中学校
佐藤　　皓



教科・領域担当者
上越市立名立中学校
夏井　日菜子

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

　活発な対話を通じて価値観を再構築し、道徳的価値に対する自分なりの考えを深めながら、よりよい生き方を追求する生徒の姿を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

　深い思考を促す「発問づくり」：中心発問は「どんな思い？」「なぜ？」といった抽象的に問うオープンクエスチョンを心がける。

　これにより、生徒はより多様な意見を創出することができるようになります。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.7・8）

　対話や議論の場面での「問い返し」：「もう少し詳しく教えて」「他の意見に対してはどう思う？」といった問い返しを活用する。

　これにより、生徒は自身の思考をより具体化・深化させることができるようになります。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

　自分の言葉での「納得解」の表現：終末場面で、主題に対して「私はこう考える」といった自身の納得解を表現する活動を設定する。

　これにより、授業での考えの深まりを、より実感し、自身の生き方につなげていくきっかけとすることができます。

## 単元（題材）の様子

３学年「カーテンの向こう」の授業では、登場人物の心情理解にとどまらず、「よりよい生き方とは何か」という主題に迫ります。そのために、答えが一つにならない抽象的でオープンな発問を設定し、生徒の思考を深める手立てを講じます。

これにより、生徒は教材を自分事として捉え、多様な意見が交錯する活発な対話を通して自身の生き方を深く省察する姿が期待できます。

ポイント１

---

２学年「違反摘発」の授業では、「ルールやきまりは常に守られるべきものなのか」「その意義とは何なのか」といった問いに対し、多様な視点から議論を交わします。その中で教師は、効果的な「問い返し」を活用し、生徒の考えをより具体化させたり、他の意見と比較させたりする手立てを講じます。

これにより、生徒が自身の思考を揺さぶられながら、より多面的・多角的な視点から考えを深めていく姿が期待できます。



ポイント２

---

１学年「ちがいについて考えよう」の授業では、授業での学びや気付きを今後の実生活にどう生かすかという視点で、終末場面における振り返りを行います。手立てとして、主題に迫る問いに対して自分自身の「納得解」を自分の言葉で言語化させ、思考を可視化・再構築させます。

これにより、生徒が学びを自分事として深く捉え直し、単なるその場の理解にとどまらず、今後の行動やよりよい生き方に主体的に結び付けていく姿が期待できます。



ポイント３

---

**研究会**

本研究会では、１～３学年の全学級にて研究授業を公開いたします。取り扱う題材や内容項目は多岐にわたりますが、どのような授業であっても「生徒同士」「生徒と教師」の対話を基盤とし、思考を深めていく授業デザインの可能性を研究成果として提示いたします。

生徒も教師も多様な意見に出会う楽しさを感じながら授業に取り組む様子をご覧ください。



ポイント１・２・３

# 道徳 ＜中越地区／長岡市・三島郡中教研＞

## 10月30日（金） 研究会開催

研究主題：道徳的諸価値についての対話を通して、自分を『語る』授業
題 材 名：「２年：松葉づえ」B（８）友情、信頼
会 場 校：長岡市立北辰中学校
公　　開：１学級
授 業 者：北山　　舜
指 導 者：中越教育事務所
　　指導主事　本間　陽子 様



研究推進責任者
長岡市立三島中学校
山口　和希



教科・領域担当者
長岡市立北辰中学校
北山　　舜

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

道徳的諸価値について、他者との対話を手掛かりとして、自己との関わりを問い直し、よりよく生きるために必要な道徳的諸価値について再考し、理解を深めます。教材を通して、様々な人の気持ちが複合的に絡んだ諸事情の背景にある道徳的諸価値の多面性に着目させることにより、様々な角度から総合的に考察することの大切さに気付き、他者と共にいかによりよく生きるかについて考える生徒の姿を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.7・8）
視点の転換や逆思考をして考える。
異なる多様な考えを比較して考える。

効果的な発問や問い返しを用いて、広い視野に立って多面的・多角的に見ようとする心や論理的・批判的に考える姿勢が必要であることに気付かせます。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.10）
仲間と練り合いや練り上げをする。

生徒が道徳的諸価値についての対話を通して自分の道徳的価値観を再構築し、自分なりの納得解を導き出せるようになります。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.10・15）
学習成果と自己との関わりを振り返る。

対話で得た他者の道徳的諸価値にも目を向け、今後の生活への道徳的実践意欲や決意に昇華できるように振り返る時間を設定します。

## 単元（題材）について

本題材は、事故によるハンデをもつ転校生との関わりを通して、表面的な親切心に潜む「自己満足」や「優越感」に気付き、友達との関係について深く考えさせられる題材です。主人公らの姿勢と、対等な立場で接する伊藤君の姿を対比させることで、「本当の友達とはどのような関係なのだろう」というテーマに迫ります。

「助けてあげる・もらう」という上下関係を超え、状況や立場が変わっても互いを尊重し合える対等な「友達」について深く考える生徒の姿を目指します。

## 単元（題材）の様子

教材に対して「多面的・多角的」な視点をもって授業準備を行います。生徒の生活体験だけでは意図する「多面的・多角的」な視点にたどり着かず、複数での話合いに終始してしまうことがあるからです。

これにより、必要に応じて生徒が気付かないような新しい視点をもてるようになり、生徒の「見方・考え方」が広がります。

ポイント1

「多面的・多角的」な視点例

○ 様々な登場人物の立場
- 転校生に接する「主人公らの姿勢」と「伊藤君の姿勢」
- 転校生から見た視点

○「友達」の捉え方
-「助けてあげる」存在
- 自分と「対等」な存在

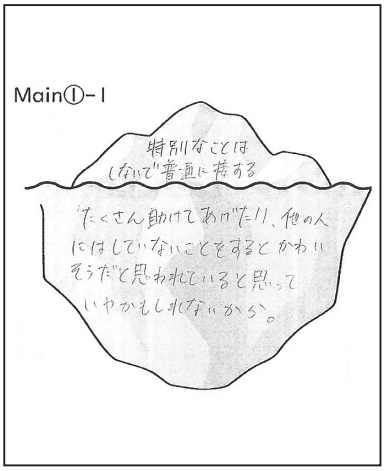
など

---

ポイント2

ワークシートには氷山モデルを効果的に用いて生徒が自分の道徳的諸価値を言語化できるようにします。

これにより、単なる生活体験の話合いだけでなく、道徳的諸価値についての対話ができるようになります。




ポイント3

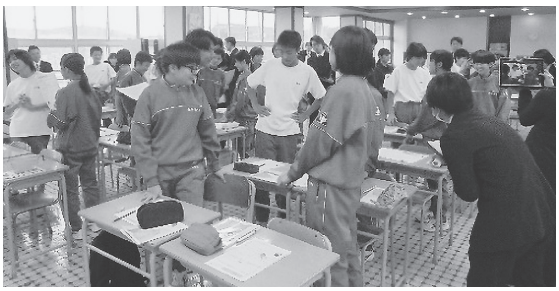
ワークシートの振り返りの欄を、「授業前、授業を受けて、これから」に分けて記入する欄を設定します。

これにより、授業や対話を通して自身の考えが変容したかどうかを可視化し、道徳的価値観を形成していく姿を目指します。

---

研究会

ポイント1・2・3



「松葉づえ」を題材に、２年生の授業公開を予定しています。

本教材は、交通事故で足をケガしている転校生との関わりや松葉づえをめぐる出来事を通して、上下関係ではない対等な「友達」との関係について考え、生徒たちが望ましい人間関係を構築していこうとする姿をご覧ください。

---

研究会当日は、授業で実践されたポイント１・２・３が、「深い学び」にいたるための有効な手立てだったのかを協議する予定です。

# 道徳 ＜新潟地区／新潟市中教研＞

## 11月12日（木） 研究会開催

研究主題：豊かなかかわりを通して、よりよく生きようとする生徒の育成
単 元 名：「２年:なんだろう　なんだろう～『ゆるす』ってなんだろう～」B（９）相互理解、寛容
「３年：ぼくの物語　あなたの物語」「あってはならない違い」C（11）公正、公平、社会主義
「３年：なんだろう　なんだろう～『自律』ってなんだろう～」A（１）自主、自律、自由と責任
会 場 校：新潟市立小須戸中学校
公　　開：３学級
授 業 者：金安　雅夫・清水　丈瑠・関山　広夢
指 導 者：新潟市立総合教育センター
指導主事　河原　久美子 様



研究推進責任者
新潟市立新津第一中学校
馬場　徳子



教科・領域担当者
新潟市立小須戸中学校
関山　広夢

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

２時間授業の２時間目の授業を公開します。１時間目で生徒から生まれた問いについて学級全体での対話形式の意見交換（P4C）を行い、自分の考えを多角的・多面的に捉え直し、道徳的価値について深める姿を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）
学んだ知識を活用して課題や目標を設定する。

これにより、生徒は道徳的価値を見出し、課題解決に向けて経験や知識を活用して思考するようになります。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8）
異なる多様な考えを比較して考える。

P4Cによる対話形式で、他者の考えや異なる立場の考えに触れることにより、生徒は多面的・多角的な視点から自らの考えを問い直し、見方・考え方を深めていきます。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）
自分の言葉で学んだことを整理してまとめる。

生徒は対話を通して深まった見方・考え方で、自分を見つめ直し、自分事として落とし込んでいきます。

## 単元（題材）の様子

本教材は、日常的な言葉について問い直す内容になっています。1時間目では学習した内容をもとに、自分たちで疑問に思ったことから、もっと掘り下げて考えたいことや、自分たちでもっと深めていきたいテーマを出していきます。そうすることで自身の経験や価値観をもとに考えを形成し、自分なりの答えを探究するきっかけになります。

ポイント1



---

前時で出し合ったテーマから、できるだけ視点が違うものを４つ程度に絞り、本時で掘り下げていくテーマを一つに絞ります。「許せないことがあってもよいのだろうか」（昨年度のテーマ）について、自分の経験や価値観をベースに円座になり対話していきます。その時、「セイフティー」（対話のルール）を示します。

これにより、生徒が安心して聞いたり話したりする土台ができます。

ポイント2

対話のルール
① ボールをもっている人だけが話せる。
② まだ話をしていない人にボールを回す。
③ 話さないときはパスができる。
④ 相手を傷つける言葉は言わない。

---

教師はコーディネーターとして円座の輪に一緒に入り、生徒の発言に注目させたり、新たな問いを提示したりしながら、対話形式で行います。自分の考えと比較し、多面的・多角的（自分と相手のために許すことでの違い、許すことと我慢することの違い、許さないことは悪いことかなど）に考えていきます。




ポイント2

最後に、対話で生まれた意見を活用しながら、本時のテーマについて自分の考えを表現します。様々な立場からの意見を受け入れながら、自分の考えを再構築します。

ポイント3

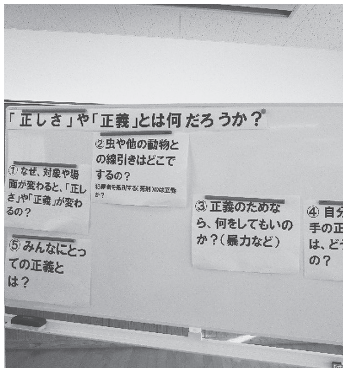
---

### 研究会

研究会当日の授業では、生徒が自分たちで考えたいテーマを決めて、対話する様子を公開します。

問いに対する自分の考えをもち、対話の中で、他者の意見や異なる立場に触れながら、多面的・多角的な視点から、自分の考えを問い直し、自分の考えを再構築していく姿をご覧ください。






ポイント1・2・3

# 道徳 ＜下越地区／佐渡市中教研＞

## 11月13日（金） 研究会開催

研究主題：異なる多様な考えを理解し、
　　深い学びに向かう生徒の育成
題 材 名：「３年：臓器提供」D（19）生命の尊さ
会 場 校：佐渡市立南佐渡中学校
公　　開：１学級
授 業 者：多川　　恵
指 導 者：下越教育事務所　学校支援第２課
　　指導主事　北川　　禎 様



研究推進責任者
佐渡市立高千中学校
市橋　由希絵



教科・領域担当者
佐渡市立南佐渡中学校
多川　　恵

## こんな深い学びの姿を目指します

臓器提供をめぐる様々な心情との葛藤を踏まえ、生徒がそれぞれの立場に立って多様な意見交換をする姿を目指します。また、対話の一つの手法である「等話」の視点で話合いを進め、ルールを守り、話す時間を平等にすることを意識します。生徒たち自ら安心して意見を出すことができる雰囲気を作り、相手を尊重した話合いをすることを通して、自分の考えを深め、かけがえのない命の連続性や有限性なども含めて理解し、生命を尊重する道徳的心情を育てます。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




### ポイント１（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

視点・観点・論点を設定して思考や表現をする。

視点や論点を明確にして思考・表現を進めます。多様な立場や角度から対象を捉え直すとともに、他者の考えを取り入れながら、多面的・多角的な見方・考え方を広げていきます。

### ポイント２（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8・10）

異なる多様な考えを比較して考える。仲間と練り合いや練り上げをする。

生徒は視点を変えて考えを深めます。多様な意見を交流しながら、自分の意見を見つめ直したり仲間の意見を組み合わせたりして、仲間と協働的に学んでいきます。

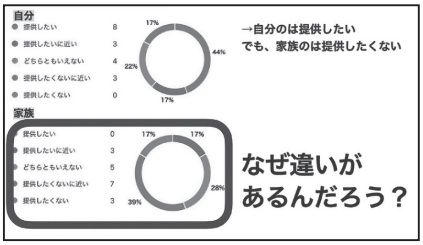
### ポイント３（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

自分の言葉で学んだことを整理しまとめる。

生徒は学んだことを自らの言葉で振り返りに記入し、深まった考えを自らの中に落とし込んで整理します。様々な視点や気付きと自身の思考を重ね合わせるプロセスを経ることで、生徒自身が学びの意味や深まりを実感できるよう促します。

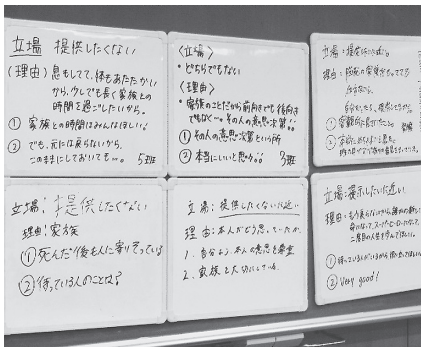
## 単元（題材）の様子

多様な立場や視点に立って考えられる課題の設定を工夫します。「臓器の提供者としての視点」や「移植の待機者としての視点」から臓器提供を考える中で、自分事としての実感を伴いながら思考を深めさせます。「提供者」と「待機者」の視点の転換により、生徒は葛藤や複雑な心情に寄り添いながら、他者の立場を共感的に理解しようとする力や、多面的・多角的に考える力を発揮し、課題へアプローチできるようになります。




ポイント1

---




ポイント2

個の思考を基盤とし、「等話」の視点を大切にすることで、生徒が安心して本音を語り合える対話の土台を築きます。展開場面では、ICTを活用して多様な意見を可視化することで、互いの異なる立場や価値観に気付き、比較しながら考える場を設定します。

こうした可視化をきっかけに友人との「練り合い･練り上げ」を活性化させ、生徒は視点を変えて自らの考えを深く見つめ直すとともに、仲間の意見を柔軟に取り入れながら対話を通して協働的に学びを深める力を発揮し、学びを深めていきます。

---

生徒は自らの言葉で振り返りを記入し、学んだことや深まった考えを自分の中に落とし込んで整理します。様々な視点や問いかけを通して捉え直すプロセスを経ることで、他者の捉え方や新たな気付きと自身の思考を重ね合わせ、より多面的・多角的に考えを深めていくことができます。

これらの活動を通して、生徒自身が自らの学びを俯瞰し、その意味や価値を捉え直すメタ認知的な力を発揮しながら、学びの意味や変容などの深まりを実感できるよう促していきます。



ポイント3

---

研究会

研究会当日は、臓器提供をする側、受ける側の立場にたって自分ならどうするか、他者はどのように考えているのかを比較しながら「かけがえのない生命」について考えていく活動を中心に授業を行います。

それぞれの立場から臓器提供について考え、他者との意見を比較していくことで、命の連続性や有限性についての深い学びに繋げていきます。

授業後の全体会では、中心発問や振り返りの発問を中心とした話合いを行う予定です。




ポイント1・2・3

# 美術

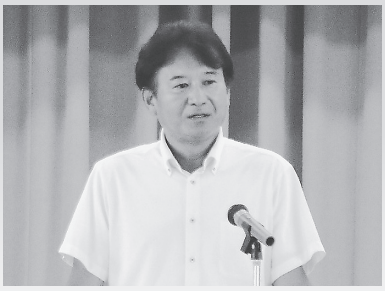
## 「想像」と「創造」の往還を通して、見方や考え方、感じ方を深める授業

**「ただの石ころ」**が**「特別な石ころ」**に変わることってありませんか？

それは自身の眼差しの変化によって意味や価値が際立つ瞬間があるからです。

AIの進化や予測不能な社会の変化が加速する今だからこそ、人間にしかできない**「感じる」「つくる」は、これからの時代の力**になります。

これこそ「美術」で培う力です。



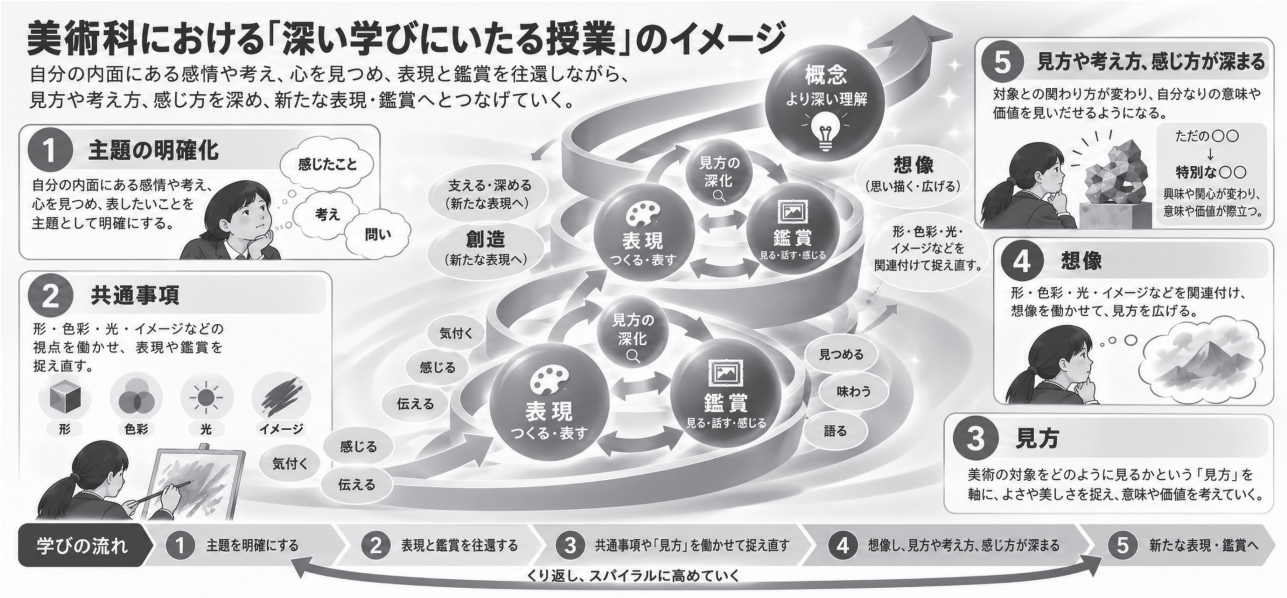
県中教研　美術部　全県部長
胎内市立築地中学校
校長　稲生　一徳

### 見方や考え方、感じ方を深める**「表現と鑑賞の一体化」**

現行の学習指導要領に、「見方や考え方」に加えて「**感じ方**」が示されている教科は、美術のみです。また、〔共通事項〕に基づくと育むべき資質･能力も明快に説明できます。

松縄先生（大崎学園）のICTを活用した授業、石川先生（猿橋中）の伝統の技を学ぶ授業ともに、生徒がよさや美しさに「気付く」「感じる」「伝える」ことが豊かにできるように学びの技法を手立てとした授業を公開します。

大泉義一（早稲田大学教授）はデザイン思考のプロセスを「発散→収斂→発散→収斂・・・」としています。発散を「表現」、収斂を「鑑賞（言語活動）」と置換し考えると、表現と鑑賞の一体化は、探究的な学習の入口ともいえます。



## 見方や考え方、感じ方を深める「主題の明確化」

生徒が自らの感情に向き合い、感性を豊かに働かせながら価値を見いだした「様々な感情をカタチに表そう」という実践を紹介します。

自身の内面にある感情の複雑さを捉え、形や色彩、粘土の質感や量感などから、言葉だけでは表現することが難しい繊細で複雑な感情に向き合いながら、立体作品で表現しました。

鑑賞では、見る位置によって形や色彩の見え方が変わることで、印象（感じ方）が変わることに気付かせ、複雑な感情の変化や揺れなどを表現に結び付けた力のある実践でした。









## 見方や考え方、感じ方を支える「概念」

**生徒が考えを深めていくための軸となる概念として「見方」**を示し、「漆」のよさや美しさを感じ取りながら、見方や感じ方を深めていく実践を紹介します。

英訳でJapanとの呼称もある「漆」のイメージを生徒に尋ねると「伝統文化として継承すべきもの」「高価な漆器」など、身近なものではありません。また、「蒔絵」や「螺鈿」を知識として得たとしても生徒に「漆」のよさや美しさを実感させることは難しいものです。

手立て１：触れて感じる
　　比較して鑑賞する
手立て２：漆を知る（動画の活用）
　　「漆の価値」について考える
手立て３：見方・考え方の変容から考える
　　「漆の価値」の実感

**「これからの私たちの生活に「漆」を生かすなら、どんな場面や作品が考えられますか」**と問うことで、漆の魅力と自分の生活との関わりを生徒は考えます。「スマホケースとして使いたい」という現代的な声（見方）もありました。




## 美術　重点方針

「美術を通して、豊かな生き方やコミュニケーションができる生徒の育成」
○ 形や色彩など造形的な美しさを表現したり、鑑賞したりする授業を通して、お互いの見方や感じ方を深める生徒を育てる。

# 美術 ＜中越地区／三条市中教研＞

# 11月13日（金） 研究会開催

研究主題：ICTを活用し、仲間と検討する活動を通して、
　　作品を練り上げる能力を育成する授業
題 材 名：「７年：三条かってに応援団
　　～文様バッグを作ろう～」
会 場 校：三条市立大崎学園
公　　開：１学級
授 業 者：松縄　　舞
指 導 者：新潟大学教育学部　　准教授　永吉　秀司 様
　　新潟市立光晴中学校　校長　　渡邉　敏尚 様



研究推進責任者
三条市立第三中学校
兒玉　季恵



教科・領域担当者
三条市立大崎学園
松縄　　舞

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

既習事項を手掛かりに、思いが伝わるデザインになるように、仲間と意見交流し、作品を練り上げる姿を目指します。また、プレゼンテーションソフトを活用し、モチーフの配色や配置の異なるデザイン案を数パターン持ち寄り話し合うことで、美的感覚を相互に働かせ、さらに洗練した文様装飾になるよう、地域（社会）との関わりなどを意識させ、総合的に追求し、創造的に表します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

既習学習から、課題を醸成し、生徒自ら考えたくなるような課題を設定する。

教科横断した既習事項から課題を見いだすことで、生徒の課題解決の意欲を高めます。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.15・16）

話し合う手立てとして、生徒が思考を深めるための工夫をする。

テーマ（主題）を明確にするためのワークシートや、ICTを活用することで、話し合う場面で自分の意見を述べ、積極的に話し合う環境を整えます。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

より思いが伝わるデザインになるよう仲間と練り上げる活動をする活動を組織する。

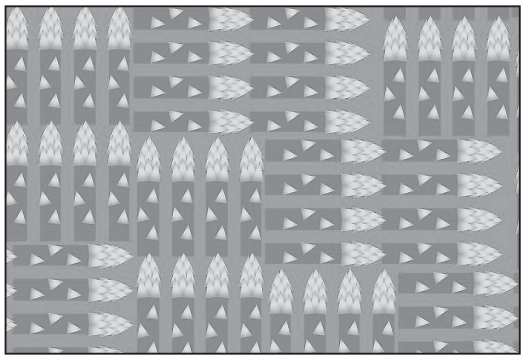
デザインを客観的に観ることで、新たな気付きを得て、よりテーマや思いが伝わるデザインになるように再考します。

## 題材の様子

本題材は、「三条市」から連想される場所や物、そこから感じ取ったことを主題として設定し、文様（連続模様）を制作します。

美術科の既習事項（文様）と総合的な学習の時間の既習事項（地域学習）を関連付けて、地域を応援する文様のデザインを課題として設定します。

ポイント1

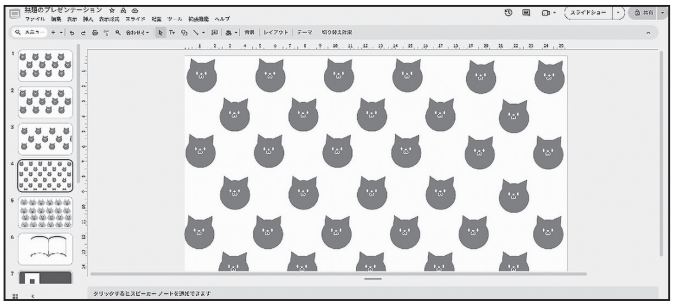


▲教師が作成したサンプル

---

プレゼンテーションソフトのスライドを増やせる機能を活用し、色や形、配置の異なるデザイン案を複数用意させます。

これにより、デザインを安易に決めるのでなく、複数のデザインを比較し、より主題に合ったデザインになるよう検討しやすくなります。また、話し合う際に、デザインを可視化しておくことで、苦手な生徒も話すきっかけになるよう促すことができます。



▲Googleスライドでの制作の様子

ポイント2

---

本題材では、完成した作品（文様）を実際に三条市内の店舗でバッグとして使用していただく予定です。そのため、自分だけが納得するデザインではなく、誰が見ても意図が伝わるデザインである必要があります。話合い活動により、第三者から見たらどう映るのかを確認し、より主題に迫る作品になるよう仲間とともに練り上げを行います。それにより、デザインの客観性が向上し、より洗練された作品の制作につながります。

ポイント3



▲昨年度プレ授業の様子

---

研究会

プレゼンテーションソフトで制作したデザイン案を持ち寄り、「色・形・配置」の観点から、伝えたい主題が最も伝わるデザインとは何かを仲間とともに練り上げる授業をご覧ください。

ポイント2・3

▼昨年度プレ授業の様子（協議会）



---

協議会会場では、研究推進委員の実践発表も予定しています。公開授業・協議会・実践発表を経て、明日の授業の活力になるような研究発表会になるようにします。

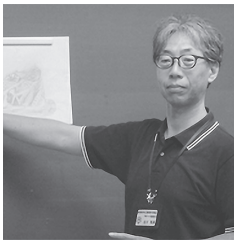
# 美術 ＜下越地区／新発田市中教研＞

## 11月19日（木） 研究会開催

研究主題：人との関わりを通して、考えを深めさせる指導の工夫
～対話を通して、造形的な見方・考え方を深める授業～
題 材 名：「２年：地域の職人から学ぼう～和菓子から学ぶ造形美～」
～デザイン・塑造・鑑賞～
会 場 校：新発田市立猿橋中学校
公　　開：１学級
授 業 者：石川　雅英
指 導 者：新潟県教育庁義務教育課指導第２係
指導主事　高橋　淳一 様




研究推進責任者
新発田市立本丸中学校
石井　彩子



教科・領域担当者
新発田市立猿橋中学校
石川　雅英

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

地域の老舗和菓子職人から学んだ「和菓子」の繊細な造形美や、五感に訴えた季節感を樹脂粘土で表現します。また、班で完成作品を深く鑑賞します。本題材の学習を通して、「仲間の制作意図や表現の工夫を、自分の美術観として受け入れることができるか」「新たな美術観を自分の言葉やデザインで表現しているか」という視点から、自分が制作する作品の主題を明確にし、感性豊かに表現できる生徒を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.9）
学んだ知識や技能を活用し、季節や主題のよさが伝わるように造形の要素を意識した和菓子のデザインを考える。

これにより、見る人に季節感や思いが伝わるよう、形や色を組み合わせた、独自のデザインを考えようとします。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.13）
四季や主題から受けたイメージをどのように表現すると相手に伝わるかを話し合う活動を設定する。

これにより、対象を様々な見方や感じ方から捉え直し、表現や鑑賞の視点を広げ、構想を練り上げます。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.17）
鑑賞活動を通じて、新たな美術観や表現方法を受け入れ、次の作品制作に生かそうとする。

これにより、作品を多面的・客観的に思考し、よさだけでなく改善点にも根拠をもつことができます。

## 単元（題材）の様子

「和菓子は五感の総合芸術である」「地域の歴史や文化」「和菓子の特徴」について授業に取り入れていきます。

見る人に季節感や思いが伝わるように、形や色の組み合わせ、模様や大きさを工夫し、自分らしい和菓子をデザインできるようにすることで、美術文化の継承と創造について考えさせます。



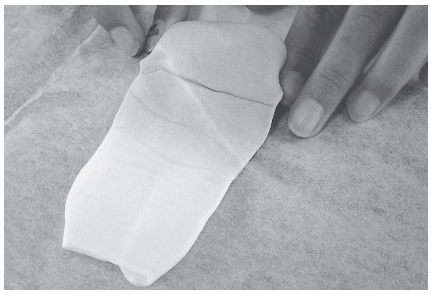
ポイント1

菓子職人の講演会で「和菓子」の特徴を学ぶことにより、「四季や主題をどのように表せばよいか」「なぜその形・色・模様を選んだのか」と自分のデザインについて理由や根拠を示しながら説明することができます。さらに対話活動を通して、アイデアや作品を比較・検討してよりよい表現につなげる力を育んでいきます。



ポイント2

作品や資料をよく見て、ただ真似るだけでなく、よさや課題を見極め、その理由を考えられるよう、既製の和菓子や試作品、生徒同士の作品を深く、鑑賞していきます。そして、参考にする点と自分なりに工夫する点を整理し、四季や主題が伝わるオリジナルの和菓子を樹脂粘土で表現できるよう促します。





ポイント3

### 研究会

前次に老舗菓子職人の講話を聞き、四季の和菓子や「菓銘」について学びました。研究会当日では、班ごとに、意見交換をしながら四季と主題を決定し、各自紙面にデザインを描いたり、樹脂粘土で表現したりする活動を行います。

既習事項の活用と対話を通じて、試行錯誤しながら、制作に取り組む生徒の姿をご覧ください。



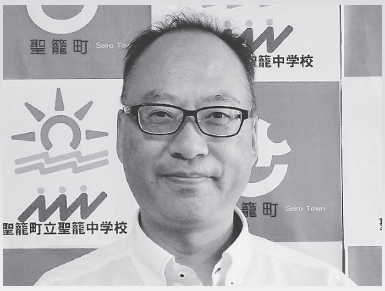



ポイント1・2・3

# 技術・家庭

## よりよい生活や社会を創造しようとする生徒の育成
## ～実体験や関わりを通した、深い学びにいたる授業～

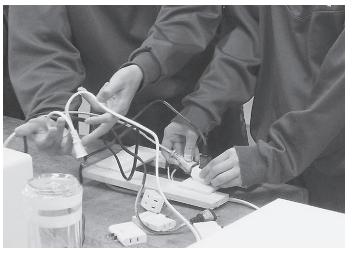
私たちを取り巻く社会が、時代の急激な変化によってこれまでにないスピードで姿を変えています。技術革新や価値観の多様化が進む中、よりよい生活や社会を考えていくことが、次世代を生きる子どもたちには不可欠であり、当教科では重要なことです。技術・家庭の目標は、「実践的・体験的な学習」を通して、学習したことを生かし、生活を工夫し、創造する力を育成することです。そこで、現在の生活や社会の課題を自分事として捉え、過去から未来への時間軸（主体的な学び）と、多様な考えに触れる平面軸（対話的な学び）による深い学びにいたる授業の実践を行います。以下、今年度の発表につながる昨年度の実践について紹介します。




県中教研　技術・家庭部　全県部長
聖籠町立聖籠中学校　藤原　　明

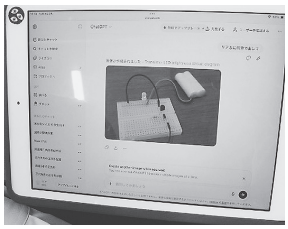
### 上越地区技術　専門家からの学びを生かし、安全な電気機器の接続を思考する

市村先生（城西中学校：技術分野）の実践では、「Cエネルギー変換の技術：電気機器の安全な利用」において、複数の電気機器を接続する際の安全な組み合わせについて学びを深めた。前時では、東北電力保安協会の協力のもと、専門家による電気機器による事故の危険性について体験的に学習することができた。その上で、本時では、安全な接続方法を考える活動として、オリジナルのシミュレーションアプリを使ったツールを活用し、グループごとに接続案を思考した。その後、教室に用意した実際の家電製品を漏電ブレーカや使用電力表示があるテーブルタップに接続し、適切な接続であるかを確認した。地元企業との対話的な学びや、実物を用いた主体的な学びのある授業となった。



### 新潟地区技術　他者やAIとの対話を通し、よりよい製品を創出する

土屋先生（R7所属：白新中学校、現所属：新潟大学附属新潟中学校）の実践では、「Cエネルギー変換の技術」と「D情報の技術」の２つの内容を融合し、日常生活をよりよくするための製品の創造を題材とした。導入段階では、５Gの時代や、IoTなどの現在の技術の進化を取り上げ、それがセンサ・アクチュエーターによって実現できていることを、製品や過去の作品から実体験させた。本題材での課題を「ひとに、よりよい感情を創り出す技術とは」とし、人が得られる安心や癒しなどの感情をどのように工夫することができるかを考え、回路設計では他者やAIとの対話的な学びを通し、ブレッドボード上での回路製作に取り組む姿が見られた。AIによる画像認識や回路提案に精度の課題はあるが、今後に向けた提案性のある授業となった。



## 上越地区家庭　初めての染色体験をきっかけに、持続可能な衣生活を思考する

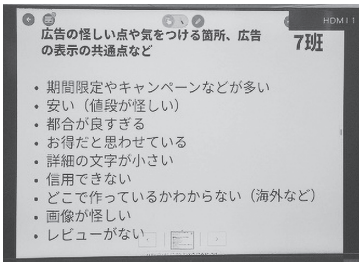
箕輪先生（直江津東中学校：家庭分野）の実践では、「B衣食住の生活（衣生活）」と「C消費生活・環境（消費生活）」を融合した。本題材を「持続可能な衣生活ってなんだろう」とし、自分たちの衣生活がどのように支えられ、社会とつながっているかを考え、多角的に思考し課題解決をする授業を展開していく構想である。本時では「マリーゴールド」での染色体験を通して、生徒が自分事として意欲的に課題に取り組めるよう、上越教育大学の指導者の協力を得ながら、教材開発を行った。



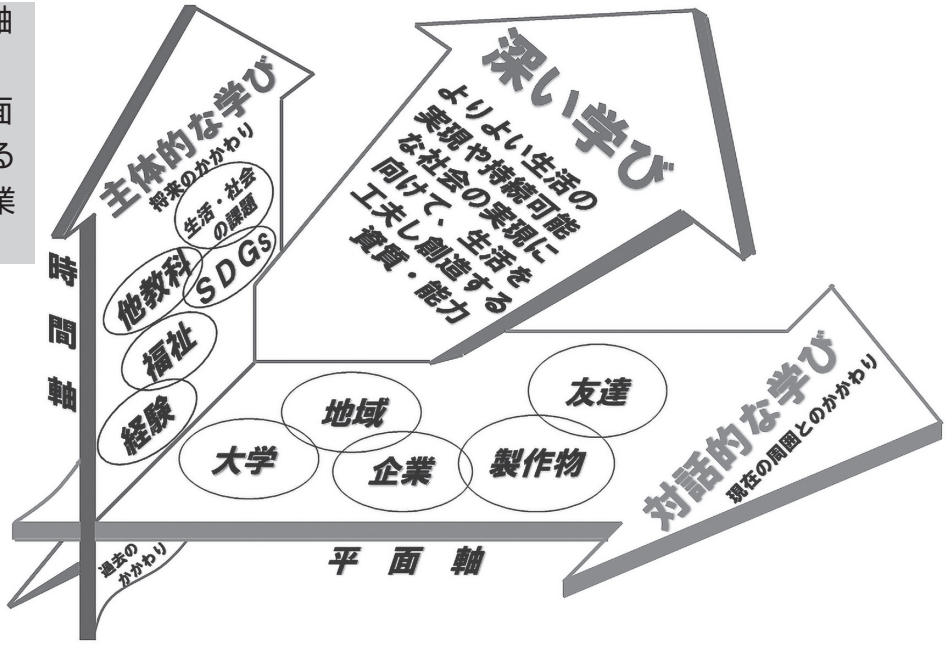
初めての染色体験を通して、仲間と共に学び共感し、身近な衣服のことや環境に係る主体的な学びがある授業となった。

## 新潟地区家庭 信頼できるデジタル広告？消費者として正しい判断力を育成する

佐藤先生（R7所属：小針中学校、現所属：新潟大学附属新潟中学校）の「C消費生活と環境」の実践では、題材を「よりよい消費者になるために」とし、売買契約の仕組み、消費者被害の回避方法を含め、物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理を適切にできることをねらいとした構想である。昨今では、ネット上にデジタル広告が溢れ、内容の曖昧さ、適正価格、安全性などを消費者として、正しい判断が求められる時代である。そこで、授業者は仮のデジタル広告を複数制作し、視点ごとに信用できるものであるかなどを自分事として考えさせ、深い学びにつなげた。家庭及び技術分野の内容を含んだ提案性のある授業であった。




過去から未来への時間軸（主体的な学び）と多様な考えに触れる平面軸（対話的な学び）による「深い学び」にいたる授業のイメージ図




## 技術・家庭　重点方針

実践的・体験的な学習活動を通して基礎的・基本的な知識及び技術を身に付けるとともに、学習したことを生かして、よりよい生活、社会を目指そうとする能力と態度の育成に努める。

○ 生活実態や社会状況を適切に把握し、学習意欲を高め、生活との関連を重視した指導計画や教材開発に努める。

○ 学習結果や技術と家庭や社会との望ましい関係等について、自分の考えを発表したり、話し合ったりする活動場面を設定する。

# 技術・家庭 ＜上越地区／上越市中教研＞（技術分野）

## 11月10日（火） 研究会開催

研究主題：よりよい生活や社会を創造しようとする生徒の育成
～実体験や関わりを通した深い学びにいたる授業～
単 元 名：「２年：エネルギー変換の技術」
～電気機器の安全な利用～
会 場 校：上越市立城西中学校
公　　開：１学級
授 業 者：市村　尚史
指 導 者：上越教育大学　助教　山﨑　恭平 様



研究推進責任者
上越市立城東中学校
水澤　　学



教科・領域担当者
上越市立城西中学校
市村　尚史

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

技術の見方･考え方を働かせながら、安全かつ適切に電気機器を利用する方法を比較･検討する学習を通して、自分たちの生活を主体的に創造する姿を目指します。具体的には、地域の専門機関との連携や、実物の電気機器の活用、シミュレーションアプリで繰り返し試行する場面を取り入れます。これにより生徒は、生活の中にある技術の価値や役割を実感し、習得した知識を実生活の課題解決に生かせるようになります。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.9）
実物教材による体験活動等で得た既習知識を活用し、課題の解決方法について思案する場面を設定する。

これにより、生徒は安全性や利便性など多面的な視点で思考し、環境や場面に応じた最適解を導き出せるようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.13）
実物教材での体験活動やシミュレーションアプリでの試行を踏まえて、自分の考えを論理的に表現する場面を設定する。

これにより、生徒は結論を導き出すに至った経緯や根拠を整理し、自分の考えの妥当性を説明できるようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.8）
自分の考えた結論と理由を互いに伝え合って比較し、自分の考えを深める場面を設定する。

これにより、生徒は画一的な考えから多面的・多角的な考えでより最適な解を追究するようになる。

## 単元（題材）について

上越地区の技術・家庭（技術分野）においては、２学年で取り扱われることの多い「内容Ｃエネルギー変換の技術『電気機器の安全な利用』」に着目しました。その理由として、第一に、この学習内容はカリキュラム上２時間程度で扱われることが多く、時数の制約から知識伝達型の授業になりやすいという課題があるためです。第二に、体験的な活動を構想した場合、実験器具の準備・調整等に電気工事士の資格を要する場合があり、資格を持たない教員では体験的活動を組みにくい状況があります。そこで、人命に関わる重要な学習内容を短時間でも充実させられるよう、体験的な活動を取り入れた新たな授業構成を工夫しました。

## 単元（題材）の様子

前時には、外部講師を招聘して実物教材による体験学習を行っています。この既習内容を踏まえ、複数の電気機器を同時に使用しても安全に利用できる接続状況について、独自開発したシミュレーションアプリを活用して考えていきます。アプリの優れた操作性が、生徒の「電気機器の使用時に安全性と利便性を両立させたい」「生活スタイルに応じて機器を使い分けたい」といった思いを引き出し、柔軟な思考の更新を自然と促していきます。




ポイント１

---

シミュレーションした結果を端末画面で提示しながら視覚的に共有し、互いの考えを発表し合います。

その際、説明に説得力が増すよう、機器をその配置にした意図や安全性が確保できている根拠などを結論と併せて説明させることで、論理的に説明する力を育んでいきます。



ポイント３

ポイント２

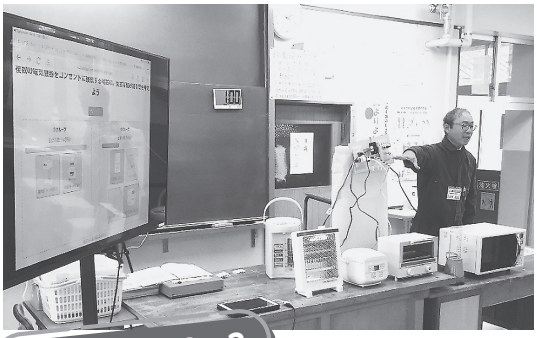
互いの考えをグループ内で共有する場を設定することで、多面的な視点に触れ、多様な解決策を知る機会となります。新たな安全確保の方法や機器の使い分けに気付くことで自分の考えが更新され、より安全性や利便性を追究することにつながります。

---

### 研究会

研究会当日の授業では、条件設定された状況において複数の電気機器を安全に使用するために、最適な接続方法を考えていきます。

シミュレーションアプリを活用し、既習内容を踏まえた自分の考えをまとめます。さらに、他者とも対話しながら考えを更新していき、状況に応じた最適な解を主体的に追究していく様子をご覧ください。



ポイント１・２・３

# 技術・家庭 ＜上越地区／上越市中教研＞（家庭分野）

## 11月10日（火） 研究会開催

研究主題：よりよい生活や社会を創造しようとする生徒の育成
～実体験や関わりを通して、思考を深める授業～

題 材 名：「１年：衣生活・消費生活」
～持続的な衣生活を考える～

会 場 校：上越市立城西中学校

公　　開：１学級

授 業 者：佐藤　洋美

指 導 者：上越教育大学　助教　田澤　紫野 様



研究推進責任者
上越市立直江津中学校
大野　洋子



教科・領域担当者
上越市立城西中学校
佐藤　洋美

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

衣生活と消費生活を融合させた題材を構想し、「深い学びの技法」を取り入れ、授業を実践します。衣生活の課題に関する調べ学習や身に付けた知識や技能を活用して思考を広げることに加え、実践的・体験的な活動や仲間との対話を位置付け、実感を伴った理解を促します。そして、自己の生活を取り巻く様々な課題を自分事として捉え、思考を深め、よりよい生活や社会の創造に向けて主体的に学ぶ生徒の育成を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

豊かな衣生活の背景にある様々な課題にふれ、学んだ知識や技能を活用し、思考や表現をする活動を設定する。

これにより、生徒は衣服の生産・選択・着用・廃棄の過程での課題に気付き、自分事として考えるようになる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

実践的・体験的な活動を通して気付いたことを基に、理由や根拠を示して論理的に説明し合う活動を設定する。

これにより、生徒は調べ学習で知識として理解したことと実体験とを関連付け、思考を広げ、深めるようになる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.19）

学習の成果と自己との関わりを振り返り、思考の深まりを可視化できるよう、振り返りシートや発問を工夫する。

これにより、生徒は新たな気付きを整理し、自己の考えの変容を確かめ、今後の学びや実生活に生かそうとする。

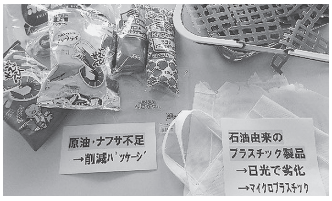
## 単元（題材）の様子

**ポイント1**

衣服の製造過程、環境汚染や廃棄衣料に関する調べ学習と発表、動画視聴などにより、環境、資源、生産者の労働問題など社会の現状を深く捉える活動を設定します。さらに、昨今の原油不足の問題なども関連付け、衣服材料となる様々な原料、繊維の種類や特徴、手入れの仕方について理解を深めます。

生徒は、これまで深く考えずに選択･着用･廃棄していた衣服や様々なものの扱い方や生活を問い直し、必要感や切実感をもって主体的に学ぼうとするようになります。



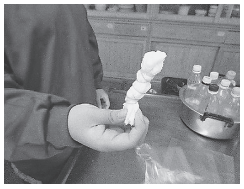




---

**ポイント2**

植物（マリーゴールド）を染料とし、綿布と多繊交織布を用いて、衣服の製造過程の一つである「染色」を体験します。生徒にとって初めての染色活動で、思い思いの模様に染め上がる布に満足感や達成感が得られます。

生徒は、改めてものづくりの楽しさを実感するとともに、少量の染色を体験したことで、社会全体で大量生産･大量消費・大量廃棄される衣服の生産に使用する水の量や廃液が環境に及ぼす影響などを比較しながら考え、理解を深めます。そして、課題について根拠や理由を明確にして自己の考えをまとめたり伝え合ったりすることができます。

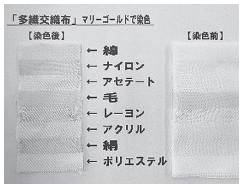










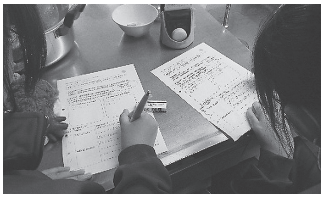


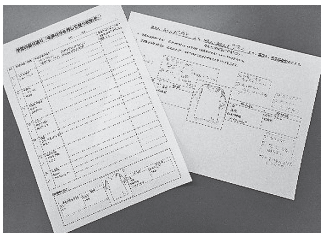

---

**ポイント3**

活動ごとや題材全体を通した学習の振り返りを蓄積し、「学びの足跡」として新たな気付きや自己の考えの変容などを確かめます。振り返りでは、教師が考える視点を複数提示したり、振り返りの内容を仲間と共有する活動を設定したりします。

これにより生徒は、学んだことと自己の生活、社会の様々な人、もの、こととを関連付けて考えを具体的に表現し、思考を深めます。３年間の家庭科学習の導入となる本題材の学習で身に付けた見方・考え方を生かし、今後、他の学習においても主体的な学びを進めていくことを期待します。





---

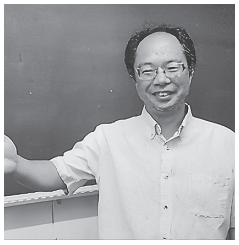
**研究会**　**ポイント1・2・3**

研究会では、題材のまとめとして「未来の人のぶんも残して使う衣生活」を考えます。衣生活の課題を追究したことと「消費者の権利と責任」について学んで得た知識や技能を活用して、持続的な衣生活のために自分ができることを提案し、学級の仲間との意見交流を通して題材全体を振り返ります。協議会では、深い学びにいたる手立てとして本実践が有効であったか、ファシリテーションを通じて意見交換をする予定です。

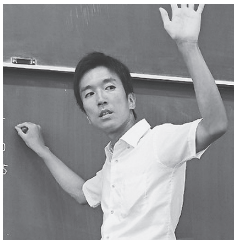
# 技術・家庭 ＜新潟地区／新潟市中教研＞（技術分野）

## 11月26日（木） 研究会開催

研究主題：よりよい世界と未来を創造しようとする生徒の育成
～生活や社会と学びがつながるストーリー～
単 元 名：「１年：材料と加工」
～生活に役立つ製品の設計・製作～
会 場 校：新潟市立早通中学校
公　　開：１年１組学級
授 業 者：加藤　宏章
指 導 者：新潟市立総合教育センター　指導主事　稲葉　康宣 様



研究推進責任者
新潟市立関屋中学校
古澤　康弘



教科・領域担当者
新潟市立早通中学校
加藤　宏章

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

「技術の見方・考え方」を働かせ、生活や社会から問題を見いだして使用目的や使用条件に適した製品の設計・評価を行うことで、自らの生活をよりよい世界と未来を創造しようとする生徒の姿を目指します。生活や社会と学びがつながるストーリーとして、教室内の不便さを解決する製品設計を先行させ、技術的な問題解決プロセスを実感させることによって、生徒は材料の特性や構造の強度といった知識・技能を「課題を解決するために必要な武器」として主体的に引き出しながら、それらを自らの個別製作物の設計・製作へと確実に反映させ、最適解を粘り強く追究して具現化しようと学びを深めていく生徒の育成を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）
日常生活における解決課題に焦点を当て、解決すべき技術的課題を「自分事」として捉えさせる。

「技術の見方・考え方」を働かせ、身近な生活から主体的に課題を見いだし、見通しを立て設計に取り組もうとする。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.10）
生成AI等を活用し視覚的な補完をうけ、仲間との協働的な対話を通してアイデアを練り上げる。

これにより、生徒は自分の構想における不都合や改善点に能動的に気付き、より最適な設計へと改善しようとする。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）
利便性や妥当性を他者に向けてアピールしたり、比較評価することで、理解を深められるようにする。

使用目的や条件に即して最適な効果を評価し、修得した資質・能力・考え方を次の学習や生活に生かそうとする。

## 単元（題材）について

従来の「材料や構造の学習」を先に行う知識先行型学習では、知識の獲得自体が目的化しやすく、設計時にそれらが生かされないという課題がありました。本実践では「教室内の不便さの解決」という生徒全員が共通して感じるリアルな課題を出発点とし、共通製品の設計・評価を先行して行います。この「設定・思考・評価」のプロセス（ポイント１～３）を明確な文脈で構築することで、必要性に迫られた生徒が材料や構造の知識を「自分事」として捉え、自律的に探究する往還型のストーリーを生み出すために本ポイントを設定しました。

## 単元（題材）の様子

**ポイント１**

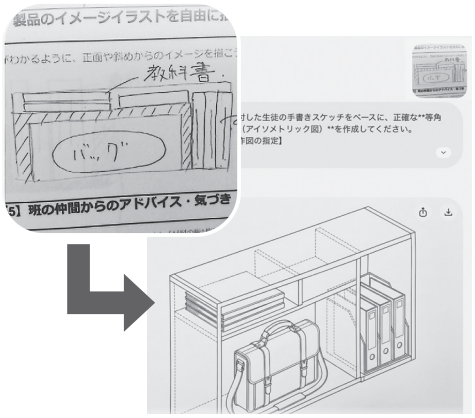
１年材料加工の導入として「教室内における不便さ（ホワイトボード周りのものをまとめて収納できる製品等）」をテーマに提起し、クラスで共有可能な解決製品のアイデアを構想させます。これにより、生徒は身近な生活空間を自らの手で快適にしたいという強い当事者意識をもって課題に向き合います。





**ポイント２**

等角図で「板厚を考慮する」など、中学生が製図で特につまずきやすい場面で生成AI（以下AI）を導入します。生徒がフリーハンドで描いた「構想図」を教師がAIに入力し、板厚が反映されて奥行きのある「補完イラスト」を出力して生徒へ返却します。生徒はAIの画像を参考にしながら、小グループで互いの設計図を見せ合い、よいアイデア（寸法記入や板の組み合わせ方など）をどんどん取り入れ、グループで１枚の優れた設計図へと統合する対話活動を行います。




**ポイント３**

各グループが選出した「最高の設計図（１枚）」をディスプレイに投影し、その製品の利便性や構造の工夫を全体にアピール（プレゼンテーション）します。クラス全員の挙手（評価）によって「学級内のグランプリ」を決定します。使用目的や条件を満たしているか多角的に比較・評価し、設計の妥当性を根拠（寸法や構造）に基づいて論理的に説明・省察する力を発揮するとともに、実証された効果から自らの学びを自覚し、次の個別製作への意欲を高めます。



**研究会**　**ポイント１・２・３**

「生活や社会と学びがつながるストーリー」を中核とした単元構成において、「先行する共通課題の設計・評価」という手立てが、生徒の「技術の見方・考え方」をいかに働かせているか。また、製図への抵抗感を下げるためにAIを「思考のパートナー」として教師仲介型で活用している点、生徒の主体的･対話的で深い学びにいたる姿をご覧いただきます。

# 技術・家庭 ＜新潟地区／新潟市中教研＞（家庭分野）

## 11月5日（木） 研究会開催

研究主題：生活を工夫し、創造しようとする生徒の育成
～実践的・体験的な活動を通して学び合う授業～
題 材 名：「２年：食生活」
煮魚のおいしさを追究しよう～調理の比較を通して～
会 場 校：新潟市立光晴中学校
公　　開：１学級
授 業 者：遠山　麻依子
指 導 者：新潟大学　名誉教授　高木　幸子 様
新潟市立総合教育センター　指導主事　梅津　礼 様



研究推進責任者
新潟市立西川中学校
高柳　明理



教科・領域担当者
新潟市立光晴中学校
遠山　麻依子

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

「深い学びの技法」における「思考・解決・表現」の学習過程に焦点を当て、班活動による課題解決型学習を行います。まず、思考を深めるために論点を絞って課題を設定し、解決に向けた工夫を生徒自身に考案させます。次に、その中から検証したい工夫をいくつか選択し、班ごとに分担して検証（調理）を行います。その後、自班と他班の成果物を、味・見た目・香りなどの体感を通して比較し、成果や考察を共有し合う活動を設定します。これらの一連の活動を通して、単なる題材の知識にとどまらず、調理全般における学びを深められる生徒の育成を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

煮魚をおいしく調理する工夫について「魚の生臭さを消す工夫」に論点を絞って追究課題にする。

調理の留意点とおいしさの基となる調理技法を理解し、論点を明確に設定した上で、実習に臨むことができる。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.6）

検証したい工夫をいくつか選択し、班ごとに分担して調理した異なる工夫の煮魚を試食して比較する。

比較しながら試食することで調理技法の効果を実感しやすくなり、その結果から結論を導きやすくなる。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.19）

学んだ工夫の中から、時間の有無や家族の状況などに応じて、おいしく調理する方法を選択し実践しようとする。

学んだことを生かして、自分の生活の状況に応じて適切な調理法を選択しようとしている。

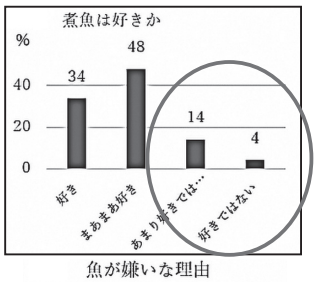
## 単元（題材）について

魚のおいしさに影響する「生臭さを消す工夫」を追究課題として設定し、工夫による結果の違いを比較して検証するための調理実習を取り入れます。工夫（調理技法）の違いによるおいしさの変化を実感することで「魚の生臭さを消す工夫」の検証結果について、調理技法の科学的根拠を理解するとともに、生徒が互いの気付きを伝え合う活動を通して学びを深めます。そして、自分の生活の状況に応じた調理法を選択できる姿を目指します。

## 単元（題材）の様子

**ポイント1**

魚は栄養豊富である反面、「生臭い」「骨が多くて食べにくい」といった負のイメージを持つ生徒も少なくありません。本題材では「煮魚のおいしさの追究」をテーマに設定し、おいしく調理するための「生臭さを消す工夫」に論点を絞って課題追究活動を行います。「様々な生臭さを消す調理技法は本当に効果があるか」を問いかけることで、生徒が意欲的に実験・検証のプロセスに取り組み、課題を解決していく姿を目指します。

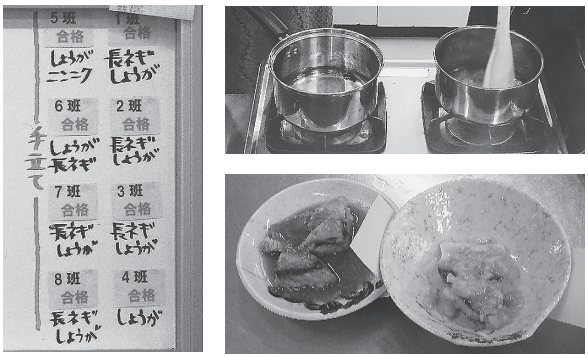



魚が嫌いな理由

- 生臭い（6人）
- 骨が多くて食べにくい（5人）
- 食感がパサパサしている（3人）
- 内臓が苦い（2人）

**ポイント2**

追究課題を比較・検証するための調理実習を取り入れます。生臭さを消す調理技法以外の調理過程については同じ条件とし、調理技法によってどのような違いがあるか、試食や仲間との交流を通して比較しながら、生臭さを消す工夫の効果を実感し、その検証結果をもとに調理技法の意義や必要性への理解を深め、関心を高めることができます。




**ポイント3**

生徒は、科学的根拠を捉え、実感を伴って理解することにより、家庭における再現への意欲を高めます。題材のまとめにおいては、家庭での実践を想定させ、各調理技法の手間や調理時間などの利点・欠点を踏まえ、自身や家族の状況、好みに応じた適切な方法を主体的に選択します。



**研究会** **ポイント1・2・3**

当日は、題材の「まとめ」を本時として公開する予定です。比較実験の結果を他班の生徒と発表し合い、同じ課題について異なる視点や情報をもったメンバーが集まって対話することで、深い学びにいたる生徒の姿をご覧いただきます。協議会では、目指す姿を実現する手立てとして本実践が有効であったか、意見交換をする予定です。

# 特別活動

## 望ましい人間関係づくりとよりよい集団活動のススメ

中学校学習指導要領において特別活動は、『集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」のための資質・能力を育成すること』を目標としています。

そのため、生徒一人一人が集団の一員としての自覚を深め、自ら考え判断し行動する力を育成することが重要です。

“特別活動の深い学び”をデザインする上で、２年次の発表に大きく関わる次の２つの視点について解説します。



県中教研　特別活動部　全県部長
新発田市立七葉中学校
校長　藤原　靖也

### １　学級活動と学校行事・生徒会活動との相互関連付け

学級活動は、生徒が学校生活の課題を見いだし、話合いを通して解決策を考え、協力して実践する場であり、特別活動で育成を目指す「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」などは日常的な学級活動の中で培われます。しかし、学級活動・学校行事・生徒会活動がそれぞれ独立して行われるだけでは、生徒は活動の意義やつながりを十分に実感できません。そこで、これらの活動を相互に関連付け、学校生活全体を通して学びが循環するように指導することが重要となります。

例えば、体育祭や文化祭などの学校行事では、協力の大切さや役割を果たす意義を学ぶことができますが、その学びを一過性にしないためには行事後の振り返りが不可欠です。振り返りでは「成功の要因」「改善点」「今後への生かし方」などを考えさせることで、生徒は自らの成長や課題を自覚できます。体育祭で「学級内の連携不足」が課題として挙がれば、学級活動でコミュニケーションや役割分担の工夫について話し合うことができます。また、文化祭で計画性の重要性を実感した場合には、その経験を学習計画や係活動の改善に結び付けられます。このように、行事で得た経験を学級活動で整理し、日常生活に生かすことで、課題発見・課題解決の力が育成されます。

さらに、生徒会活動との連携も欠かせません。生徒会活動は学校生活の向上を目指す自治的活動であり、社会参画の基礎を育む場です。生徒会の方針や重点目標を学級で共有し、「学級としてどう貢献するか」を話し合うことで、生徒は学校全体の課題を自分事として捉えられます。また、生徒総会や委員会で示された課題について学級で意見交換し、その意見を学校全体へ発信する機会を設けることで、民主的な合意形成の経験を積むことができます。

これらを効果的に進めるためには、学級活動・学校行事・生徒会活動の関連を明確にした年間指導計画を作成し、教職員が共通理解を図り、一貫した指導を行うことが求められます。

## ２　異学年交流や小中連携などの交流活動の充実

望ましい人間関係を形成するためには、同学年だけでなく、多様な年齢や立場の人々と関わる経験が重要です。異学年交流や小中連携は、生徒の他者理解や思いやりを育み、社会性や協働性を高める上で大きな意義をもちます。異学年交流の具体例として、縦割り班による清掃やレクリエーション活動、体育祭での縦割り応援団、文化祭での合同企画、学校生活オリエンテーションなどが挙げられます。これらの活動では、上級生が下級生を支援し、下級生が上級生の姿から学ぶという相互作用が生まれます。上級生はリーダーシップや責任感を身に付け、下級生は安心感や所属感を得ることができます。また、他者を支えたり感謝されたりする経験は、自己有用感の向上にもつながります。

小中連携も、児童生徒の円滑な接続を図る上で重要です。小中合同のあいさつ運動や清掃活動、中学生による読み聞かせや学習支援、小学生の部活動体験などは、互いの理解を深める機会となります。また、防災訓練や地域行事への合同参加は、地域社会とのつながりを強める場となります。こうした活動を通して、小学生は中学校生活への期待や見通しをもち、中学生は年下の児童を支える立場としての責任感を育むことができます。

さらに、地域との連携も社会参画の視点から重要です。地域行事やボランティア活動への参加は、生徒が学校外の人々と関わり、社会の一員としての自覚を深める機会となります。特別活動で培われる協働する力や課題解決能力は、将来の社会生活でも不可欠な資質・能力です。

交流活動を充実させるためには、単発の取組で終わらせず、年間を通して継続的・計画的に実施することが求められます。また、活動後には振り返りの機会を設け、自分の成長や課題、他者との関わりから学んだことを整理させることが重要です。こうした積み重ねが、生徒同士の信頼関係を深め、学校全体に温かな人間関係を築く基盤となります。そして、下級生の中に上級生への憧れが生まれ、それが学校のよき伝統として受け継がれていくのです。







## 特別活動　重点方針

望ましい人間関係を築き、集団や社会の一員として、よりよい集団生活を実現する生徒を育成する。
○ 学校における集団活動や体験的な活動の一層の充実を図る。
○ 自分の考えを発表したり、他と交流したりしながら、考えを広げたり、深めたりする場を設定する。

# 特別活動 ＜上越地区／上越市中教研＞

## 11月25日（水） 研究会開催

研究主題：少人数の利点を生かした生徒一人一人が主役の授業、教育活動の実践
～全校、縦割り異学年交流を主軸にした特別活動の展開～

単 元 名：「いじめ見逃しゼロスクール集会」
会 場 校：上越市立潮陵中学校
公　　開：全学級
授 業 者：藤巻　舞香・船﨑　　毅
指 導 者：上越教育大学　教授　阿部　隆幸 様



研究推進責任者
上越市立城北中学校
髙橋　沙友里



教科・領域担当者
上越市立潮陵中学校
藤巻　舞香

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

異学年交流での学習活動を継続して行うことによって、悩んだり、困難を感じたりする場面でも、仲間と協力し自分の力で未来を切り拓いていく姿を目指します。生徒は積極的に自らの役割を果たし、集団でしか得られない達成感や自己有用感を育むことができます。安心して話合い活動を進めることができる雰囲気をつくり、相手に自分の本音を伝えられる一歩踏み込んだ人間関係形成をすることで集団の学びを深めていきます。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント1**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3・8）

視点・論点を設定し、グループで意見交換を行うことで自分と他者の意見の類似点や相違点を整理する。

これにより、生徒は同じ事象でも見え方や感じ方が異なることに気付き、多様な見方ができるようになる。

**ポイント2**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

他者に対して自分の考えを理由や根拠を示して論理的に説明することで、本音を伝え合う活動を組織する。

これにより、生徒は互いの考えを積極的に伝え合うことができるようになり、一歩踏み込んだ意見が伝えられるようになる。

**ポイント3**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

思考ツールを使用し、意見をまとめた後、他者と自分の考えを比較しながら自分の言葉で学びを整理しまとめる。

これにより、グループの意見の共有化が容易になり、自分と他者との思いを視覚化し、理解を深めることで、自分の考えを再構築するようになる。

## 単元（題材）の様子

年間を通して小中交流だけでなく、中学校での異学年交流による授業実践を行います。意見交流できる「課題設定」をし、話合いの視点を「焦点化」することで自分や他者の捉え方の違いを知ることができます。

これにより、一人一人の捉え方には違いがあって当たり前であるという意識と、安心して意見を伝え合う雰囲気の醸成をしていきます。

ポイント１

| 月 | 内容 | 形態 |
|---|---|---|
| ７月 | 全校道徳 | 異学年交流 |
| ９月 | 全校キャリア教育 | 異学年交流 |
| ９月 | 避難訓練 | 小中交流 |
| 10月 | 魚の森づくり活動 | 小中交流 |
| 10月 | 文化祭 | 小中交流 |
| 11月 | いじめ見逃しゼロスクール集会 | 小中交流 |

---

一人一人に役割がある、話合い活動を継続的に実施します。全校道徳や全校キャリア教育の場面では、３年生がリーダーとなり積極的に班員に声をかけ、話合い活動を進める姿を目指します。下級生は安心して自分の意見を伝える経験を増やし、本音を伝えやすい雰囲気づくりを進めます。

これにより、責任をもって自分の役割を果たすようになり、お互いが支えあい、安心して活動を進めることができる関係を築くことができます。

ポイント２



---

タブレットで思考ツールが使用できるアプリを活用し、自分の意見や班員の意見を比較し、意見交流を進めます。ICTを活用することで、複数人の多様な意見を一覧で確認することができ、次の対話へ発展させることが容易になります。さらに、振り返りの際にも、手元で思考ツールを確認しながら、自分の考えを見つめ直すことも可能になり、自分の考えの変容や深まりを実感できるようにします。

ポイント２　ポイント３






---

**研究会**

小中合同の「いじめ見逃しゼロスクール集会」を実施します。小学校５、６年生と中学生を交えた少人数グループでの話合い活動を行います。小学生も含めて、一歩踏み込んだ本音での話合い活動ができるようにします。

アイスブレークから、中学生のリーダー、フォロワーが協力し温かい雰囲気をつくり、互いの意見を取り入れ、生徒自身が意見の視覚化や焦点を絞っての話合いを進めることができる姿を目指します。

ポイント１・２・３



---

話合い活動後に、振り返り活動を継続して実施し、自己の成長を感じる機会を設けるとともに、他者との関わりから学んだことを、今後の生活や社会活動の中で実践していこうとする姿を目指します。

# 特別活動 ＜新潟地区／新潟市中教研＞

## 10月22日（木） 研究会開催

研究主題：「よりよい人間関係を育む学年・学級経営の工夫」
～他との関わりを必要とする活動を中心として～
単 元 名：「学級力向上プロジェクト」
会 場 校：新潟市立葛塚中学校
公　　開：各学年１学級
授 業 者：弦弓　健太・羽二生　翔・渡邉　萌子
指 導 者：愛知教育大学　准教授　磯部　征尊 様



研究推進責任者
新潟市立藤見中学校
栗原　静奈



教科・領域担当者
新潟市立葛塚中学校
渡邊　萌子

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

今の学級の課題を自分たちで捉え、解決に向けてアクションを起こす姿を目指します。そのために、学級生活の様子を複数の観点から捉え、学級のよさや課題を可視化する「学級力アンケート」を活用します。自分たちが目指す理想の学級像と結果を照らし合わせ、学級の現状や改善すべき課題を共有します。そして、教育課程全体で「対話」を大切にする風土を育み、学級活動においても、よりよい学級づくりに向けて主体的・対話的に意思決定や合意形成を行います。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）
「学級力アンケート」によって、自クラスの課題を明らかにして、高めたい力を設定する。

クラスの現状を可視化することで、理想の学級とのギャップを認識し、解決に向けた見通しをもっていきます。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.10）
課題解決に向けた取り組みを合意形成していく。

同じ目的をもった生徒がそれぞれに考えをもち、それらを「出し合う」「比べる」「まとめる」過程の中で、豊かに対話をし、こだわりをもって解決に向かっていきます。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.20）
生徒―生徒、生徒―教師間の価値付けにより、自身や学級の成長を実感する。

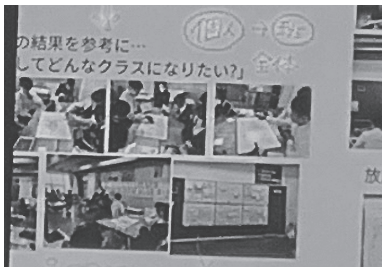
行事を通した成長を実感し、それらをいかに日常に生かすのかを考えるとともに、次なる課題を解決するために新たな見通しをもたせていきます。

## 単元（題材）の様子

生徒が自ら課題を発見し、それを自分事として捉えるために「学級力アンケート」を行います。

これにより、生徒が客観的に自クラスの状況を捉え、行事を通してどんな力を伸ばしていきたいかを考えることができるようになります。

ポイント１




---

ポイント１で明確化された自クラスの課題の解決に向けた取組を考えます。考えを「出し合う」場面ではアクションカードなどを用い、「比べる」「まとめる」場面では合意形成マニュアルなどを用いて、考えの根底にある理由を大切にしながら、よりよいものを合意形成していきます。学年により差はあれど、教師は伴走者として生徒―生徒間の対話や、生徒自身のファシリテーションが円滑に進むようにサポートしていきます。

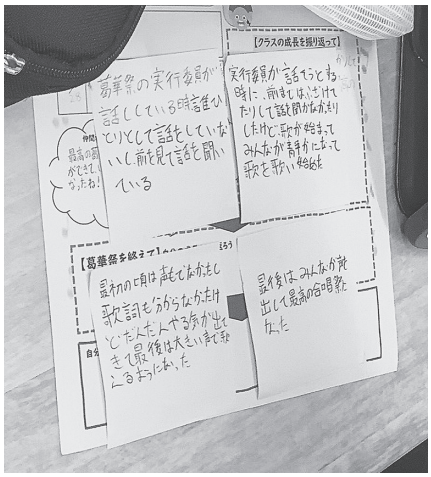
ポイント２



---

生徒が行事当日や、そこまでの過程（自分たちで決めた取組を含む）の中で、課題解決ができたのか、どんな成長ができたのかを振り返ります。教師からの価値付けだけでなく、写真などの事実を基にしながら生徒―生徒間の価値付けを通して、成長の実感を促します。そして、それらが日常にどう生きていくのか、次なる課題は何なのかに目を向けていきます。このサイクルを繰り返すことで、生徒の自己肯定感と主体的に課題解決に向けて進んでいく資質能力を育みます。

ポイント３

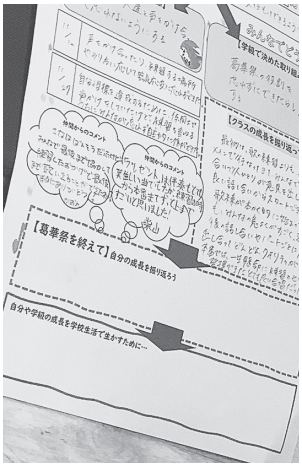



---

**研究会**

当日は体育祭を終えて、合唱発表会の成功に向けた取組を合意形成していく場面を公開する予定です。生徒が体育祭後の日常生活の中で出てきた課題を明確にしながら、学級力向上（行事の成功）のために、全員が納得のいく取組とその運営のためのシステムを決めていきます。




ポイント１・２・３

# 総合的な学習の時間

## 身近な地域の中から自ら課題を見いだし、仲間と協働し、その解決のための方策を探る。

探究的な見方や考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通し、よりよく課題を解決していく。そして自分自身の生き方を考えていくための様々な資質・能力を育むことを目標とした総合的な学習の時間。

今回の実践では、地域の実情やこれからの未来を考える活動を通して、自らの将来と地域の在り方について考える実践を進めてきました。



県中教研　総合的な学習の時間部　全県部長
新潟市立岩室中学校
校長　小塚　忠昭

### 総合的な学習の時間で育みたい資質・能力

総合的な学習の時間において各学校で育みたい資質･能力は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱に基づき、各校で独自に設定します。

そこでは、地域の特性や生徒の実態、学校の教育方針などに基づき、目標や内容、育成方針を定めていきます。また、こういった資質・能力を育成、具現化していくためにそれぞれの地域や各校の特色を生かした探求課題を設定していきます。

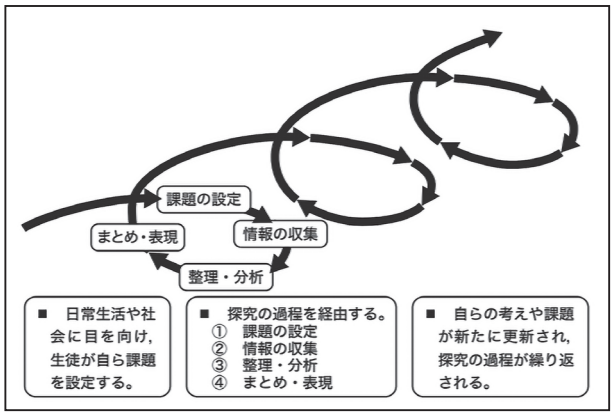
今年度は両中学校共に「地域活性」をテーマに学習を進めています。

その学習を進める過程において「課題の設定」「情報の収集」「整理･分析」「まとめ･表現」といった探究のプロセスを繰り返すことに加え、振り返りを丁寧に行うことで、生徒自らが成長を自覚することができるような手立てを講じています。

地域の方々との交流や、地域の方々から評価をもらうことで、生徒たちは、自分が学習を通してどのような力が身に付いたか、何ができるようになったかといった成長を自覚し、さらに、次に挑戦したいことを考えることができます。

そして、これらの学びを生徒自身の生き方につなげるために、「探究活動をして終わり」ではなく、自分事とし、自分の価値観や将来の行動に結び付ける学びを組織していくことも大切だと考えます。

**探究における生徒の学習の姿**



## 生徒がどのように自分事として考えられるようにしていくか。どのようにして当事者意識を高めていくか。

長岡市立寺泊中学校の実践では、「ふるさと寺泊」の魅力や、現在抱えている課題に気付き、そこから自ら問いを見いだし、地域の未来や発展を考える活動を中心に取り組んできました。

地域の現状をより深く知るための、フィールドワーク、地域の方の生の声を聞く調査活動を行うことで、生徒自らの五感を生かした活動が学びの起点となっています。

さらに特徴的な活動としては、全校縦割りで活動を行っている点です。学びの継続性だけでなく、他学年と成果の集約を行う場面があり、そこに向けて、各自が責任感や主体性をもって活動に取り組めるといった相乗効果も見ることができています。１年目の実践から、より深い学びにつなげるため、またより当事者意識を高めるためには、実際に地域の活動への参加や行政との連携の重要性といった提案も挙げられています。

胎内市立築地中学校の実践では地域の現状と課題を丁寧に調査し、学習を進めています。課題設定の場面では、地域で働く人の思いや、地域のよさを共有した上で、人口減少の現状を示し、生徒が抱く地域への肯定的な思いと、現実とのずれやギャップに気付かせることで課題意識を高めてきました。このずれやギャップが起点となり、自分たちにできることを生徒目線で提案していきます。

また、活動を単発で終わらせず、振り返りを含めた活動を繰り返し行い、その過程から新たな問いを生み出すことができ、課題意識がより自分事として捉えられていきます。

## 自分事から、自分自身の生き方につなげていくために。

総合的な学習の時間は、単に正解を見つけたり、課題を解決したり力を育てるだけでなく、探究を通して自分自身を見つめ、他者や社会との関わりを考え、よりよい人生や社会を主体的に創っていこうとする姿勢を育むことにも大きな意義があります。さらに、自分事として捉え、当事者意識をもち、その学びをこれからどう生かすかを考え続ける力を育てることが必要になってきます。

そのためには、地域教育コーディネーターやCSをはじめとした地域社会との連携、協力を得ながら学習を進めていくことで、共にこれからの地域社会について考えていけるはずです。

**【自分事として考えていくために】**

1. 目の前の課題と自分とのつながりを考えてみる。
2. 多様な生き方に触れる、交流する。
   共に考える。
3. 社会や地域への参画を経験する。
   共に活動する。
4. 振り返りを通して自分の成長を自覚する
5. 今の自分に何ができるかを考える。
6. 少しでもできそうなことを行動に移す。
   たとえ今はできなくとも、思いをもち続ける。

## 総合的な学習の時間　重点方針

学習過程と評価を中核に、主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導を推進する。

○ 学習過程において、「課題設定」を工夫し、「協働的な学習」と「言語活動」を適切に位置付けることを通して、探究的な学習の充実を図る。

○「育てようとする資質や能力及び態度」の視点に配慮した評価の観点を定め、それに基づいて生徒の具体的な学習状況を想定した評価規準を設定し、学習評価の充実を図る。

# 総合的な学習の時間 ＜中越地区／長岡市・三島郡中教研＞

## 11月24日（火） 研究会開催

研究主題：『「深い学びの技法」を基に、未来の地域発展を考える総合的な学習の時間』

単 元 名：「寺泊の魅力アップ大作戦」

会 場 校：長岡市立寺泊中学校
公　　開：全学級
授 業 者：庭山　巧夢
指 導 者：長岡市教育センター　指導主事　山田　真弘 様



研究推進責任者
長岡市立越路中学校
丸山　英将



教科・領域担当者
長岡市立寺泊中学校
庭山　巧夢

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒が「ふるさと寺泊」の魅力や現状の課題と向き合い、調べ学習や校外学習を通して、未来の地域発展をより深く考え続ける姿を目指します。自ら問いを見いだし、探究的な課題設定・解決場面に主体的・協働的に取り組むとともに、地域の方の声を取り入れ、より現実的な提案を行うことが生徒の深い学びにつながると考えます。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント1**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

調べ学習や地域での取組を知る活動を通して、未来の地域発展に焦点を当て、学習課題を設定する。

これにより、生徒は寺泊の魅力や課題に気付き、当事者意識をもって学習課題を設定するようになります。

**ポイント2**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.5）

魅力発信･課題解決のための計画書を基に、実体験を伴う活動を組織する。

これにより、生徒は計画と検証結果を比較することができ、新たな課題を見いだすことができるようになります。

**ポイント3**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

生徒の再考案に地域の方の助言や視点を掛け合わせ、よりよい方策へと練り上げる。

これにより、生徒は地域の方からの問いかけや助言を契機として思考が揺さぶられ、仲間とともに議論を重ねることで、自分たちの提案をより本質的な課題解決へと深めていくようになります。

## 単元（題材）の様子

下学年時での地域の体験学習や地域の方の講話を通して寺泊の現状に気付かせ、その魅力や課題を自分事として捉えさせます。

これにより、生徒は自分たちができることを思い描き、主体的に学習課題を設定できるようになります。

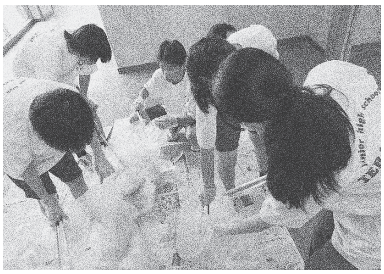
ポイント１



追究したいテーマを基に縦割り班を組織し、下学年時の地域学習で得た情報を基に、魅力発信・課題解決のための計画書を作成させます。同時に実践に必要な事前準備や手立てを考察させます。

これにより、自ら社会に関わり参画しようとする心を育むことができます。さらに、自分たちの計画･実践を振り返ることで、「自分たちの取組は寺泊の魅力アップにつながっているか？」「地域の生の声が必要ではないか？」など、協働的な学びから新たな課題を見いだすことができると考えます。

ポイント２

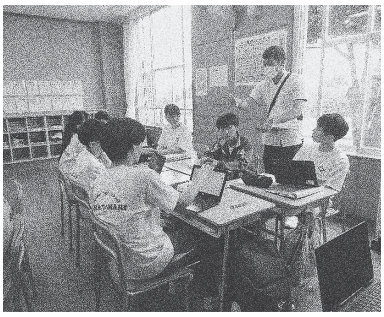





実践後、評価・検証のための１次アンケート（感想や要望）を地域の方に配付し、自分たちの振り返りと地域ニーズを合わせた整理･分析を行わせます。計画書の再構築に向け、十分なデータが得られない班は、追加の調査視点を盛り込んだ２次アンケートを独自に作成・実施させることで、探究に対する主体性を高めます。さらに、寺泊コミュニティー推進委員会や地域おこし協力隊等の助言を取り入れつつ､班長（ファシリテーター）を中心に「①実践」「②成果･課題」「③来年への提言」を１枚の模造紙に集約させます。分析データや地域の方の助言を随時追記して思考の変容を視覚化することで、班内での共有と練り上げが円滑になります。

このように、探究のサイクルを複数回回し、思考の過程（変容）を共有・可視化することで構想の質が高まり、地域との持続可能な関わりを見据えた「深い学び」に到達できると考えます。

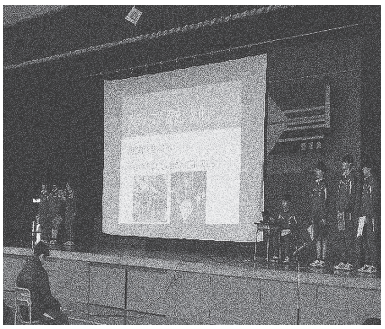
ポイント３



### 研究会

当日は、生徒の再考案を、地域の方とともに練り上げる授業を予定しています。対話を通して、よりよい方策を考える生徒の様子をご覧ください。

ポイント１・２・３





# 総合的な学習の時間 <下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研>

## 10月27日（火） 研究会開催

研究主題：探究の学習過程の質を高める授業づくり
～地域のよさを再確認し自分事として
未来を構想する学びを通して～

単 元 名：「３年：築地地区活性化プロジェクト」
会 場 校：胎内市立築地中学校
公　　開：３学年
授 業 者：鈴木　　碧
指 導 者：胎内市教育委員会　学校教育課
管理指導主事　池田　裕之 様



研究推進責任者
胎内市立乙中学校
佐藤　義美



教科・領域担当者
胎内市立築地中学校
鈴木　　碧

## 「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒が自らの問いを起点に学習を進め、課題解決的な学習活動の発展的な循環を通して物事の本質に迫る探究的な学びができるように「学習過程の質を高める」工夫をしていきます。そのために、学習過程の「課題設定」「情報収集」「整理分析」「まとめ表現」を生徒自身が主体的に、かつ自律的に回し続ける状態へと高め、一つのプロセスで得た気付きや疑問が次のプロセスへの内発的な動機となり、地域活性化のために「もっとやりたい」「もっと解決したい」という生徒の姿を目指します。

## 主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）




**ポイント１**（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1・2）

地域の「よさ・可能性」と「問題状況」との「ずれ（ギャップ）」に出会わせ、課題意識を高める活動を行う。

これにより、生徒は「もっとやりたい」「解決したい」という切実感や解決の必要感が生まれることになります。

**ポイント２**（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.12）

地域活性化の実践を複数回行い、「実践と振り返りの行き戻り」のプロセスを仕組む。

これにより、生徒は実践から、改善点を振り返ることができ、さらに次の実践へつなげることができます。

**ポイント３**（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.20）

「単元を貫く視点」（地域のよさの再確認、地域活性化、未来の構想）の問いで振り返りを行う。

これにより、生徒は振り返りから「次時は何を追究するのか」という新たな問いをもつことができます。

## 単元（題材）の様子



生徒だけで地域活性化について話合い活動を行った後に、実際に地域活性化に尽力する方々の「思いや願い」を聞き、その生き方への「あこがれ」や「尊敬」を高める場面を設定します。その上で、生徒に地域の問題状況という「現実」に出会うようにします。このように一度高まり安定した生徒の思いを「ゆさぶる」働き掛けにより、「生徒の願いと現実とのギャップ」を自覚させ、「もっとやってみたい」「解決してみたい」という切実感や解決の必要感が生まれ、課題意識を高め、探究の学習過程を自走させる原動力につなげることになります。

地域の課題を見いだし、生徒同士で共同しながら解決策を構想、実践していく力を育てます。

**ポイント1**

---

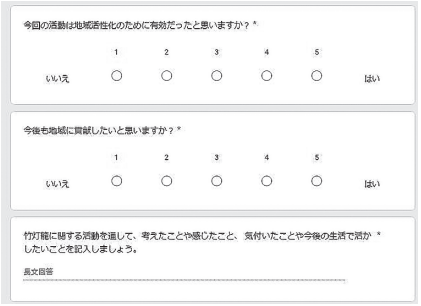


生徒が自ら考えた地域活性化のための実践を複数回実践できる単元構成にし、「実践と振り返りの行き戻り」のプロセスを組んでいきます。生徒が1回の実践で描くアイディアは、多様で広がりがあるものの、拡散していたり見通しが不十分であったりすることがあります。そこで実践を複数回行うことで、その都度実践を振り返り改善点を考え、次の実践へつなぐことができます。

生徒の課題意識がより「自分事」として捉えることにつながり、知識を更新し、概念知識を獲得することができます。

**ポイント2**

---




地域活性化のために「やってみたい」「解決したい」という思いを、単元全体を通して持続・発展させるため、1単位時間及び、1単元の終末に、「単元を貫く視点」（地域のよさの再確認、地域活性化、未来の構想）に迫る問いで振り返りを行います。

毎時間の振り返りを単元全体のゴールと結び付けることで、「今日明らかになったことから、次時は何を追究するのか」という新たな問いを生み出すことができ、自分自身の学びを自覚（メタ認知）する力を育むことができます。

**ポイント3**

---

**研究会**



研究会当日は、地域活性化のための最後の実践へとつなげる「整理分析」の学習場面を公開します。生徒は、10月に実践した1回目の「築地カフェ（仮名）」経験から、11月上旬に実践する2回目に向け、実践がよりよいものとなるために、意見の交流をしていきます。

今までの実践から、生徒がより地域活性化のために「自分事」へとして深まり、主体的に活動している姿を公開できるようにしたいと思います。

# 社会

## 「見方・考え方」を働かせた単元デザインを通して深い学びを実現します。

深い学びの実現に向けて社会事象の概念の理解、確かな情報に基づき適切に調べまとめる技能を高めます。同時に資料や概念に基づき自らの考えを批判的に捉えなおし表現する資質能力を育成します。



全県部長
魚沼市立広神中学校
校長　小森　一秀

### ▶上越地区／上越市中教研

#### よりよい社会の実現に向けて！！



研究推進責任者
上越市立八千浦中学校
佐藤　直己



教科・領域担当者
上越市立雄志中学校
堀内　駿

生徒が社会的課題を当事者として捉えられるよう「情意」に着目します。多様な視点から生じる葛藤や、他者への思いを大切にしながら、当事者意識に基づいた納得感のある意思決定へ導く授業を考えています。

### ▶新潟地区／新潟市中教研

#### 深い学びの技法を基に！



研究推進責任者　兼　教科・領域担当者
新潟市立上山中学校
新通　晋

深い学びの技法に着目します。プレ授業、公開授業の中で学習内容を獲得しながら、技法を活用できるように授業づくりをしていきます。

### ▶中越地区／魚沼市中教研

#### 「深い学び」を目指して！



研究推進責任者
魚沼市立広神中学校
宮下　晃



教科・領域担当者
魚沼市立堀之内中学校
木村　亜樹

資料から情報を読み取り、情報を根拠にした対話を積み重ねることで、生徒が自他の考えを吟味し合い、考えが深まっていく姿を目指し研究を進めます。

### ▶下越地区／村上市・岩船郡中教研

#### 地域の課題を多面的・多角的に考察！



研究推進責任者
村上市立朝日中学校
五十嵐　雅人



教科・領域担当者
村上市立村上第一中学校
鈴木　唯子

様々な立場の考えを比較･関連付けながら、「自分事」としての考えをもった姿を深い学びと捉えました。その実現に向けて研究を進めていきます。

# 理科

## 「なるほどそういうことか」。知識等の統合的な理解と総合的な発揮に向けた理科授業。

生徒がどんな姿を見せれば深い学びが成立していると言ってよいのでしょう。それを教師が明確にイメージし、そのための手立てを理科部で議論する、引き続きそんな部会を目指します。



全県部長
佐渡市立金井中学校
校長　福井　晴人

### ▶上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研

### 協働活動による深い学びを促進する授業づくり



研究推進責任者
柏崎市立松浜中学校
千野　瑞貴

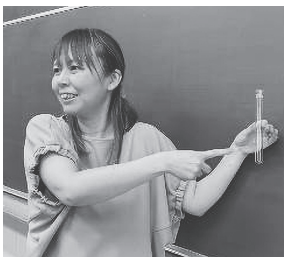


教科・領域担当者
柏崎市立南中学校
小山　　翼

モデルや図を活用しながら自分の考えを表現し、それを他者に伝える活動を通して、思考を練り合いどの生徒も深い学びにいたる授業を目指します。

### ▶新潟地区／新潟市中教研

### 探究学習による深い学びの促進



研究推進責任者
新潟市立新津第二中学校
渡邉　真巳



教科・領域担当者
新潟市立白根北中学校
白井　美英

単元における目指す生徒の姿や単元デザインについて検討しました。「探究の過程」を意図的に位置付け、繰り返すことで、生徒の深い学びの実現を目指します。

### ▶中越地区／見附市中教研

### 課題設定と表現活動の工夫



研究推進責任者
見附市立見附中学校
槙田　宏治



教科・領域担当者
見附市立南中学校
鍛治山　凌

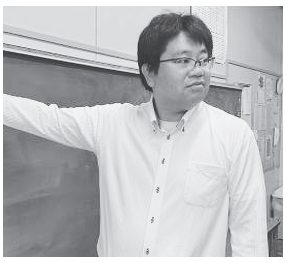
生徒が主体的に探究したくなる課題設定を工夫するとともに、「深い学びの技法」を活用して、生徒が自分なりに工夫して学びを表現する授業の実現に向けて取り組んでいます。

### ▶下越地区／佐渡市中教研

### 生徒が学びを自己調整する授業



研究推進責任者
佐渡市立両津中学校
村田　健輔



教科・領域担当者
佐渡市立金井中学校
大坂　和広

「見通す」「自走する」「学びの現在地を評価する」活動を工夫し、深い学びにいたる授業や単元計画を提案できるように取り組んでいます。

# 英語

## 「深い学び」を積み重ね、生徒が英語を活用できるようになることを目指します。

コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して伝え合ったりすることができる力を養います。



全県部長
長岡市立小国中学校
校長　荒川　高明

### ▶上越地区／上越市中教研

#### 一貫性のある文章を書くために！



研究推進責任者
上越市立春日中学校
矢坂　愛子




教科・領域担当者
上越市立東頸中学校
鶴巻　華恵

多くの生徒が苦手意識をもつ「書くこと」に挑戦。自分の考えをもって、一貫性のある文章を英語で書くことができる生徒の育成を目指します。

### ▶新潟地区／新潟市中教研

#### 英語科の「深い学び」を追究！



研究推進責任者　兼　教科・領域担当者
新潟市立白南中学校
山﨑　寛己

教科書を活用し、４技能の有機的なつながりを意識した活動を通して、英語科の「深い学び」を実現する授業研究を進めていきます。

### ▶中越地区／長岡市・三島郡中教研

#### 表現活動を通して「深い学び」へ！




研究推進責任者
長岡市立宮内中学校
佐藤　麻美




教科・領域担当者
長岡市立西中学校
岡村　舞雪

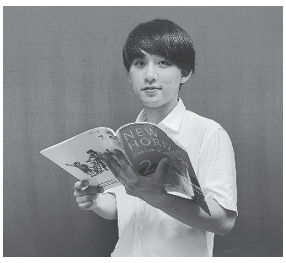
「目的・場面・状況に応じて、伝えたい内容を適切な表現を用いて伝えようとする生徒の育成」をテーマに、市内の英語科の先生方で公開授業をリレー形式で行い、授業研究を進めていきます。

### ▶下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研

#### 思考や表現を深める活動の工夫！



研究推進責任者
胎内市立黒川中学校
中川　絵里



教科・領域担当者
阿賀野市立笹神中学校
石川　凌

「つながる」をテーマに、生徒の「もっと知りたい」、「世界と繋がりたい」気持ちを伸ばします。そのために、「思考や表現を深める活動」の手立てを工夫します。

# 音楽

## 表現と鑑賞を往還し、協働的に合意形成する音楽づくり

音楽的な見方・考え方を働かせ、知覚・感受したことを根拠に対話を重ね、よりよい音楽表現を共に探究します。



全県部長
新潟市立中之口中学校
校長　藤井　　章

### ▶中越地区／長岡市・三島郡中教研

#### 互いに根拠をもって表現する！



研究推進責任者
長岡市立西中学校
山口　奈々



教科・領域担当者
長岡市立東北中学校
高橋　彩佳

楽曲の背景やリコーダーの特性を手掛かりに、対話を通して音楽的な見方・考え方を働かせ、互いのよさを、根拠をもって認め合いながらリコーダーの音楽表現を深めます。

### ▶下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研

#### 探究と振り返りによる「深い学び」の実現



研究推進責任者
阿賀町立三川中学校
和田　絵梨香



教科・領域担当者
五泉市立五泉中学校
阿部　亜紀子

音楽的な見方・考え方を働かせる探究活動と、自己の振り返りの積み重ねを通し、生徒一人一人が思考を深めて主体的に表現を構築し、生涯にわたって音楽と豊かに関わる「深い学び」の実現を目指します。

# 保健体育

## 対話と協働で育む、豊かなスポーツライフの実現

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現できる資質・能力を目指し、生徒一人一人が「運動することの楽しさ」を実感できる授業づくりに取り組みます。



全県部長
南魚沼市立大和中学校
校長　南雲　真一

### ▶上越地区／糸魚川市中教研

#### 仲間と協働する体育の授業を目指します




研究推進責任者
糸魚川市立能生中学校
室橋　健太郎



教科・領域担当者
糸魚川市立糸魚川中学校
渡邉　勇太

子どもたちが協働しながら課題を解決する学習活動を通して、『深い学び』にいたる授業の実現を目指します。

### ▶新潟地区／新潟市中教研

#### 仲間と対話し、分かる・できる！



研究推進責任者
新潟市立早通中学校
角　　直也



教科・領域担当者
新潟市立亀田中学校
小川　詩織

ICTを活用したグループ活動を通して、生徒同士が互いに助言し合いながら運動のコツをつかみ、「分かる・できる」を実感できる授業づくりを目指します。

# 学校保健

心の健康に焦点を当てた「生きる力」を育む保健教育。養護教諭の専門性を生かしながら、深い学びにいたる授業を追究していきます。



全県部長
新発田市立第一中学校
養護教諭
渡邊　純代



## ▶中越地区／小千谷市中教研

### 保健教育における深い学びに向けて



研究推進責任者
小千谷市立千田中学校
金澤　日呂子



教科・領域担当者
小千谷市立小千谷中学校
大平　愛



困難な出来事や不安、ストレスに対処する力を育むため、自己理解を深めながら、仲間との関わりを通して心の回復力を高める授業づくりを目指します。

## ▶下越地区／新発田市中教研

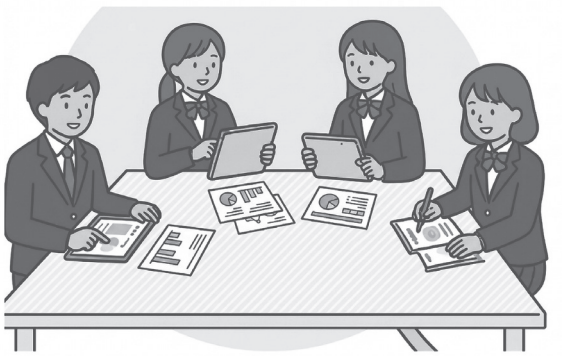
### 深い学びにいたるための心の保健教育を実現！



研究推進責任者
新発田市立本丸中学校
小池　理恵子



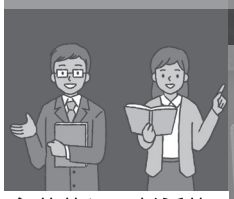
教科・領域担当者
新発田市立川東中学校
冨岡　礼



対人関係に課題があり、心の不調を抱える生徒が増加しています。そこで、深い学びの技法の手立てを講じて、感情と社会性の学習を取り入れたコミュニケーションスキルを向上させるための授業づくりを目指します。

令和８年度　新研修事業

# 新潟県中学校教育研究会



主体的に、対話的に、そして、深い研修をつくってみませんか？

# 自主研修

## ～教科・領域部会の自主的な研修活動の推進を目指して～

## 自主研修とは？

令和８年度から令和10年度の３年間、「自主研修」の事業を試行します。これは、各郡市中教研の教科・領域で自主的に研修活動を行いたい部会を支援するためのものです。

１年間、部会で設定したテーマで自主的に研修に取り組み、成果を共有します。郡市中教研の教科・領域の部会で行う自主的な授業参観、授業協議会などでかかる出張旅費を支援する制度になります。

**自主研修**
**（1年間の研修・自主的な授業実践・参観授業など）**

①ねらい
・郡市中教研の教科・領域の部会の自主的な研修を支援するため。
②内容
・部会でテーマ（例：教師の発問の工夫、個別最適な学びの工夫、教師間での実践共有の工夫など）を設定し、1年間、自主的な研修に取り組む。
③募集対象
・各郡市の中教研で認められている教科・領域部会。
④応募
・応募は、郡市中教研を通して申請する。
⑤支援
・自主的な研修にかかる出張旅費を県中教研から補助する。
※全体の申請数によって、補助額2万を上限とし、全部または一部の旅費を補助
⑥その他
・活動を授業情報誌Classなどで紹介する。

## 申し込み方法は？

### ステップ１



**県中教研のHPからデータのダウンロード＆作成**

・郡市中教研で認められている教科・領域部会の代表者が申請します。（※指定研究を受けている部会は不可）
・県中教研のホームページ・「自主研修」にアクセスします。
・「申請書」と「様式①②自主研修計画・報告」をダウンロードします。
・必要事項を記入し、申請書を作成します。

### ステップ２



**所属先の郡市中教研事務局に申請書の送付**

・代表者は所属する郡市中教研の事務局に「申請書」と「様式①②自主研修計画・報告」をメールで送付します。
※郡市中教研事務局を通さず申請した場合は受理できません。
・郡市中教研事務局は申し込みを取りまとめ、県中教研事務局に送付する。

### ステップ３



**県中教研から申請した部会に連絡、その後、活動開始**

・県中教研事務局で全県の申請数に応じて、旅費の補助額を調整します。補助額を２万円を上限とし、全部または一部の旅費の補助します。
・県中教研事務局から申請した部会の代表者に受理ならびに活動の連絡をします。
・部会ごとに活動を開始します。

# 編集後記



新潟県中学校教育研究会
理事長　鈴木　善士
（新潟市立木戸中学校 校長）

## 同じ教科・領域の仲間と学び合うことの意義

会員の皆様はご承知のとおり、教育公務員特例法第21条第１項では、「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と定められています。しかし、日々の様々な業務に追われたりすると、翌日の授業の準備等で精一杯になってしまい、教科や領域の研究や修養に費やすエネルギーを確保するのは自分一人ではなかなか難しい、というのが実情ではないでしょうか。

新潟県中学校教育研究会は、昭和38年に発足し、令和８年で創設63年目となります。諸先輩方の長きにわたる努力によって、本県の中学校教員の資質向上に多大な貢献をしてきました。特に、中学校は教科担任制であることから、校内での研修だけでは限界があります。他校の先生の優れた実践を実際に参観したり、同じ教科・領域の先生方と情報共有したりする機会が毎年確実に確保されているということは、本県の中学校教員にとって何物にも替えがたい宝です。時代によって研修の方法等をリニューアルしながらも、末永くこの営みを続けていくことが大切です。

本年度は、「深い学びにいたる授業～『深い学びの技法』を基に構成する学習過程に着目して～」と、昨年度から主題と副題を継続しています。研究の方向性を継続することが、現在の学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、そして、次期学習指導要領で求められている「統合的な理解・総合的な発揮」に向けた授業改善につながると考えるからです。

深い学びの技法を基に手立てを構成することは、若手の先生からベテランまで１時間の授業を組み立てる際に、分かりやすい指針となります。さらに、学習過程の充実を通して、学習内容を精緻化、概念化、身体化することを目指すことは、「深い学びにいたる授業」の質を高めることになります。

また、授業の成果と課題を明らかにするファシリテーションによる協議会も、継続して行っていきます。参加者が生徒の実際の様子を基に協議することを大切にすることにより、教師同士の深い学び合いが充実し、教師の研究・研修がより探究的になることを期待しています。

この度、熊本大学大学院教育学研究科　特任教授　前田　康裕 様より特別寄稿を頂戴いたしました。ご多用の中、ご寄稿賜りました前田様に深く感謝申し上げます。前田様は、授業づくり・学習方略に精通し、「まんがで知る　デジタルの学び」シリーズなど、多数の著書で知られます。本稿寄稿文もいつでも読み返していただき、授業観と教師の学びをいかにアップデートしていくか、会員の皆様の参考にしていただければ幸いです。

本研究会は、２年間の指定研究推進事業と、その研究成果を全会員に伝える「授業情報誌Class」の両輪でこれからも本県中学校の授業づくりを支えていきます。指定研究に携わられた関係者の皆様と、貴重な原稿を頂戴した各全県部長・副部長・指定研究会場校の皆様、各研修推進委員の皆様、編集に携わった事務局に感謝を申し上げ、編集後記と致します。